
涼宮ハルヒの疾走

椎野 千洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの疾走

【Nコード】

N5146C

【作者名】

椎野 千洋

【あらすじ】

宇宙人未来人超能力者と一緒に遊ぶのが目的という、正体不明な謎の団体SOS団、その目的を忘れ全て勝つという信念を持つ涼宮ハルヒが体育祭に興味を持った。やれやれ。奔走する俺達の身にもなってほしいね。しかもクラブ対抗リレーに参加とは ビミョーに非日常系学園ストーリー* 『続・ミステリックサイン』も連載中

ブローグ

俺達SOS団が何の滞りもなく二年へと進級したまでの道のりは、まあなんとも忙しく幾つもの非日常があったわけで、未来的、超能力的、ましてや宇宙的要因が天文学的な公式から導き出される答えのように絡み合っていたのは、すでに多くを語るまでも無く理解の及ぶところだろう。もちろんその中心には涼宮ハルヒという太陽系の、まさに太陽の如しエネルギーで君臨している奴がいたのは、エジプトのピラミッドのように動かしがたい事実である。

だが何も全ての日々に未来的、超能力的、そして宇宙的な事があるんでいたわけじゃない。その中には何の非日常もないSOS団としての活動もあったわけだ。俺が古泉と共に奴の持ち込んだ古めかしいボードゲームに勤しみ、朝比奈さんがお入れになったご利益がありそうなお茶をすすりながら、なにやら医学的な病名が表紙になっている本を黙々読みふける長門と、また俺に迷惑がかかりそうなことをパソコンのディスプレイと睨めっこしながら模索しているハルヒを眺めるって日常が。

はたから見たら実に正常な、やる気の無い文芸部の活動に見えなくも無いだろう。それはハルヒがなんだかんだで学校に溶け込んでいるという証明だと俺は思う。入学当初のハルヒには考えられない未来かもしれないな。

でもこれはあくまで狭い範囲の、SOS団というハルヒが作った空間での話しなわけで、現にハルヒはクラスのイベントにはちっとも興味を示していなかった。一応ハルヒの尊厳を守るために言うておくが、今はけっこうクラスにも興味を持っているから、成長はしている。

しかしだ、ここまでハルヒがクラスに溶け込んできたのにも色々越えねばならんハードルがあったわけで、それについてハルヒ以外の団員が奔走していた事実が千年杉の根よりも深く存在している

事を思うと、正直感謝の1つでもしてほしいと思う今日この頃だが、思えば去年一番その奔走したのが体育祭だった。

そしてハルヒがクラスのイベントで初めて参加の意思を垣間見せた瞬間でもある。

てな訳で、この話は去年の九月の初め、終わりの全く見えなかった夏休みの終わりを向かえてすぐの、残暑が残る学期明けホームルームまでさかのぼる。

第一章

校長の有り難い訓示を聞き流し、夏休み明けの新学期早々にホームルームでやる事といえば、まあ席替えってのが規定路線であるわけで、本来ならそれなりに盛り上がるイベントになるのが普通だろう。だが俺限定で言えば、たちの悪い縛りの効いたルールで、結果の判りきったポーカーをするようなものにしかないから嘆かわしい。

「ちよつと、あんた呪いでもかけてるんじゃないでしょうね。なんでまたあんたがあたしの前で居座るのよ」

などとハルヒはさも不機嫌そうな気配を漂わせつつも、決して怒ってはいないのであるう微妙な表情を浮かべてそう主張する。

さあな、そんな呪いじみた事を出来そうな存在を何人か心当たりはあるが、俺にそんな属性は無い。

「いいじゃないかハルヒ、後ろの窓際なんてポジション中々当たるもんじゃないぞ？ なんならこの謎について考えてみるか？ 週末に街中を謎探しするよりは建設的かつ現実的に思うね」

「バツカじゃないのあんた。こんなの単なる数学の確立じゃない。あたしが求めているのはもつとこうスケールの大きな謎なのよ？ こんな席替えの確立なんて謎解いたって数学者にもなれないわよ」

バカとはなんだ、そもそも席替えについて話を振ったのはお前じやなかったか。

「つとにつままないわねーなんか面白い事ってないかしら」

そんなに面白い事がこんな夏休み明けのホームルームにあるわけが無いだろう。周りを良く見る、みんな休みボケがとれずにうたた寝しているじゃねえか。谷口のアホはもちろん国木田だって眠そうにしている。ここは大人しく寝る時間なんだよ。

そんなしょうもないやり取りをハルヒとしながら、俺はさっさと放課後になって朝比奈さんの入れたお茶が飲みたいと願っていたの

だが、時間つてのは暇な時ほど長く感じる。物理法則と関係の無いところで精神が病んでるのだろうと俺は思いつつも、担任の岡部は眠いだけの時間を眠いだけの話をする事によって間を繋いでいた。

そんなこんなで岡部の話が九月の下旬にある体育祭の話になったのは、もう限界だと感じた岡部が得意分野であるスポーツの話をしたかったのだろうことは分かりきっていた。しかも競技の参加まで早くも決めようなんて按配で話を進める。

だがこの一年五組つてのはこういったクラスのイベントには冷淡なのだ。そもそも学級委員長だった朝倉がいなくなっただけからは、それこそヒトラーのいなくなったナチスドイツ並みの急進力しかない。それなのに競技者なんて集まる訳がないだろう。俺はそう思っていた。

でもそれが大きな誤算だった。

俺が岡部のテンパった体育祭の競技者決めについてハルヒにどう思うかなんて聞いちまったのはその慢心からだ。

「ふーん体育祭ね、そうね悪くないじゃない。何事も勝つていうのが人間大事なのよ。勿論この考えはSOS団も推奨してるし、タダで大体参加できるものには参加しないと損だわ！」

そういつて夏の残暑が涼しく感じるのではないかと思えるほど、燦然と輝く笑顔を俺に向けた。

SOS団がそんな思想を推奨してるとは初耳だね。どうせ思いつきで口にしたのだろう。だが一度これだと思ったら、たとえば目の前に戦車がいようと突き進むのが涼宮ハルヒである。岡部が黒板に殴り書きした各競技、短、中、長距離走、そしてスウェーデンリレーの走者について候補を募る際、まるで伝説の剣を手にした勇者の如し勢いで天高く挙手し、全てに立候補をした。

終いにはこれからの展開ついて暗澹たる思いを抱いている俺に対しても、

「あんた足速かったわよね、じゃありレーの走者決まりね！ ついでだから他の競技も出なさいよ。これで良いじゃない決まりよ！」

なんて言って事実関係とは異なる現実をかつてに創造し、黒板には俺の名前がハルヒに連なって書かれ、寒々しく沈黙をまもっていたクラスを凍りつかせた。

ここで参加しないなどといったらそれこそ蛇に睨まれた蛙が無駄な抵抗を見せるのと同じ事だ。見てみるよ、せっかく切り出した話題をあつという間に失って困惑した岡部の顔を。終いには俺達以外の選手をクジによって決めるといふ席替えの延長のような事を行いやがった。

その結果については、誰かが裏で操作したのではと思えるほど、スポーツを得意とする連中が見事に各競技に参加する事となったのだが、そこに何かが働いたのかについては、追求をする必要もない。この時はまだハルヒ一人が先走ってるだけで、体育祭なんて平凡なイベントにそこまでの重労働はないだろうと俺はふんでいた。リレーにしたって今までの非日常的イベントに比べれば実に日常的な学校でのイベントである。間違っではないだろう。

だがその考えはホームルームが終わり、いつもの部室に活動拠点を移してすぐついた。

その後のホームルームは文字通り何事も無く終わり、まあ終わってみると実に短い時間でしかなかった事を実感しつつも、帰りの挨拶と同時に蜘蛛の子を散らすような形で生徒たちが帰路や部活へ向かう中、俺といえはなんとも言いがたい立場の団体の活動場所へと足を運ぶのだが、本日はその流れが少し違った。

「キョン、あたしはちよつと用事があるから先に部室に行つてて」ハルヒはそれだけ述べて、一目散にどこかへと走り去っていった。普段俺はハルヒと連なって部室までの道のりを行くのだが、こうい

う光景はどうも嫌な予感がしてならない。ハルヒが活発なことで、俺のダウンナーな気分は美しいまでの反比例をみせるのは、これまでの経験で学んだ事の1つである。

だがまあ今日は購買も食堂も開いていない。校外の駄菓子屋にでも買出しに言ったのだろう。そう廊下を一人歩きながら納得した。

「お前もほんと災難な男だよな、体育祭に参加までして、終いには今日は何日だなんて質問までする始末だ。涼宮なんかとつるんでるから自業自得といえればそれまでだけだな！」

こんな事を混雑極まりない廊下で語りかけてくる男は俺の知る限り一人しか居ない。

「谷口、なんならお前も競技に参加してみたらどうだ？ ここの所運動という運動をしていないだろ」

「キョン、お前は本当にかわいそうだな。体育祭といえば女子たちの輝かしい体操着姿を拝める数少ないチャンスじゃないか。それを何で汗を流して走らにやなんのだ」

俺はお前のように解放的には生きていないんだ。それに俺には朝比奈さんのメイド服姿を毎日拝めるんでな、そこまで飢えてはいないのだよ。

そんなしょうもないようでいて、実に素晴らしい優越感に浸りながら谷口の喧しいトークを聞き流して、俺は通常より若干静かな部屋への道のりを歩いた。

部室では今頃長門が独り黙々と隅で読書をしているか、あるいはその横で朝比奈さんが健気にメイド服へ着替えている頃だろう。俺はなんとなくそう予想していた。だが部室に着いて一番最初に出会ったのは、まるで深夜のB級映画に出てくるたそがれた主人公のように部室の扉にもたれる形で腕組みをしている古泉だった。

「どうした、さっさと部室に入ったらどうだ。それとも何か後ろめたい事でもあるのか？ 悪いが俺はお前の相談に乗る気はない」

「いえ、あなたと少し話がしたかったですよ。特に悩みはありません」

そうかい、ならこんな暑いだけの廊下で立ち話も馬鹿みたいだ。
とつと中に入っても文句など誰も言わんだろ。

俺は古泉がもたれていた扉を開け、中をぐるりと確認しながら入った。珍しい事に長門がいないし、予想に反して朝比奈さんもいない。

「まあ座りましょう。僕もあなたも一万五千何回も夏をさまよったんです。しばしの休息もあっていいでしょう」

古泉はテーブル越しのパイプ椅子に腰を下ろす形で、俺は若干の残念さを感じつつも、いつものように対面に腰を下ろした。

「俺的にはお前と話していても、そこまで休息にはならないね」

そんな会話からスタートをしつつも、昨日までの終わり無い夏休みについてを、古泉と国会での討論程度には話し合い、一応の納得と決着を付けた。その後古泉のノーレートでのポーカーの提案に乗って、俺がバカ勝ちした話は以前にも少ししたと思うので、ハシヨっておこう。

最終的に他の団員が部室へ訪れたのは、掛け金の設定ありであれば古泉の頭の毛まで引っこ抜くほどの状態になった頃だった。

「すみません、遅くなりました……ってあれ？ 古泉君とキヨン君だけですか？ 涼宮さんと長門さんはまだなんですね」

そう天からの啓示を伝える天使のようなお声とお姿で、朝比奈さんが登場なさった。

「ええ、長門は知りませんが、ハルヒはホームルームが終わってすぐどっかに飛んでいきました」

「そうですか……あ、待っててくださいね今お茶を入れます」

そう朝比奈さんは仰り、ラックに掛かったメイド服を取りに向かわれ、それを合図にしたような形で俺と古泉は部室の外へ足を運んだ。

「朝比奈さんやハルヒはともかく、長門が来ないのは珍しいな」

「今日は新学期の初日ですからね、クラスによって活動内容の差はあるでしょう。それに力を使わないで済むと長門さんが判断したの

であれば、それは今が安定しているという事です」

古泉にしてはまともな意見だ。昨日の今日で何かが起こったரசさすがに心が折れる。

「噂をすればほら、来ましたよ」

そう爽やかすぎる笑顔で俺へ視線を送ってきた。俺は廊下の先に視線を向け、その姿を確認した。

「遅かったな、ホームルームが長引いたのか？」

「……そう」

長門は実に普段の長門ではあるが、やはりなんとなく疲れて見えるのは、俺自身が疲れているのを反映しているだけなのかもしれない。まあ長門だって気の遠くなるような時間を過ごしたら疲れるだろう。そんな時ぐらい俺にでも言えばいい。何とも出来んかもしれないが、解決を模索するくらいは出来るだろう。

「……………」

まあだがこれで団長を除くメンバーがそろった訳だ。俺と古泉は長門が部室に入るのを確認し、朝比奈さんが着替えを済ませたと確信して中へ入った。俺たちは先ほどまで座っていた席に戻り、長門はいつもの隅っこを陣取っている。実に普通のSOS団らしい光景に、俺はなんだか酷く安心した。

それに呼応するように、人数分のお茶を配りながら朝比奈さんが、「またこうやって部室で皆さんと会えてよかったです。昨日を越えれなかったあたし達を思うと余計にそう思います」

そう感慨深めに仰った。

確かに仰るとおりです。なぜか古泉が同じ事を言ってもちっとも心に響かないのに、朝比奈さんの台詞は胸に染みる。それについて何かうまい事でも言えないか脳内を検索してはみたが、ヒットする言葉は出てこなかった。その代わりにと言わんばかりに古泉が、

「そうですね、あのような経験は体験したくとも出来るものではありませんから、僕としては良かったのではと思います。団員が力を合わせて困難を乗り越切る。素晴らしいではないですか、そう思えば

涼宮さんにも感謝しなくてはなりませんね」

そう意見をまとめた。癪に障るが俺も同じ事を言いたかっただけに納得をせざる終えない。

「ふふ、そうですね。あたしも今回の件でなんだか皆さんとより繋がれた？ 様な気がします」

朝比奈さんはそう言つて、とびつきり愛らしい笑顔を見せた。

「……………」

長門は少しだけ顔を上げ、そして何事も無かったように読書へ戻る。

この瞬間、なんだか今までの出来事が嘘だったのではないかと思えるほど、やたら穏やかで平穏な時間が流れていた。そこには未来的な事件も、超能力的な空間も、宇宙的な力さえ無い、ただ仲の良い学生同士の集まりに思えた。

たしかにこの感じは悪くない、たまには休息も必要だという古泉の意見も正しいように思うね。だが心のどこかで今までの問題と今の平穏を天秤にかけている俺がいる。そもでもってその天秤の中心には、まるで不動明王のようにハルヒが存在していた。

そして、そのハルヒがやはり一番に平穏を突き破る第一歩を踏み出すのは言つまでもない。

静かな部室内に、まるで突撃隊の銃声が鳴ったのではないかと思えるほどの音を出しながら、ハルヒは力強く扉を開けて登場した。その顔は実に晴れやかな笑顔であり、笑顔の世界大会でもあれば間違いないぶつちぎりの優勝を飾れそうな感じだ。

ハルヒは勢いもそのままに、いつものパソコンが設置されてある席まで向かい、力強く振り返り、

「みんなそろつてるわね！ 大変によろしい。団長の登場に団員がそろっているのは、紛れもない団結の証よ。それでちょうどいいアイデアがあるわ！ あたし達SOS団は体育祭で催されるクラブ対抗リレーに参加します！ これは紛れもないチャンスよ、SOS団を広くアピール出来るし、第一体育祭はクラスの運動能力を競うだ

けじゃないもの。日々のクラブ活動での精進と団結力を試す場だと思わない？ だったらSOS団にぴったりよ。だってあたし達の日々の努力は賞賛に値するもの、これを結果として後生に残さないのは歴史的な損失と言っても過言ではないわ！」

と、高々な声で宣言した。

てか今なんて言った。SOS団がクラブ対抗リレーに参加だと？ 俺はハルヒの言葉がよく理解できないうちに他の団員へ視線を送った。

「え、え？ 体育祭ですか？ みんなで飛んだり跳ねたりするやつですよ……」

朝比奈さんは当然のように困惑し、

「なるほど」

古泉は何がなるほどなのか分からない相槌を打ち、

「……………」

長門は本から視線をハルヒに向け、その後ゆっくり俺へ視線を向けてきた。若干だが首をかしげている様に見えるのは俺の錯覚だろう。

この瞬間に団員が考えている事は手に取るように分かる。俺たちもこの数ヶ月で成長したのさ。

ハルヒをどう諦めさせるかとかではない。どうやってこの状況を乗り越えるかって言うマイナス的なポジティブ思考を俺は考えていた。

第二章

考えてはいたが、それでもクラブ対抗リレーに参加するってのは虚を突かれた。

果たしてこんな事が可能なのだろうか。なんて疑問はSOS団において冗談以外の何事でもない。俺には何も力はないが他の団員には不可能をある程度可能にする力があり、まあ今現在の朝比奈にはそこまで力があるとは思えないが、何とかなってしまふのだろうとおんぶに抱っこの思想を張り巡らしている俺は、これらの事を理解しながらもハルヒに聞かねばならん事を聞いた。

「ハルヒ、SOS団は正式な部活じゃない問題はどうするんだ？クラブ対抗リレーに参加する資格を得ていないように思うが」

最もな質問だろう。だがハルヒはまるで秋刀魚の群を見つけて、待つてましたと叫びたくて仕方ない漁師のような満面の笑みを浮かべて、

「そんなもん問題でもなんでもないわよ。さっきあたしが参加の意思を生徒会に伝えにいったらさ、あの連中泡食ったような顔して許可出したし、正直拍子抜けね。そもそもあんな脆弱な生徒会だから学校がつまらない代物になるのよね。だってそうじゃない？悪役が弱くちゃヒーローは活躍できないもの。まあでも今はどうでもいい事ね、重要なのはSOS団が参加するっていう事実よ」

この場合のどちらが悪役でどちらがヒーローなのかと言う議論は不毛なのでやめよう。それよりも新学期の方針などを話合っている最中にハルヒの嵐みたいな参加表明を聞かされた可哀相な生徒会の面々が目に浮かぶ。

そんな哀れみに似た同情を同じ苦を共にする生徒会へ怪電波よろしく送っている最中、まるで社長専属の秘書のような物腰と態度で古泉が、

「では参加の問題はすでに解決していると言う事でよろしいですね

？　ところで涼宮さん少しお伺いしたいのですが、クラブ対抗リレーに参加するのは決定しているとして、体育祭が開催されるまでの期間にSOS団の活動内容が変わることはありますか？」

と、確かに気になる今後について質問した。

「そうね、何か対策を考えておく方がいいと思うわ。暫くの間は土日活動を中止してリレーの準備と練習に当てましょう」

「なるほど、了解しました」

古泉は実に物分かりのいい子供のような仕草で納得の意思を見せる。

やれやれ、リレーの練習か、バトンの渡し合い位しか頭に浮ばんがハルヒなら突飛な事を平気で思いつくかもしれん。それなりに覚悟はしておこう。

俺はマイナスのオーラしか発さないであろう覚悟を左心房辺りでした。

「てなわけであたしは準備が色々あるから、今日はこれで解散にしましょう。どんな優秀な活動にも休みは必要だわ」

この一言で俺たちは来たばかりなのに帰宅の準備にかかり、朝比奈さんはメイド姿から制服姿へ早代わりし、長門は読んでいた分厚い本を大切そうにしまう。俺と古泉はトランプを適当に箱へしまつて帰りの支度を完了させた。ハルヒはバックを持つだけ。そんな感じで10分も経たないうちに俺たち五人は部室を後にした。

その後の帰り道、ハルヒは準備とやらを実行するために別行動をとり、長門と朝比奈さん、

古泉と俺の四人で少し早い帰路に着く事となった。

まだまだ残暑が厳しい中のやたら長い坂道を下りながら、それぞれが何かを考え込んでいる顔つきで、あまり会話は弾まない。普段

ならハルヒが一人騒がしく闊歩し、時に朝比奈さんにちよつかいを出していたりするが、今現在で普段と変わらないように見えるのは長門くらいだった。

俺はそんな中、気になる懸案事項に対して長門へ話しかけた。

「長門お前はどうか考える。以前の野球大会のように勝てないような状況になったら、またハルヒは世界をいじくろうと思うか？」

「……以前の状況と現在の状況は酷似している。その可能性は否定できない。でも涼宮ハルヒの精神状況は徐々に安定傾向にあり、目の前の結果に対して冷静に受け止める可能性も高い」

長門のハルヒ分析を聞き、俺自身少しほっとした。実は俺も同じような結論に至っていたのだ。そしてこの答えでひとつの考えと、それに対する自信が湧いた。

俺は考えをみんなに伝えるため、横を歩く長門と少し前にいる朝比奈さん、後ろを歩く古泉に聞こえるような声で、

「これから例の喫茶店に行かないか？ 今後の対策を俺たちなりに決めておこう」

こう提案した。

「ええ、僕としてもその方がいいと思います。今回は時間的な余裕もありますし対策を講じる事が出来るでしょう」

「あ、えつと、あたしも行きます。色々分からない事もあるし……」
両名がすぐに了承の回答を出し、後は長門なのだが、それは問題ないだろう。

俺は隣を歩く長門に目を向け、

「それでいいか？」

と尋ねた。長門はほんの少しだけ顔をこちらに向け、
「……いい」

決まりだな。そうなれば話は早い。俺たちにとって第二のSOS団拠点といっても過言ではないであろう、いつもの喫茶店へ足を運ぶのは最早慣れ親しんだ自宅へ向かうのと同じくらいやすいものだ。

そんなこんなで帰宅前に喫茶店で軽く話し込むという、高校生からしたらごく当たり前の行動をするべく、俺たちはそそくさと店内に入り、四人席の手前に俺と古泉、正面に長門と朝比奈さんという体を作った。まあ話の内容がごく一般の高校生の寄り道する話ではないがな。

そんな意味のない一般との比較を俺が思慮している間、一番最初に話し始めたのは古泉で、俺に対し、

「まずはあなたに確認したいことがあります。体育祭で涼宮さんはクラスの競技にも参加しますか？ それによって対応も若干変わります。どうでしょう」

と、まるで人を試しているスフィックスのような物質的笑顔を向け、質問してきた。

「考えたくはないがハルヒの奴は出れる競技には全部出るつもりみたいだ。その煽りで俺まで参加することになってやがる」

「そうでしたか。ではSOS団の件とは別にあなたのクラスにも対策が必要かもしれませんね」

「古泉、お前がどう思っているかは知らんが、俺的に思うんだがな、そこまで広く対策を練る必要は無いんじゃないか？ 第一SOS団の成績でさえ厳しいんだ、それにハルヒだってそこまでの結果は求めんだろう」

「お忘れですか、以前の野球大会では負けるという現実が迫っただけで世界が崩壊しかけたんですよ？」

俺は押し黙ってしまった。この懸案は確かにあるのだ。でも俺的には思う事もあって、どうしても受け入れられなかった。

「それは……そうかもしれないが、あの時はハルヒが持ち出した勝負だったからじゃないか？ だったら今回の件で、クラスでの競技について自ら提案したわけではないし、そこまで思い入れてはいないだろうよ。あいつから言い出したクラブ対抗リレーへの参加は知らんがな。ハルヒだってそこまでバカじゃないさ、無意識じゃ無ければ露骨に力を使ったりはしないと思うぞ」

それだけ言うと、なんだか妙なモヤモヤした気分になった。なぜ俺はこんな遠まわしにハルヒを擁護せにやなんのだ。それに気が付けば古泉も石で彫刻されたような笑顔では無くなっている。

「あなたがそこまで涼宮さんを信頼するというならば、僕は諸手を挙げて賛成ですよ。僕としても昨日までのことがあったので神経質になっていました。反省ですね。仰るようにクラブ対抗リレーについては対策を練った方がいいでしょう。ここは涼宮さんとしても負けたくは無いいと思う心理が働くと思います」

古泉はそれだけしゃべると、後はもう任せると言う、妙に満足した感じの視線を俺に送ってきた。

俺はといえば、実はまだ納得はしていないのだ。出来ればクラブ対抗リレーも何もせず参加したかったと言う考えがある。でも踏み切れない。ハルヒも学校生活において少しずつ成長しているし、それはSOS団の活動でも同じだと言う事を証明してみたかったのだが、確かに昨日の今日で、終わりの無い夏休みを体感した直後では大丈夫だと断言ができない。

だから今回は仕方ないと割り切ることにした。まあいずれSOS団を巻き込んだ勝負ごとをハルヒが性懲りも無く持ち込んでくるだろう。その時こそは未来的、宇宙的、超能力的な対策を一切せずに、ハルヒには頑張っただけだと思っただけだ。

だから後は残りの面子に確認を取るだけだ。朝比奈さんはまだよく理解できていないと言うような、愛らしい瞳をキョロキョロさせている。長門についてはきっと俺と古泉が話すより何万光年も前から理解をしているだろう。

「朝比奈さんはどう思いますか？ 今の結論でもいいですかね」

俺はまず一番理解していなそうな朝比奈さんに話を振った。しかし朝比奈さんは急にもぞもぞし始め、うつむきながら申し訳なさそうに視線を送ってくださる。その仕草があまりに愛らしいので、思わず抱きつきたくなる衝動を抑えるのに必死だった。そして朝比奈さんは言う。

「あの、大変申し訳ないんだけど、体育祭って具体的にどういったものなんでしょうか……。皆で走ったり飛んだりしてメダルをもらえたりする大会ですか？ さっきから質問したかったんだけどタイミングが中々で……」

もうなんとお答えすれば良いか、俺には判断が出来ませんよ朝比奈さん。今後どのような成長をしていくのかは分かりませんが、大人朝比奈さんになってもこの感じは失って欲しくないね。

「ええ、まあそんな感じです。メダルが貰えるかは分かりませんが、走ったりするのは正解です。ただ朝比奈さんが知っているような大会とは規模がちよっと小さいかもしれません」

朝比奈さんは自分が間違っただけにほっとしたのか、可愛らしい仕草で胸をなでおろしていた。

後は長門だが、

「長門はそれでいいか？」

「……あなたがそう求めるならかまわない」

「そうか」

こんな五七五程度の会話で理解してくれていると確信が持てるのは、世界広しと言えど長門だけだろう。

だがまあこれで結論は出たわけだ。今回はクラブ対抗リレーに対して万全の処置を取って挑む。そしてクラス対抗戦に関しては俺に一任、つまりは成り行きに任せるという感じだろう。そうと決まればなんだか自信も沸いてくる気がする。ハルヒの無理難題にしたって突発的な出来事でさえなければ、そこまで大変なことにはならないだろう。しっかり対策を練っておけば、俺一人ではどうしようもない事も、長門や朝比奈さんもいるし、古泉だって力にはなるわけで、問題に対処していくことが出来るに違いない。そう思った。

だが実際はこの考えが安直すぎた。非日常的な力に頼りたくは無いと思っていたのに、その非日常的な力が逆に問題を難しくしていく事に、この時は全く気が付かなかった。やたら妙な自信があったのも問題だ。

第三章

夏休み明けの第一週に行なわれた団長抜きでの対策会議の存在などは、当然ハルヒが知るはずも無く、次の休日にはどこかの大学の陸上部と対戦だとか、目指すのは体育祭ではなくオリンピックであるとか、まさにハルヒらしい無理難題な話を俺は学校の授業中ひっきりなしに聞かされていたので、この状況については対策に含まれていないのだろうかという考えでしまう。俺の成績が落ちた場合の対策はきつと無いのだろう。

だが俺の成績が緩やかな下降線を描いていることに、おれ自身関心が無いことは今に始まったことではないので、この一週間で勉強に目覚めるような改心は特には無く、あつたのはせいぜいハルヒの脳内を探ってリレーの練習がどんなだか思案するくらいだった。

そんな感じで俺の一週間はとめどなく過ぎ、今は第二週の休日であり、現在の場所は普段の喫茶店ではなく昼下がりの陸上競技場で、休日のなぞ探しはハルヒ考案の準備運動へと模様替えをしている。格好も全員自前のジャージだしな。

「それにしてもよくこんな施設を借りれたもんだな」

身体を動かしながらつぶやく俺は、寝巻き同然と化したはずだったミドリのジャージ姿で体操している状況を、未だに信じられないでいた。と言うのもここは高校の運動場のような土ばかりの状態ではなく、しっかりとしたトラックがあり、小ぶりながらも観客席まであるそこそ立派な陸上競技場なのだ。しかも現在SOS団が貸切で使用している様は異様以外の何者でもない。

「僕の叔父の友人が市の職員で、日ごろからあまり使用されないこの競技場の存在を嘆いていた。そこに偶然僕たちが使用したいとの話が来て快諾してくれた。そういう事で納得していただけませんか」

濃紺のジャージに身を包み丁寧な動作で屈伸運動をしている古泉が、俺のつぶやきに対して、まるでムリなクレームを何とか対処し

大量販店の店員のような苦しい笑顔で、爽やかに言つてのける様を見ると、これ以上追求するのはかわいそうな気にさえた。

だが対策を考えた張本人なのだから言い訳は出来まい。対策会議で決まつた内容は極めて単純だった。

『ハルヒが何かを求める前にそれを用意すること』

『絶対に勝つこと』

これだけだ。内容は実に簡単な感じだが、対象がハルヒだとその問題は近年騒がれている環境問題のように厄介な代物になる。

「こらキョン！　ぼーっとしてないで体を動かしなさい。運動前の体操を侮ることは大きな怪我に繋がるのよ。SOS団はそんな怠慢な怪我を許さないんだからね」

問題の中心であるハルヒは実に楽しそうな感じで、まるで遠足に持つていくお菓子を準備している小学生のような笑みを浮かべていた。黄色一色の明るいジャージ姿で胸元にはホイッスルが掛けられている。そしてそいつが馬鹿みたいな大きい音を鳴らす。

「さあ次はジョギングをして身体を温めていきましょう」

やれやれ、そう思ってしまったてもいいだろう。俺たちは体操の体系からジョギングの体系へと立ち位置を変更し、ハルヒの合図と共に走り出した。

回りへ目を向けると、長門が珍しくジャージ姿で身体を小さくしながら走っている。ジャージは今時どこで手に入れたんだというくらい古典的なあずき色の仕様だが、普段制服姿ばかりなので実に新鮮な眺めに感じられ、思わず長いこと凝視していたら、長門もこちらに気が付いたのか、俺に視線を送ってきた。俺は対応に困ってたが笑って返すだけだったが、長門は視線を足元へ向けてうつむいた。正確にはうつむいたのではなくただ元の視線に戻しただけなのだが、なんとなくその仕草を見るとむずがゆい感じがしたのは俺の壮大な勘違いのなせる所業だろう。

横では朝比奈さんがピンク色のかわいらしいジャージを揺らしながら、早くも息が上がったのか忙しく呼吸をしていた。

「朝比奈さん大丈夫ですか？ ムリはしない方がいいですよ」

俺は思わずそう気遣った。だが、

「はっ、はっ、あたし今回頑張ろうって、はっ、思っんです」

そう苦しそうにも笑顔で答えてくださった。

「あたしにとっても、学校で始めての大きなイベントなんですよ、はっ」

なるほど、たしかに朝比奈さんにとっては学校のイベントなんて本来無縁のはずだからな、少なからず楽しみなのかもしれない。そう納得した。

しばらく走ったあと、俺たちはハルヒの指示の元、実にありきたりなリレーの練習を行なった。ハルヒのことを考えれば実に意外な感じた。みんな一列に並び、先頭にハルヒで次が俺、後ろに長門と朝比奈さん、最後尾に古泉という順番で、どこから入手したのかは不明なリレーのバトンを交互に渡していくという、体育祭前にはどのクラスでも行なうような練習だった。その練習をしばらく繰り返して、まあ飽きたと言い換えても差し支えないだろうが、せっかくの陸上トラックを利用しない手はないと言う事で、実際にリレー形式の練習へ移るのにさしたる時間はかからなかった。

「じゃあ早速走ってみましょう。いいこと、最後まで全力で走らないやつがあたしが一番嫌いなんだからね！ 手なんか抜いたら速攻罰ゲーム！ 速攻よ！」

とやる気満々の声と顔で宣言しながら、俺たちをスタートの位置に行かせようとした。そこで古泉が質問をする。

「リレーの順番はどうしますか？」

「そうね、さっきバトン渡しの練習をした順番でいきましょう。その方が練習の効果が見て取れるし」

なるほど、アンカーはハルヒで俺は最後から二番目か。古泉と長門で朝比奈さんをサポートさせる気なのかもしれんな。真ん中に長門を配置するあたりに偶然の確立を考えたくなるが、理想的な配置に思える。

それから一応指示通りに俺たちは各配置につき、自分の出番を待った。スタートは古泉で、ハルヒの大きなホイッスルの音と同時に軽快なスピードで走った。意外とも当然のようにも感じられるが、地味に何でもこなすやつだと改めて思う。普段ハルヒの超人的な能力と、長門の人知を超えた力の前で目立たんが、一般的な人間からすれば結構な運動神経だ。

だがこの後で急速にスピードは落ちる。古泉が朝比奈さんにバトンを渡すと朝比奈さんはお世辞にも早いといえないスピードで走った。実に危なっかしい、我が家の妹のような右に左にぶれる走り方で、案の定というか予定調和の世界と言うべきなのか、朝比奈さんは豪快に転んだ。その瞬間バトンは空中を舞ってトラックの外へと飛んで行き、朝比奈さんはその場でうずくまってしまった。

「朝比奈さん！」

俺はあわてて持ち場を離れ、朝比奈さんの所まで走っていいこうとした。

だがハルヒは遠くから叫ぶ。

「キョン！ 動いたらダメ！ みくるちゃん立ちなさい！ 本番では誰も助けてはくれないのよ、バトンを探して最後まで走るのっ！」

俺は一瞬迷った。何故迷ったのかはよく分からなかった。普段の俺なら迷うことなく朝比奈さんの下へ向かうだろうが、もしかしたらどこかでハルヒの言い分に一理あると思っっているのかもしれない。だが俺は叫ぶ。

「ハルヒこれはあくまで練習だ！ 怪我でもしたら今後の練習が出来なくなるだろ！」

それだけ言っただけ、俺は朝比奈さんの下へ駆けつける姿勢に入り、走り出す。そのとき少しだけハルヒの声が聞こえた気がした。

「もう、バカキョン！」

それからハルヒは練習の一時中断を断言し、すぐ戻ると言って一人どこかへ行ってしまった。朝比奈さんは膝を強くぶつけたようではあったが外傷は無い。むしろ内面のほうが傷ついたらしく、完全に落ち込んでしまっていた。

「本当にごめんなさい。あたしなんでこんなダメなんだろう……みなさんの足ばかり引つ張っちゃってますね」

なんて言って攻撃されたアルマジロみたいに丸くなってしまっている。

「朝比奈さん、人には向き不向きがあるんですから、そんなに落ち込まないでください」

こんな時俺は自分のボキャブラリーが不足している事かなりの憤りを覚える。古泉ならもう少しまともな言葉を使うのかもしれないが、現在古泉はハルヒの行動予測に大忙しのようで、なにやら一人考え込んでいた。もう一人の団員である長門は工事現場のコーンのように立ち尽くしている状態である。それでも朝比奈さんの近くに立って彼女を静かに眺めている様子を見ると、長門なりに気を使っているのかもしれない。いつかは大丈夫と声を掛けている様子でも見れたらと思うてしまう変な妄想が前頭葉あたりをよぎり、それでも今は俺しか励ますことは出来ない、将来の長門へ期待しつつも朝比奈さんへともう一度語りかけた。

「次を頑張りましょう朝比奈さん。ハルヒのことだからきつと変なものを用意してきます、こんなことで落ち込んでたらだめですよ」「そうですね……あたしががんばります！」

朝比奈さんは力を振り絞るように立ち上がって決意づいた。

これで大丈夫だったのかと考えつつも、ハルヒが戻ってくるまでそう時間はかからず、もどってきた様相を目の当たりにして大丈夫ではないかもしれないという考えに至った。

遠くの入場口から小さなハルヒが見える。手には巨大なカゴのよなものを持っている。というか押してきている。その中身が近づ

いてくるにつれ序々に明らかになり、その物体がバレーボールであることに気が付くのに十秒とかからなかった。

「みんなお待ちせ！ 丁度いい練習道具があつたわ。このバレーボールで練習しましょっ！」

なんて笑顔で語りかけつつ回りを見渡してやがる。俺はなぜか視線があつた古泉の顔を見たが、古泉も困惑した様子で、いつもの蠟人形のような笑顔から若干本音が見え隠れしていた。それもそうだろう。どう考えてもリレーの練習でバレーボールは必要じゃないだろう。

一体どういうつもりだハルヒ、バレーボール部が妨害工作でもしてくるのを想定しての練習なのか。

「これは根性を鍛える練習よ。全力を出すにも必ず根性が必要なのだからこれからあたしが打つスパイクを拾い続けてもらうわよ。そうね…… 一人百回は拾ってもらわないとダメね」

ハルヒは満面の笑みを浮かべている。きっと何かを発明したり発見した人物はこんな笑顔を見せるに違いない。発見の内容に大きな違いはあるが。

それでも俺たちの団長様は絶対であり、仕方なくバレーのフォーメーションのような陣形を取って、ハルヒの打ち込む殺人スパイクに飛び込む事となった。でも実際かなり大変なのだこれが。なにせハルヒである。その球のスピードときたら、全日本の監督が惚れ込むのではないかと思えるほどすばらしいものだった。今の俺たちにとっては間違いなくすばらしくは無いが。

予想通りというか一番最初にこの地獄から抜け出したのは長門で、これも見事なレシーブの連続だった。古泉もなんだかんだと回数を重ねていくにつれて対応してゆき、結局俺と朝比奈さんだけが取り残される形となり、ここが今現在貸し切り状態であることを感謝しつつ、陸上競技場でバレーボールという異様な光景を想像しては頭を振って集中力を研ぎ澄ますことに終始した。それだけしてようやく倒れこむように最後の一回を手当てしたのは、日の落ちるのが早

くなってきたいる九月としても大分時が経った頃である。

最後に残った朝比奈さんは一向に終わりを見せる気配が感じられず、疲れからか序盤よりもずっと反応が鈍っていた。

「どうしたのみるちゃん、全然動けてないじゃない！　ここからが正念場よ！　絶対にここで頑張れば報われるの、動き続けなさい！」

「は、はいっ！　いつや！　っひゃ！　きゃ！　いったた！」

それでも変な奇声を上げながら、朝比奈さんは喰らいつくようにボールへと飛び、体にぶつけるだけの努力を見せていた。だが無情にもボールは顔面にヒットし、

「あひゃ！」

朝比奈さんはそのまま倒れこんでしまった。

これはまずい。そう思った俺は無意識のうちに朝比奈さんの所まで駆け寄っていた。

「大丈夫ですか！　おいハルヒ、もういいじゃないか。朝比奈さんも頑張ったし今日はこれで充分だろう」

さすがのハルヒもそこまで無謀じゃないだろう。そう思ったが、歩み寄ってきたハルヒは俺に一切視線をくれることなく、朝比奈さんに言った。

「みくるちゃん、もういいって思ってる？　ここで諦める？　あたしは諦めない。だからみくるちゃんも諦めないで、あたしとがんばりましょう！」

「待てよハルヒ、朝比奈さんは……」

「キョンあんたは黙ってなさい。これはみくるちゃんの問題よ」

俺はこれ以上ハルヒに話しかけることが出来なかった。というのも純粋に真剣だったのだ、目が。

そして呼応するように朝比奈さんも真剣な眼差しで、

「あ……あたしががんばりますっ！」

力強く答えた。

ハルヒはいえ、その回答を待っていたとばかりに体を翻し、

颯爽と元の位置に戻っていく。その顔にはこれから子供を谷底に落とすライオンのよう勇ましい笑みがうかんでいた。

どうしたんだろうかこの状況は、まるでハルヒが何か力でも使ったのかと思いたくなるような展開である。バレーボールを使ったりレーの練習という奇怪な行動が、立派にも一人の人間を鍛え上げているではないか。俺はこの思いを視線に乗せ長門を見て、古泉に顔を向けた。

古泉も妙に真剣な眼差しで、このままにしておきましょうと言う様にうなずく。長門の磨き上げたサファイアのような瞳から発せられる透過性の視線も、俺には静観しようという意思が感じ取れた。

気が付けば俺でさえもレーのことを忘れていた。これはハルヒの特殊な力ではなく、真剣さがもたらしたものなのかは俺には分からない。だがいつの間にか太陽は陰り、闇が辺りを支配し始め、それでもひたすら声を出して動き続ける朝比奈さんとハルヒがいた。

第四章

元来体育系の部活動に積極性を見せてはいなかった俺からすると、休日での地獄のようなリレー練習は体に堪えた。それこそ体をムリに動かそうものなら、まるで全身を棘の付いた鞭で打ちつけられているのではないかというほどの痛みが走り、その度、休日明けに言い放たれたハルヒの一言が恨めしい。

「休日はこれでいいとして、しばらくの間は放課後にもミニ特訓を敢行しよう！」

これには正直かなり参った。そもそも学校で出来ることなど限られてくるわけで、放課後は各運動部が運動場を占拠しており、必然的に空いている場所は鉄棒やら廊下やらになるだろう。もちろんそんな場所ですくなく練習が出来るわけはなく、懸垂やら腹筋までやり鬼ごっこなんかまで行なった。その光景を見た生徒諸君がSOS団に対してどう思ったかなど想像しただけでいまましい。

だからという訳ではないが、今現在クラスで行なわれている四時間目の体育の授業内容であるハンドボールに積極的不参加を敢行している俺には少くらしい情状酌量の余地があってもいいだろう。しかも隣にはハルヒが、俺と同じくらいやる気の無い態度で不満を前面に出した表情を展開している。

ハルヒよ、一体何がそんなに不満なんだ。つまらんのだったらクラスの連中に混じってハンドボールでも思いつきり投げてくればいいだろう。谷口の顔にでもぶつけて来い。ストレス解消にはなるはずさ。

「まったく、なによこの授業内容は。あと二週間で体育祭だつてのにどうしてハンドボールなわけ？ 誰かの陰謀じゃないのかしら。きっとそうよ！ あたし達を勝たせたくない組織かなんかが裏で手を引いてるに違いないわ！」

それはないだろう。万が一お前が言う組織つてのが一枚噛んでい

るというならば、むしろ全力を持ってこのクラスを勝たせにくるに違いない。

「まあいいわよ、こんなクラスに最初から期待なんてしていないもの。やる気の無い連中にはハンドボールで充分ね。体育祭だってSOS団が勝てばいいわ。それよりキョン！ 放課後の練習でいい案があるのよ！ 当てることができたなら団長じきじきに……」

「いや……ちよつと待てハルヒ」

「な、なによ急に……」

俺は思わずハルヒを睨みつけた。ハルヒはいつものはじけ飛ぶ焼き栗のような笑顔を引き攣らせながら静止している。別にハルヒが体育の授業をサボってSOS団の話に花を咲かせている事を咎める気はさらさら無い。だが今回の体育祭に限り、どうしてもクラスに対するハルヒの諦観した態度が許せなかったのだ。

「お前だつてクラスの一員なんだぞ。この授業で体育祭の練習をせずにいるクラスメイトと違うとは言えないだろう。現に体育祭に向けた練習をしてない人間には、ここでサボっている俺たちも含まれるんじゃないのか？」

ハルヒは得意のカモノハシみたいな口をして俺を睨んできた。だが若干動揺しているのか、目にはいつものように吊り上った力強い視線が携わっていない。

「あ、あたしはちゃんと体育祭に向けての特訓をしてるじゃない。なんであんな連中と一緒になのよ。少なくともあたしは自主的な活動を行なっているわっ！」

「だがなハルヒ、それはSOS団での話だろう。なんでその自主性をクラスで発揮しない。お前がSOS団のように率先してクラスを引っ張れば、みんなも体育祭に向けた行動を起こすんじゃないか？」

「それは……」

俺は話しながら少しだけ驚いていた。あの唯我独尊、絶対王政なハルヒがうつむいて指遊びをしながら話を誤魔化そうとしている。どうみても自信が無さそうに。

そんなハルヒを俺がどんな顔をして見ていたのかは鏡でも見ない限り確認できないが、俺と視線が合ったハルヒは、まるで完熟した柿のような真っ赤な顔で、

「と、とにかく！ あ、あたしは努力をしない奴は認めないのっ！」などと、決して答えにはなっていない言葉を発して俺の前から走り去っていった。

今の対応は間違っていたのだろうか。段々遠ざかって小さくなっていくハルヒが、下駄箱のある入り口に消えていくのを見ながら、そんな考えが脳内を支配していた。

その答えが垣間見えたのは、一日で終業のチャイムに次いでうれしい四時間目の終わりで昼休みの開始を告げるチャイムが鳴り、体育の授業が終了した俺たちが靴箱を通過して、着替えのために一年五組の教室へと足を踏み入れた時だった。

誰もいない教室の中で一人黒板の前に立ちながら、なにやら落書きめいたものを書き記してるハルヒの姿が俺の目に飛び込んでくる。「おいハルヒ、体育を途中でサボって何をしている」

ハルヒはクラスの連中が帰ってきた事に気が付いていなかった様子で、俺の第一声を背後から聞いたのによっぽど驚いたのか、こちらを振り返る間も無く、一気に黒板消しでその落書きめいたものを消し去った。まるでドッキリをしかける前に見つかってしまったのを必死で隠しているようである。消えてしまった落書きはどうも文字を書こうとしていたようであった。

ハルヒは全てを消したあとにこちらへ振り返り、

「な、なにもしてないわよ。暇だったからちよつと黒板で遊んでただけじゃない」

などと俺に言ったのか、それともクラスの連中に向けて言ったのかわからないような感じでそう言い放ち、ものすごいスピードで教

室を出て行った。俺もクラスの連中も全員がその奇怪な行動を凝視しては混乱した。

「涼宮のやつどうかしたのか？ また何かやらかそうってんじゃないだろうな。巻き込まれんのはいやだぜ」

「涼宮さんは暇だつて言つてたよ。そのまんまの行動だったんじゃないかな」

などと谷口がぼやき、国木田が応答する。他の連中も若干ざわついたが、このクラスもハルヒの言動には慣れ始めており、すぐに通常の昼休みに移行していった。

でも俺は違う。ハルヒの行動にはいつだって意味の無い意味つてものが存在している。ハルヒは何かのアクションを起こそうとしていたのだ。そう思えば思うほど俺は不安になり、昼休みに飯をゆっくり食べてなどいられなかった。

そのせいで俺は昼休み中ずっとハルヒを探し続ける羽目になった。最初は文芸部部室にいたろうと思ったのだが、実際は影も形もない状態だった。考えられる場所はすべて回ったと思う。コンピ研にも行ったし以前連れて行かれた常時施設の屋上へ出るドアの前を見にさえいった。中庭、校舎裏、体育館、図書室と学校中を探して回ったが、結局ハルヒを見つけることは出来ず、さらに言えば助けを借りようとしたSOS団の誰にも会うことさえなかった。朝比奈さんは見当たらないし、古泉は教室にいない。長門ならばとも思ったが、まるで俺だけを残してSOS団が消えてしまったみたいである。これはハルヒが見つけてほしくないという意味でも働かせているのではないか。そう思うとあまり深く突っ込まない方がいいのかもしれない。俺はそんな結論に至った。そう考えてしまうのも当然だろう？

最終的にハルヒを目にしたのは五時間目の授業をすっぱかし、六時間目の開始を告げるチャイムが鳴る前の十分休憩に教室へ入ってきた時だった。しかも妙に神妙な顔をしている。

俺はずっと探して見つからなかった焦燥と安堵を入り交じらせな

がら、そのまま定位置である俺の後ろの席に座ったハルヒに、あまり深入りしないよう注意して聞いた。

「なあハルヒ、お前が何かしようと思った時があったら俺にも教えてくれ。内容によっては協力だつてしないこともない」

ハルヒがこの言葉にどう反応するか。俺はてつきり、そんなのは当たり前だとか言い出すのかと思っていた。まあ思っていないながら話を切り出す俺もどうかしていると思えなくも無いが。しかし、ハルヒの見せた反応は予想に反して自嘲気味な笑みだった。

「その言葉はありがたく受け取っておくわ。でもあんたの言う通り何かを動かすにはまず自分からつてのも一理あるし、その方が何かをやったていう達成感があるものね」

なんとハルヒらしくないではないか。俺の意見が素通りでハルヒの脳内に届いたのは今までに記憶している事例では皆無だ。関心の感情よりむしろ不安にさえなる。

「そうだ、じゃあ今からちよつと部室にいつて有希を手伝つてちよくだい。やっぱ一人だと何かと不便だろうし」

何のことだ。長門が部室で俺の手伝いを求めるような作業でもしているというのか。というかあいつはやっぱり普段から授業に出ていなかったのか。大いにありえる。

「さてよ。これから部室に行くのか？ 授業はどうするんだよ」

もつともな意見だろう。俺は授業をサボつて屋上で昼寝をするような典型的な不良青年とは縁遠い存在なのだ。だがハルヒは、

「いいじゃない別に授業なんか出なくたって。あたしはこの時間ここにいないくちやいけないし、それに今更一回くらい授業をサボつたつてあんたの人生にはさしたる影響は出ないわよ。なんだつたらあたし主催の特別授業を受講させてあげるわ」

などと実にこいつらしい自己完結的主張を言い、普段よりはワット数が若干足りてない程度の笑顔を見せた。

まったくもつてハルヒはハルヒなのだ。何が原因で神妙さを纏っているのかは知る所ではないが、どんな状態であってもハルヒを中

心に俺の生活は動いてるって訳だ。

「……わかった。部室に行って長門を手伝えればいいんだな」

「お願いねっ！」

『お願い』を聞かないわけにもいくまい。俺は席を立ててザワつた教室を抜け出した。気になる事は沢山あったが、とりあえず協力すると言い出したのは俺なわけで、詳しいことなんかは長門にでも聞けばいいだろう。一体何を企んでいることやら。

結論から言おう。意味が分からん。ハルヒの行動を理解したことなど皆無ではあるが、今回ばかりはハルヒ的意味の無い意味を見出すことは出来そうもない。

俺は六時間目の授業が開始したのであることを告げるチャイムを耳にしながら、誰もいない静かな部室棟に足を運び、いつもなら朝比奈さんや古泉、長門とハルヒがいる部室の前まで行き、扉を一応ノックしてゆっくり引いた。

ちよつとしたサプライズである。そこにはいるはずの長門は存在せず、代わりにというと語弊が生じているが、朝比奈さんが一人パイプ椅子に座っていた。その朝比奈さんは俺が部室に入って目が合った瞬間にほつとしたような仕草をしつつ、

「キョン君……よかった、来てくれましたね」

などといって俺をより混乱させた。神妙なハルヒといい、長門がいるはずの部室に朝比奈さんがいたり、さっきからどうも辻褄が合わない事が多い。

「なぜ朝比奈さんがここに居るんですか？ ハルヒからはここには長門が居て、何かの作業を手伝えと言われてきたんですが」

「それは……すみません禁則事項です。でもすぐにお教えできます。

それまでもう少し待ってください」

と、申しわけなさそうにうつむきながら仰った。待ちますとも、朝比奈さんが待てというならば渋谷駅の犬の銅像みたいに待ったってちつとも苦には感じません。ですが禁則事項ですか、その言葉が出てくるということは、なにか未来的な出来事が関係しているわけですかね。

「えーっと、実は涼宮さんから連絡があつて、今日はSOS団の活動を休業すると言われたんです。だからキョン君も今日は帰宅しても大丈夫みたいです。あたしはただの連絡係みたいなもので、未来が関係しているわけでもありません。あたし自身の判断です」

これもまた意味が分からん。未来は関係無しで、朝比奈さんがここに居るのは禁則事項であるとはどういった状況なのだろうか。というか、帰っていいとはまたなんともご無体な感じである。ハルヒは俺に何をさせたいんだ？

「朝比奈さん。いまいち理解が出来ないんですが、何か問題でも起きているんですか？ それと帰っていいと言われても学校もあるし、第一ハルヒがなんで俺を部室に來させたのかが理解できないんですが」

質問を受けた朝比奈さんはどうも迷っている様子だ。やはり何かあるのだろう。

「すみません。やっぱり禁則事項です。でも必ず説明します。今のキョン君には特に問題は降りかかりませんから、安心してご帰宅ください」

どうも含みのある言葉が多いな。だがどうしても俺に帰ってほしいようだ。ちょっと切ない感じがするのは、別に仲間はずれにされたからとか小学生じみた感傷ではなく、俺の空回り感からくる焦燥や疲れによるものだろう。だったらお言葉に甘えて早めの帰宅と休息をとつても誰一人文句は言うまい。どうせ明日からはまたハルヒの無理難題的な活動を強いられるのだからな。

「分かりました。じゃあ今日はもう帰ります。ところで朝比奈さん、

長門はどうしているんですか？」

朝比奈さんの目がちよつとだけ左右に泳ぐ。

「えっと、長門さんは普通に授業を受けています」

「そうですか、朝比奈さんはどうしますか？ 帰るなら待ちますが、ちよつとだけ期待はしたが、

「すみません、これからまだ学校でやることあるんですよ。ですから先に帰ってください」

うーん残念！

俺は朝比奈さんに軽く挨拶をして部室を後にした。

それから俺はさつさと学校を出て、一人ハイキングコースのような坂道を下り、いつもより早めの帰路についた。この間誰にも咎められることはなかったし、町を巡回している警官に職質されることもなかった事を思うと、どうも早めに学校を出て町を出歩く高校生つてのは珍しい事ではないらしい事がよくわかる。唯一俺の行動に反応を示したのは妹くらいであり、

「あれえー、キヨン君なんでこんなに早く帰ってきたの？ ねえどうしてー？」

など何とも考えていないだけの疑問を口にしたらぐらいたった。

それからしばらくの間俺は部屋でただゴロゴロと猫のように怠惰な時間をすごし、気が付くとだらしなく制服のまま、遅めの昼寝へと突入していた。

何の夢を見ていたかは定かではないが、どうやら結構時間が経ったらしく、部屋の明かりをつけないでも明るかった時間はとうに過ぎ去り、部屋の中は真つ暗だった。その中で目が覚めた原因は突然の携帯電話の着信音であり、暗がりの中を這いずりながら携帯電話を手探りで探して掴み、ディスプレイを覗いたら時間は九時で、相手は古泉であった。

『どうも、出るのに随分と時間がかかりましたね。お疲れですか？』
『お前は俺が疲れてるかどうかを確認するためにわざわざ電話を掛けてきたのか？ いいから要件を言え』

古泉の気が抜けた含み笑いが電話越しから聞こえる。

『いえ、そんなつもりはありませんよ。僕としては確認の電話をしてもかまいませんけどね。おっとすみません用件でしたね。実は今回の件であなたがどうお考えかを聞きたくて電話したんですよ』

『……今回の件とは？』

『涼宮さんに対するアフターケアについてです』

こいつは一体何を言っているんだ。ついに超能力を超えて幻覚でも見るようになったか。

『体育祭について聞いているのか？ だったら決めただろ。あいつが何か言い出す前に手を打つてな。そのことについて疑問でも出来たのか？』

『なるほどあなたからすると今回の独断での行動も事前対策であるという訳ですか。僕はつきりあなたの涼宮さんに対する配慮かと思いましたが』

ますます話が見えん。俺がいつハルヒに配慮ある行動をしたというのだ。そんなことをした覚えは皆無だが。

『古泉、お前の言っていることは何一つ理解が出来ん。分かるように説明しろ』

電話越しの古泉が何か考えているかのような沈黙が流れ、

『……あなたは今日起こっていた事を忘れてもしたかのような発言をしています。まあ僕がおかしな事を無自覚に喋っているという可能性もあります』

と、言ってきた。おかしいのは間違いなくお前だろう古泉。さすがに今日のことを忘れてしまうようであつたら、いまから精神科の門を叩かねばなるまい。だが俺は覚えているぞ。

『今日は特に何も無かつただろう。俺としては六時間目をサボって帰宅したことが問題といえば問題ではあるが。だからといってお前

がいちいち危惧するようなこともあるまい』

「またも沈黙が流れる。しかも今度は長い。こいつは一体何を考え込んでいるんだ。切っていいか？」

「……なるほど、ようやく理解しました。どうやら僕もあなたも蚊帳の外だったようです。申し訳ありませんでした。お詫びします。あなたは記憶を失っていたりなどはありません。僕が保証します。どちらかというと先ほど言ったように、僕が無自覚におかしな事を喋っているというのが正解に近かったようです」

勝手に自己解決するな。説明をしろ。

「いったい何が正解だと言った。そもそも正解を導き出す前に俺は問題すら知らないんだぞ。それはあんまりだろうよ」

「たしかに。ですが僕の口からはその問題を言わない方がよさそうです。あなたとしても長電話で問題定義など聞きたくは無いです。すぐに分かります。これも保証しますよ。では失礼します。また後で」

含みのある言い方だな。勝手に喋って勝手に理解して勝手に切りやがった。これは明日とつちめてやらねばならんな。ブラックジャックをハイレートでしてやろう。拒否権はない。

俺は携帯電話を枕に向かって放り投げ、部屋の明かりをつけようとした。だがそこでまた携帯電話のディスプレイが光り、けたたましい着信音を鳴らす。今度は長門とデジタル標記されている。なんなんだいったい。

「……公園に来てほしい」

「公園つて、今からか？」

「……そう」

まったくどうなっているんだ。どうも超常現象とは違う意味で理解できん事が起こっているようだ。

「それは俺が行かないと駄目なことなのか」

「……………」

やや沈黙があって長門は言う。

『……あなたが来なければ困る』

ちよと意外だった。長門ほど困るなんて単語が似合わない奴も世界には居まい。だが長門を困らせるなんていうことを俺には出来ないね。なんたつて色々貸しがある。と言うより、もはや貸しなどでは言い表せないくらい助けてもらっているからな。それに比べたら九時に自転車走らせるくらい、わけもない事である。

『わかった、今から公園に行くから待つていろ。時間が掛かるからすぐに公園に行つてなくてもいいからな。風引くぞ』

俺は電話を切つてすぐに制服の上からジャンパーをはおり、自転車のキーを握つて玄関を飛び出した。自転車のペダルを力いっぱい踏込んでスピードをグングン上げていくと、さすがに残暑がある秋でも肌寒さがあつた。だがおそらく長門はもう公園にいるのだろう。そう考えてさらに自転車のスピードを上げた。

第五章

結局俺が公園に着いた時、長門は既に当然の如くその場に存在しており、俺はと言えば体温の上昇による発汗と疲労で、秋の肌寒さなど夏の羽虫のようにどこかへ行ってしまったのではないかと思えてしまうような状況であり、一言で言えば暑かった。

きつと長門のことだ。俺が自宅を出た頃にはすでに公園にいたのだろう。そのことについて別段驚きはしない。相変わらずの制服姿であり、俺の配慮など杞憂以外の何者でもなかった。問題はそこではないのだ。

大事なのはジャンパーは一枚しかなく、俺に不要のものであり、どちらかと言えば自転車での移動を敢行した者よりは、若干の肌寒さある公園で待つ者の方が需要がありそうだという現実なのである。それにいったい何の問題があるかと言うとだな、俺が公園についてまず最初に驚いたことなのだが、実は公園にいたのは長門だけでは無かった。以前過去に遡行した際に俺が目覚めたベンチの横に長門が立っており、そのベンチにはなぜか朝比奈さんが座っていたのだ。しかも制服姿で。

俺はジャンパーを脱いで、

「これはいったいどういった状況なんだ？」

当然一番に頭に浮かんだ質問をした。

「えつと、あたしが説明します。実はほんの数時間前はかなり小規模の時空震が観測されました。その原因がどうも涼宮さんにあるみたいで、だから長門さんに協力を頼んだんです。キョン君にはすぐに教えようとしたんですけど、色々禁則があって無理だったの。ごめんなさい」

と、言うともたハルヒが世界の改変を行なおうとでもしているって事か。あの灰色空間で神人どもに襲われるのはごめんだぞ。

「じゃあその原因ってのは、やっぱり体育祭関連なんですか」

「ええ、でもあたし達は今回の時空震について特に問題視していません。この時間平面上に若干の影響はあるかもしれませんが、未来では許容範囲内なんです。長門さんもこのことについては同意見みたいです」

朝比奈さんは不安そうにも見える眼差しで、長門の一等星のような瞳を見つめる。俺もそれに釣られて長門に視線を送り、

「そうなのか？」

「そう」

一応の確認を取る。

つまり影響が出るのはハルヒの周りのみって訳か。大いに謎が残るね。未来は関与しないって事なのだろう。それだとこの場合自体が意味の無いものにならないだろうか。

「朝比奈さん、聞いてもいいですか。なぜ問題無いなら朝比奈さんがここにいるんですか」

「そうですね。キョン君を呼んだのはそのことについて協力してもらいたかったからなんです。勝手な事なんですけど、その……あたしと九時間前の学校に遡行してほしくて……」

遡行。つまりは三年前の七夕の夜と同じ事をするという事か。

それから朝比奈さんは勿体ぶったような、ただ言い出しにくいだけのような、そんな感じで話し出した。

「じつは今回あたしが上に時間遡行を提案したんです。普通は許可をもらえないことの方が圧倒的に多いんですけど、今回はなぜか許可が下りました。だからキョン君にはぜひ手伝ってほしいんです」

朝比奈さんにここまで懇願されて否定の二文字を頭に浮かべることなど、俺に出来るはずはなく、それこそ是が非でもやらせて頂きたいと言って過言にはならないと宣言しても良い。だが疑問をそのまま疑問として心の奥にしまい込むほど、現在の俺は好奇心の枯れきった状態ではないのだ。

「それはつまり朝比奈さん自ら考えて行動を起こしたって事なんですか。未来の指示とかではなく」

「え、ええ……そうです」

「理由を聞いてもいいですか」

「あたし、今回は頑張りたいんです。今まであたしって何をやって
もダメで、皆さんにも迷惑ばかりかけてますよね？ いいんです。
わかってますから。でも先週の練習で涼宮さんに言われて気が付い
たんです。あたしが諦めてばかりだったから、いけないんだって」

朝比奈さんはまるで初めての告白のような細かい声であり、そん
な朝比奈さんを俺が見つめていたら、朝比奈さんは何を思ったか、
「あつ、でもでもあたし本位だけの考えでもないんです。あたしに
頑張ることを教えてくれた涼宮さんに恩返しをしたいんです」

などと言いつたのかごまかしなのか、実によく分からないことを
仰った。

ハルヒへの恩返し。あのリレー練習がこんなことになるうとは。
ハルヒは予想していたのだろうか。でも体育祭の事で、かつ九時間
前の学校で恩返しとはいったい何をする事が該当するのだろうか。
「ハルヒは九時間前に一体何をしようとしていたんですか朝比奈さ
ん。長門は知っているのか？」

俺は朝比奈さんと長門へ同時に問いかけた。すると答えてくれた
のは長門で、

「涼宮ハルヒは現状における各個体との連携強化と、その固体自体
の能力向上を図ろうとした」

などという、辞書片手にも理解しがたい説明をしてくれた。

長門、今の説明から俺が何とか理解できたのは、ハルヒが何かを
しようとしたという事くらいで、それは説明前も分かっていたこと
事だぞ。

だが長門は説明は終わりとばかりに、俺へと視線を向けてくれて
いた。それを見ていた朝比奈さんが補足を入れてくれる。

「えっと……涼宮さんはクラスの皆さんにもリレーの練習をしてほ
しかったみたいなんです。でもうまくいかなかったみたいで……そ
れであたしに出来ることならって思ったんです。だから……キョン

君！ これかれ涼宮さんのお手伝いを一緒にしてくれませんか？」

いやはや、朝比奈さんの真面目な視線と来たら。理由も理解でき
たし、手伝わないわけにもいくまい。それは朝比奈さんの頼みでも
あるし、ハルヒがやりたいことは、今までの奇想天外な内容に比べ
てなんと普通なことか。しかもそんな普通なことを出来ないでいる
所は実にハルヒらしいと思えなくも無い。

「わかりました。俺でよければいくらでも力をかします」

「よかった！ 手伝ってくれるんですね！ それじゃあ早速で悪い
んだけど、目をつぶってください。九時間前に遡行しますから」

俺は言われたままに瞼を閉じ、そのまま時の螺旋へ……行く前に
ふとまた疑問が脳裏をよぎった。

「そついえば長門はどうするんだ。お前も来るんだろ？」

ほんの少しのようで、長かったような沈黙が流れた後、長門は答
えた。

「わたしは平面時間の移動を必要としない」

てことは長門は今回の件に関与しないのか。じゃあなんで関わっ
てんだ？

「わたしは同期することによって異時間同位体となるあなたと行動
を起こすことが可能」

なるほど、便利な話である。

「それじゃあもういいですか？」

「お願いします」

俺はもう一度瞼を閉じ、その瞬間意識が暗転したのを確認した。

意識がしつかりして、最初の疑問はここがどこであるのかであり、答えとしては実に簡単な問題であった。こじんまりとした空間には本がぎつしり詰まった本棚や、古めかしいボードゲームの数々、給湯セットにパソコン。間違いようも無く、ここはSOS団の部室であった。隣には朝比奈さんが立っており、なにやら腕時計らしきものをしきりに確認している。

「ここは九時間前なんですか？」

「ええ。時間で言うと十一時半で、キョン君と涼宮さんは四時間目の授業を受けているはずです。もうまもなく小規模の時空震が起きます……来ましたっ！」

俺には時空震を感じることは出来なかった。思い出してみると、今はたしか体育の授業を受けていたはずだ。ハルヒは授業中にそんな事を起こしていたんだな。今思えば授業をボイコットしていた原因も今の俺がしようとしている行動と関連があるのか？

そんな事を考えていたら俺は何をするのか一切知らない事に、今更ながら気が付いた。

「そういえば朝比奈さん。俺たちは具体的に何をすればいいんですか？」

「実はあたしも具体的にどう行動するかは分かっていないんです。本当なら指示が色々とおあって、それを基準に行動するんだけど、今回はあたしの考えた通りに行動するようにとしか言われていないの……だからどうすればいいのか」

朝比奈さんはなにやら必死に今後について模索している様子である。

何のヒントもなしに。俺が知っている今日のハルヒの行動は何だったかな。昼休みはずっと雲隠れ状態だったし、五時間目の授業に關しては受けてさえない。そして休み時間に長門を手伝うよう言うてたっけな。そういえば一体何を長門にさせていたんだハルヒは。後で長門に聞けば分かるかも知れんな。でも今日の違和感はこのだけだっただろうか。たしかまだあったような……そうだ！ ハルヒ

はたしか、

「朝比奈さん、分かりましたよ！ ハルヒはこれから授業を抜け出してどっかに行きます」

たしか校舎に入っていったのだ。そして恐らくハルヒが向かう場所、ここに違いない。

「ここを出ましよう。急がないとハルヒが来るかもしれない。俺はハルヒを見送って授業に出ていたから、ここに俺が居たら面倒な事になります」

朝比奈さんの手をとって素早く部室を飛び出した俺は、校舎側から入って上がる階段とは反対側の突き当りまで行き、

「キヨ、キヨン君どうしたの？ 説明してください」

朝比奈さんの声でようやく足を止めた。ここなら万が一ハルヒが来ても、俺たちの存在には気付くまい。

「実はハルヒは四時間目の授業を抜け出してどっかに行ってるんです。たぶんここに来ると思いますよ。きっと時空震つてのは、ハルヒが何かを思いついたかなんかしらんじゃないですか。そう考えれば辻褄が合います」

「じゃあ、あたしたちはどうすればいいんだろう。涼宮さんと接触しない事には、手助けも何も出来ないのに」

たしかに朝比奈さんの言うとおりだ。俺たちはハルヒと接触をする必要があるんだ。しかも今の時間にいる俺や朝比奈さんとすり替わって接しなければならぬ縛り付で。

「とにかく、今のところハルヒに近づくのは危険です。昼休みに入るのを待って、それから長門と合流しましょう。長門が何か知っているかもしれません」

「でも、涼宮さんがどこにいるのか常に把握してないといけないですよ？ そうしないと接触する機会さえあたしたちは失う事になりますか？」

たしかに。やっぱり朝比奈さんは未来人なのだ。色々不器用な所もあったりするが、時間に関して事が起こるとしっかりしている。

「じゃあ俺が長門を連れてきます。それまで朝比奈さんはハルヒがどこに行くか見張っててください」

「わかりました。では長門さんに宜しくお伝えください」

そうと分かれば話は早い。それじゃあ頼みますよ朝比奈さん。くれぐれも気を付けてください。間違ってもハルヒにつかまる事が無いようせつに願っていますよ。昼休みにならないと俺はハルヒに接触できないので、救出は不可能です。

俺は朝比奈さんと別行動を取るべく、ハルヒが来ると思われる入り口と反対の扉へと足を運ぶ。四時間目の終了までそんなに時間は無い。長門のクラスの前で待っていればいい。そう思って長門が現在授業を受けているであろう教室へと向かった。

第五章<2

ところで長門はどのような感じで授業を受けているのであろうか。これは実に興味深い謎である。ハルヒ的思想に完全な共感をするわけでもないが、元来好奇心は強い方であり、地球人とはメモリー容量が全く違うのであるうヒューマノイドインターフェースが、地球の高校一年レベルの授業内容にどういった態度を示すかなんて話はいっせいで半年前までなら夢物語だったわけで、今はその答えが目の前にあつたりするから人生はわからないものだ。

だからではないが、今現在俺は妙にそわそわした感じにさいなまれている。客観的に見れば今の状況は授業をサボって廊下をうろついている身であり、その感覚は当然なものではあるが、長門に対する好奇心から来るものでも無いように思える。言うなれば感覚的な警戒心が働いているのだ。何かを忘れてはいないかと。

実際その感覚は正しかった。

授業の終了を告げるチャイムが鳴り響いて、色々な教室から生徒たちが振りすぎた炭酸飲料水のように飛び出してきて、それでも長門の教室で行なわれている授業がロスタイムに突入していた時、廊下の人ごみからハルヒがなんとも言い難い表情で歩いてきていた。喜怒哀楽の喜と楽が抜け落ちたような表情だった。

まずい、そう思ったときにはすでにかなり接近を許していた。瞬間的に言い訳についての思案が脳内を支配し始めていたのだが、そこに助け舟が来た。

俺は完全に停止状態だったのだが、突然手首を何者かに掴まれて体が宙に浮いたのではないかと思えるスピードで引つ張られ、廊下から教室内へと瞬間移動のように移動させられたのだ。

正直かなりびびったね。思わずしりもちをついたが贅沢はいえまい。助け舟の正体は長門だった。

「現在の状況下で異時間同位体であるあなたが涼宮ハルヒと接触し

た場合、修正困難な事象に発展する可能性がある」

そう無感動なまでの平坦な声で語りかけてくる長門の声に、俺は心底ほっとした。同時に授業が終わってすぐに動き出し、違うクラス男子を教室に引き入れた長門に対する生徒たちの好奇心の目には晒されたが。

ともあれ、これで長門とも合流できたわけだし、あとはハルヒの後ろをこっそりついていけば、最終的には朝比奈さんとも合流できる。

それでもハルヒの歩くスピードが早すぎて、俺一人だったら長門に助けられてた時点で見失っていたが、そこはさすが長門である。

「涼宮ハルヒの行動を追尾することは可能」

と、実に頼もしい一言を言ってくれる。

俺と長門はハルヒに感ずかれない程度に距離をとりつつ、廊下を歩いた。

「そういえば長門、お前は今の状況を把握できてるのか？ 同期って奴でこれから起こることを知っているんだろ？」

「一つの可能性としての未来は認知している。しかしその情報は確定事項とはいえない。だから把握しているとは断言も出来ない」

「それは未来が必ずしも一つではないって事なのか」

「そう」

ありがちな台詞だが、未来は自分たち次第ってわけか。少し怖い気もするね。つまり未来を変えることもまた容易ってことなんだろう。過去から現在までのフィクションの映画や小説もあながち的外れではないってことかもしれん。

「じゃあその一つの可能性である未来では、俺たちは何をするんだ？」

長門にしてはやや長めの沈黙が流れる。

「……わたしの認識しているのは、朝比奈みくるが意識し、行動を起こすことで発生する可能性の未来のみ。だから朝比奈みくるに決定権を与えるのが最もその可能性を実現させる近道。未来でも同じ

認識をもっている」

「じゃあ俺たちは朝比奈さんの行動を手助けすればいいってわけか。」
「そう」

長門とのボールの無いキャッチボール的会話をしながらも、ハルヒを追っていた俺たちは、部室棟に着いた所で尾行をやめた。ここまで来てハルヒが別の所に行くとは思えないし、これから部室以外へ向かうという予想は万馬券を誕生日の語呂合わせで買って当たる程度の確立だ。そうと決まれば話は早い。俺たちは朝比奈さんと合流すべく、待機場所へと向かった。

朝比奈さんといえば、体を半分だけ廊下に出し、部室を監視できる位置でまじめにハルヒの入室を確認しておられた。あわてている様子で、どうも携帯電話を取り出して何かをしているらしい。

俺と長門はハルヒと会わないよう裏口から入っていたので、ちょうど朝比奈さんの立ち位置の真後ろにいた。その光景がよく見え、朝比奈さんはまじめに取り組んでいるのだろうが、どう見ても子供のスパイごっこであった。

「朝比奈さん」

「ひゃいっ！」

背後から突然声をかけられて驚いたのか、朝比奈さんはその場につんのめってしまった。

「キヨ、キヨ、キヨン君！ おど、おどろかさないでくださいっ！」
申し訳ない。ですがつくづく予想を裏切らない反応を示してくださいますね、朝比奈さん。

「そ、そうだ。涼宮さんがたった今部室に入りましたよ。でもなんか様子が変わった。何かあったんでしょうか？」

朝比奈さんの表情は心配という色に染まりきっている。ハルヒ、

お前は幸せ者だよ。出来れば立場を一時交代してもらいたいぐらいだ。

「とにかく、ハルヒに会って話を聞いてみましょう」

俺たちは、というより俺と朝比奈さんは若干の緊張を感じつつ、部室の扉前まで行き、おもむろに扉を開けた。

そこには一人窓の外を眺めながら立っているハルヒがいた。俺は一瞬だが世界が停止したのかと思った。以前ハルヒがSOS団の目的について高らかに宣言した時も同じような感覚があったが、今回は決して同じではない。それは言葉から伝わった事ではなく不覚にもハルヒの表情で悟ったからこそ停止してしまった。前は最高の楽しみによる事象で、今は悲しみ？ いや落胆だろう。ハルヒは明確に落胆していた。それは外部に対してなのだろうか。あるいは自分自身に。

なんとも表現しがたい気分になった。ハルヒの落胆っぷりが、感染力の高いA型インフルエンザのように感染したのかもしれない。普段騒がしいハルヒに振り回されてばかりの俺だが、どうも元気の無いハルヒは見えていられない体質になってしまったらしい。なんだか急に走りなくなったのだ。それだけだと思いたいね実際。

ハルヒはゆっくりと窓の外から俺に顔を向ける。眉をきりりと吊り上げる。

「なによ。何か用でもあるの？ ないならちょっと一人にしてくれない？ 考えたいことが……」

「ハルヒ、これからリレーの練習をしないか？ 朝比奈さんと長門もいる。古泉もこれから呼んでこよう」

ハルヒはまるで狐に頬をつねられた人間を体現しているのではないかというほど、あっけに取られていた。実を言うと俺もあっけに取られ、そして呆れたね。なんと無謀な人間だろう俺は。ほぼ確実に落とし穴があるにも関わらず直進するのと同じようなものだ。

「キョン、ちよっとどうしたのよ突然。何かあったわけ？ それともなにか目的があるとか？ ははあ、分かった。さては昼休みに練

習する代わりに放課後の練習を休もうつて魂胆ね。ダメよ。SOS団は振り替え休日を認めないんだからっ！」

弾けんばかりの笑顔である。確実に時間は動き出した。

「あれ？ でも変か。みくるちゃんに有希もいるし。ひよっとして本気？」

ハルヒは俺を通り越して朝比奈さんと長門に語りかける。

「え？ えっとそうですね。練習したいです」

朝比奈さんは何度もすばやくうなずく。

長門は数ミリだけ微動して前髪を縦に揺らす。

「へー、いいじゃない！ その心意気はすばらしいわっ！ ようやくSOS団としての自覚が目覚めてきたようね。じゃあさっそく練習よ。キョン！ さっさと古泉君を呼んできなさいっ！」

なぜに俺だ。なんて思っても口には出せまい。朝比奈さんと長門には悪いことをしたな。完全に俺の独断先行である。その気持ちを視線に乗せて両名に送った。朝比奈さんは困惑ながら笑顔で答え、長門はいつも通りの無感情な視線を返してくれた。

「分かった。じゃあ古泉を呼んでくる」

それだけいつて俺は部室を後にした。

にしてもハルヒの奴はなんだってあんな落ち込み具合だったんだ。やはり長門と朝比奈さんが言っていたように、クラスの連中と練習できないのが原因なのかね。ハルヒがSOS団以外にそこまで神経を使うのは初めてに違いない。

そしてハルヒは何だかんだSOS団の部室に居るんだな。一人になるにしたってもっと場所はあるだろうに。これならわざわざ朝比奈さんと別行動を取る、なんて危険を犯す必要はなかったわけだ。

同時に俺は部室塔の廊下を歩きながら古泉の居場所について考える。正直検討もつかない。教室にはいないし、あいつの自由時間なんて知るはずも無いのだ。

これらのハルヒと古泉の居場所による思考が脳内を巡ったとき、俺はまるで金属バットで殴られたかのような衝撃を感じた。実際殴

られてなどはないのだが、それくらいの衝撃がある考えが頭に浮かんだのだ。思わず足を止めてしまうほどの。

俺は何故ハルヒが“やはり”部室にいたのかと安心したんだ？

どうして古泉が教室にはいないと断言できる？

俺は完全に思い出した。なんたつて九時間前に俺は経験しているのだ。昼休みハルヒの行動が気になり学校を探し回った経験を。そこにハルヒが部室に居た事実は存在せず、古泉も朝比奈さんも長門も存在していなかったのだ。

これはかなりまずい。一番最初にハルヒがいそうな場所とはどこなのか考えたのは九時間前の俺なのだ。SOS団部室しかないだろう。現に最初に向かったのは部室だった。

俺は慌てて古泉搜索を中断し、全速力で部室へ向かった。完全に九時間前の俺と時間との勝負である。

廊下を走り、階段を駆け上がる。部室の扉の前へ行き、力強く扉を開け、

「ハルヒ、走るぞ！」

俺は叫び、部室に沈黙が流れる。

「は？」

「キヨン君？」

「……………」

伝わるわけも無い。言つてはいけない部分が多すぎる。だが朝比奈さんのように禁則事項で済ます訳にはいかなし、長門のように沈黙を貫き通すなど出来ないのだ。

「先にグラウンドの鉄棒前まで行った方がジューズおごりだ」

もはや賭けの領域である。ハルヒの負けず嫌いに賭けるしかない。俺は振り返りすぐに走り出した。部室を飛び出し、廊下を駆け抜ける。後ろからハルヒが声を上げている。

「ちよつと、フライングじゃない！」

さらに後ろ方からは、

「え？ なんですか？ 走るの？」

朝比奈さんが困惑の声を上げ、

「……………」

長門が微かに動く気配を出す。

全くもって意味不明なことをしている。SOS団らしいといえばそれまでだが、校内を全力疾走している様はさぞ不思議な光景なのだろう。だがそうも言ってられない。回りに配慮している余裕は無いのだ。九時間前の俺がどこを通ったか思い出しながら、そこを避けつつ鉄棒前に行かねばならないからな。

なるべく人気のない所を通り、裏庭を抜け、グラウンドにあるサッカーゴールの後ろを走り、完全に息を切らしながら鉄棒前に行った。

人は追い込まれると力を発揮するというが、どうにも本当らしい何とかハルヒに追いつかれること無く、九時間前の俺に見られずにするんだ。ハルヒが少しだけ遅れて到着する。顔は意外なことに怒りではなく笑顔だった。海水に含む鉄分程度の意外という色合いを含ませた笑顔である。

「早いじゃないのキョン。これならクラブ対抗リレーも期待が出来るわね。だけどフライングなんだからこの勝負は無効よ！ とりあえず喉が渴いたから三人分のジュースを買ってきてちょうだい！」

なんて爽やかに理不尽な事を言いやる。朝比奈さんと長門が遠くから走ってくるのが見えた。朝比奈さんはバテバテで、長門は一切呼吸を乱していない。まあそれでもジュースくらいは買ってもいいだろう。巻き込んだのは俺だし、ついでに古泉も探さなきゃならん。それにハルヒはいつものハルヒに戻ったしな。

第五章<3

「じゃあジューズのついでに古泉も呼んでくる」

俺は最後に朝比奈さんが鉄棒前まで来ると同時に移動した。

だが、ここに来て新たな問題に直面した事に気がつく。それはすでに九時間前の俺が体験したことであり、結論として居ないと判断した俺に対する挑戦でもあると言える。

SOS団、団員の居場所である。現状では古泉の居場所特定が最優先なのだが、同時にこの時間に存在している朝比奈さんにも注意をしなくてはならないのだ。なぜならば九時間前の俺はこの昼休みに誰も見つけられていない。と言う事は、九時間前の俺より先にコソタクトをとって団員が接触できないようにしなければならぬのだ。

それらの問題に頭を抱えながら、ハルヒに呼んでくると約束した古泉を探すのだが、それが大変である。

本来にして俺は別に古泉なんかの昼休みの過ごし方に興味などあるはずもなく、完璧なまでの無関心を貫いてきた。もちろんあいつの裏設定上、学校内での活動に少なからずの興味はあるが、それでも積極的にあいつの活動に参加したいとは思っていなかったのも、当然といえば当然の結果である。

妥当な線では教室で静かに昼食を決め込んでいるか、食堂で学生たちの喧騒に巻き込まれながら人気メニューの争奪戦を繰り広げているというのがあげられる。長門なら昼飯を食べずに過ごしているのも驚きはしないだろうが、古泉は一応のところ人間に属しているのだろうし、三大欲求の一つを満たすことに一遍の疑いもあるまい。

だが九時間前俺はあいつを探して教室に行ったりするので、前者の可能性はほぼ無い。そう考えると食堂なのだが、居るかどうかは甚だしく疑問である。それでも向かうしかあるまい。

向かった先の食堂は恐ろしく込んでいた。居ないかもと思う以前

に見つけられないかもの方が正しいかもしれないな。

俺は混乱を極めているカウンター前の列群に早々と見切りをつけ、割と落ち着いている長テーブルの方を探してみた。しかしあいつは居ない。こうなると行き先は完全に不明である。

まさか秘密の部屋でもあって、そこからハルヒを監視でもしてるんじゃないだろうな。

そんなCIA調のトンデモ説を達観的な感情を込めて妄想していた矢先、遠くのテーブルから声をかけられた。

「おーいキヨン君っ！ こっち、こっち。ここに席があいてるよっ！」

実によく通る声だ。喧しい中でもはつきりと聞き取れる声の主は、ハルヒに負けんばかりの笑顔で手を振る鶴屋さんだった。しかも隣には朝比奈さんが居た。

一瞬なぜ朝比奈さんがここにあると思ったが、すぐに頭を切り替えることが出来た。願っても無い遭遇である。飛んで火に入る夏の虫とは朝比奈さんに失礼極まりないが、意味合い的にはまさしくそんな感じだ。

「お二人とも今から昼飯ですか」

「そうだよ。あつれね？ キヨン君は昼飯もってないね。まさかの金欠かいっ？ だったら貸すによるよ」

「いや昼飯はいいんです。じつは古泉を探してるんですが、朝比奈さんはあいつがどこにいるか知ってますか？」

朝比奈さんはスパゲッティを食べているので、しきりに口元を気にしていらっしまった。

「え、古泉君ですか？ すみません判らないです。でも何かあったんですか」

「い、いえ特に込み入った感じではないんですが……」

思わずしどろもどろしてしまった。ここで朝比奈さんに俺の現状について感ずかれたら大丈夫なのか定かではない。別に朝比奈さんにはバレてもいいのかもしれないが、危険を冒すことは出来ない。な

にせ鶴屋さんがいる。

そんな微妙な空気を読み取ってくれたのか鶴屋さんが、

「あたしはみくるとよく食堂に来るけど古泉君は見かけたこと無いっさ。教室じゃないかなっ！」

助け舟を出してくださった。

「ええ、俺もそう思っただけ教室に行っただけですけど、古泉は居なかったんです」

正確には九時間前の俺が確認しただけだが。

「そっか、じゃわかんないなっ。ごめんよっ！でも時間によつて偶然居なかったって事もあるかもっ。わたしの勘はよく当たるっさ！キョン君、諦めたらダメだよがんばるんだっ！」

鶴屋さんは屈託のない笑顔でそう断言した。実に説得力がある。ハルヒの行き当たりばったりな言動とはなぜか一味違う感じがするね。

「わかりました。もう一回あいつの教室を探してみますよ」

向かう場所は鶴屋さんのおかげで決まった。鶴屋さんの言うことならなぜか信じられてしまうのは、きつと一つの人徳なのだろう。実際在り得る事なのだ。九時間前の俺はあくまでハルヒを探していたわけで、そこまでピンポイントに古泉を探してはいなかった。ついでに教室を覗いたという程度である。考えれば考えるほど古泉が教室に居る気がしてきた。ならば一刻も早く古泉探しを続行せねばなるまい。ハルヒの怒りゲージが秒単位で加算されているだろうしな。

そうと決まれば全は急げと言っただろう。あとここでやるべき事は一つ。

俺は朝比奈さんに視線を向け、

「朝比奈さん。一つ頼まれごとをお願いできますか？」

「え？なんですか？」

「ここでは何なんでちょっと……」

朝比奈さんに退席を促し、あえて人ごみの多いカウンター前まで

行つた。ここで聞き耳などいちいち立ててる奴などいまい。着席したままにいる鶴屋さんがなぜか見守るような目で頷いているのが気にはなるが、この際勘違いの一つくらい仕方あるまい。

「単刀直入に言います。朝比奈さん、今日一日、と言うか学校が終わるまで俺の事を無視してください」

朝比奈さんはひよこの様に愛くるしい瞳をぱちくりさせている。

「ど、どういふことですか？ 意味がよくわからないんですけど……」

果たしてどこまで伝えてよいのだろうか。ここで全てを教えたとして、もしそれが現実なら遡行した時に何かしら朝比奈さんからのアクションがあつたはずである。でも朝比奈さんはこれからどうすべきか判らないと仰つた。

それならば俺に言える言葉は一つしかない。朝比奈さんが何となくでも状況を理解でき、かつ深入りされないような言葉。

「すみません。それは禁則事項です」

朝比奈さんは意表を突かれ、困惑の中に納得をブレンドしたような表情をした。俺の脳内アンテナは悲しみも少しだけ混線してきたように感じる。

「そうですね……わかりました今日一日学校の中だけキョン君を無視すればいいんですね？」

ええ、そうですね。でも朝比奈さんあまり悲しそうな顔をしないでください。それは未来的事象を認識できていない事からくるにしても、すぐに解決する問題ですよ。

「よろしく願います」

俺はそれだけ述べて食堂を後にした。少しだけ離れてもう一度朝比奈さんと鶴屋さんの方に目を向けると、席に戻った朝比奈さんは真つ赤な顔で鶴屋さんに何かを話しかけている様子である。会話についての想像は控えておこう。

古泉の所属している一年九組は特別クラスでもあるので、俺のクラスより一階下の教室にある。九時間前の俺は今頃コンピ研の部屋にでもお邪魔しているころだろう。移動に関しては至って安心と言えた。

俺は一年用の校舎に入って階段を上がり、九組の前で古泉が居るかを確認した。さりげなく窓から覗く形でな。これが憧れの先輩や片思いの君みたいな展開ならまだいいが、現実はやたら爽やかな超能力野郎なのだから気分も冴えないのは当然だろう。

教室内は意外と静かであり、参考書を読んでいる者、友人と談笑している者、昼食をとっている者など俺のクラスとそんなに変わった感じではないようである。若干優雅さが感じられるのは、俺にちょとした羨望があるからかもしれん。

だがそんなことはどうでもいいのだ。重要なのは古泉が居るかであり、結果は残念ながら見当たらなかった。あいつは本当にどこに居るのだ。鶴屋さんの勘が外れた今、頼れるのは俺の勘しかなく、小学生がメジャーの球を狙うようなものだ。空振りに決まっている。半ば諦め、ハルヒに詫びを入れつつ長門に懇願でもするかと思い始めていたそのとき、窓を覗き見る俺の肩に何者かの手がかかった。一瞬焦ったね。なにせはたから見たらあやしい人物なのだろうからだが慌てて振り向いた俺はそいつの顔を見て安心と妙な怒りにさいなまれた。

「おや？　どうかありませんでしたか。僕には誰かを探しているように見えますが。よろしければ呼んでみましょう。九組にあなたの思い人がいるとは思いませんでしたか」

一瞬頭を叩いてやろうかとも思ったが、そうも言ってもらえない状況である。あんまり時間が掛かると俺の方がハルヒに殴られかねん。こいつを呼び出すのは固有名詞一言を言葉初めに入れてやればいい。「ハルヒが呼びだぞ古泉。これからリレーの練習をするからな。」

「昼飯は無しだ」

文句があるならハルヒに言え。とまでは言えんがな。原因は俺だ。それはまたいきなりですね。どういった作用が働いてそう言った状況になっているのか気にはなりますが、いいでしょう行きます」

俺は急ぎ足で古泉を連れてハルヒのいる鉄棒前へ向かった。

それにしてもなんで今いて九時間前の俺は古泉を見つけられなかったんだ。さすがにこれだけ付き合いが続けば見落とすことは無いだろう。

思わず疑問が口に出た。

「古泉、お前今日昼休みはどこへ行っていたんだ？」

古泉は少し間を置いた。

「行ったのではなく、行くではないのですか？ 過去形で話されても僕には未来のことなど分かりませんが」

これはまずい。俺はバカか。こんな簡単なことに気がつかなかったとはな。

俺が古泉を探しに行ったのは昼休みの終わる寸前だったのだ。昼休みの始まりと流れている時間が違うわけで、俺の知っている過去と違っていても当然なのだ。というか、改めて考えたらやはり九時間前誰とも会えなかったのは、今の俺が原因だったんだな。それなら辻褃を合わせるのも難しくは無い。

そしてこの過程が事実なら、古泉に今の状況を知られてはいけないのだ。こいつは知らなかったから夜中に俺へ電話を寄こし、説明を求めた。

「い、いやそうだが、始まったばかりでも昼休みは昼休みだろ。だからどこへ行っていた聞いたただけだ」

背中にじんわりと汗を感じる。

「……たしかにその通りです。短くても過去は過去ですから、表現的には合っていますね。自販機に飲み物を買って行ったんですよ。それと話に出てきたので言いますと、少しだけ未来がわかります。実は五時間目の準備をする係りになっていまして、出来れば早

めにあがらせていただけると有難いですね。これは未来に対する願望です」

古泉の笑顔には疑念が少しだけ感じられた。だが今はこれでいいだろう。

「ハルヒに言え。俺にはお前の未来まで左右する力はない」

「たしかに」

今度は疑念無く笑う。俺は黙って少しだけ歩く足を速めた。

それにしても大変な作業である。今のところSOS団の活動しか行なっていない。ハルヒが求めているのはクラスでの活動なのだから、これは目的に近づいているとは言えないだろう。朝比奈さんにも長門にも、隣にいる古泉にも協力してもらわねばなるまい。まあ古泉は現状を理解していないので、そこまで期待はしていないがな。それでもたった今役には立った。こいつが今自販機に行っていたという話のおかげで、SOS団三人娘へのジュースの件を思い出した。まあ借りってことにしておこう。

第五章<4

「遅い！ もう昼休みが半分も終わっちゃったじゃないの。いい？ 時間つてのは常に一度しか来ない大切なもののよ。一分一秒をもっと大切にしない！」

それだけ言つてハルヒは缶ジュースを一気に飲み干す。

まさにハルヒの言う通りである。時間を大切にするという意味では今の俺たちの立場はあまりに切迫しているのだ。古泉を見つけ出して一緒にリレーの練習をするのでは何も解決にはならない。なぜならば、九時間前のハルヒは五時間目の授業をすっぱかして何かをしているのだ。つまりは俺や朝比奈さん、長門が裏でクラスの連中にハルヒ発案の練習に参加させる算段を整えていたのではないかと俺は思い始めている。だが一体どうやって？

「取りえずジョギングから始めましょう。体を温めないとね」

さっきあれほど走っただろうに。だが好都合だ。

ハルヒを先頭に俺たちは生徒がスポーツを楽しむグラウンドの外周を走り始める。同時に俺は朝比奈さんに足並みを揃え、

「朝比奈さん、この状況どう考えています？」

と、考えそのままの質問をした。長門は朝比奈さんの行動が未来に繋がると言っていたからな。

「え？ ええつと……とにかくキョン君のクラスの人に涼宮さんが提案する練習に参加してもらいたいです。きつと涼宮さんもそれを望んでるから」

たしかにその考えは正解だと思います。ですがそれをどう実現するんですか。クラスの連中の悪口を言うつもりはないが、正直ハルヒの企画する事柄に積極的な参加姿勢を見せるとは思えない。むしろ全力で回避に走る恐れがある。

「その事について何か案があったりするんですか？」

「そうですね。実は皆さんをどう誘つかは涼宮さんに任せようと思

うんです。あたしに出来ることは限られてるし、涼宮さんが直接訴えた方がきつとみんなの心だつて動かせるから」

学生の明るい声が響いている中、朝比奈さんは笑いながら仰った。これだけ信頼されてるんだ、ハルヒには頑張ってもらわないとな。なんて妙に納得してとりあえず走るかと考え始めた俺に、ちよつとした疑問が脳裏に浮かんだ。

練習場所の問題である。

クラスの全員が参加するとは考えがたいが、それにしてもSOS団のように少数で活動するのは訳が違ふのだ。今のようにグラウンドを使うことは出来まい。放課後は運動部に占拠されているであろう場所で、リレーの練習はできんだろう。まあハルヒのことだから何とかしちまう恐れもあるが、それだけは何としても避けたい。

この場合は誰に相談すればいいのだろう。未来人である朝比奈さんには重責であるだろうし、長門なら場所くらいお決まりの呪文で情報結合をどうかで、出来なくはないだろうな。だが却下だ。

ただでさえクラスの事には未来的な事象も、宇宙的な力にも、超能力的事件なんかも回避したい所だったのだが、すでに短期間のタイムトラベルなるSFの代表的な異常事態を遂行中なのだ。いかん、こんなこと考えながら走ってたら本格的に息切れしてきたぞ。

俺は脳に酸素が回らなくなってきたので、この問題を単純な解決策へ投げることにした。こういった問題は古泉に持ちかけるのがベストでありベターだ。

問題としてはどうやって古泉に話を振るかなのだが、結構簡単に解決した。軽いようできついジョギングを終えて、ハルヒは思い出したかのようにバトンを部室へ取りに行ったのだ。この僅かな時間を有効活用しないわけはあるまい。

だがちよつと迷うね。古泉をここまで連れてきたときにもあった問題だが、こいつだけ事情を知らないんだよな。どうしたものか。

「なあ古泉、実は折り入って相談があるんだ」

「おや？ あなたが僕に相談とは珍しいですね。なんででしょう」

古泉は男からは鬱陶しく、女からはうつとりされそうな笑みを浮かべている。その後ろには肩で息をしている朝比奈さんと、いつもどおりの表情の長門が視線をくれており、若干の緊張が走る。

「実はな、今日の放課後にでもクラスの連中と体育祭に向けた練習をしたいなと考えてる」

何故古泉にこの様な話を振ったのかというと、大人数で運動が出来るそんな場所をつい最近目にした記憶があったからである。ハルヒとバレーをした陸上競技場の事を俺は思い出したのだ。

「でだ、俺としては学校を使いたいんだが、運動部からグラウンドを奪うわけにもいかんだろう。なんとかこの前の……競技場を借りれないか？」

古泉は即答しない。何かを探るような目で俺を見ているだけだ。そして意味深に笑い、古泉がしゃべりだした。

「なるほど、確かに大人数で、しかも体育祭に向けた練習をするのにあれほどうつてつけの場所はありませんね。ですがあなたが今説明してくれた理由で一つ気になる、と言いますか分からないことがあります。それはあなたの意見ですか？ それとも涼宮さんの意見ですか？」

今度は俺が沈黙する番だ。どう答えたらいいのか分からん。朝比奈さんや長門に視線を送っても現状を見守る、という意思しか伝わってこず、即ち俺の独断で答えねばならないことになる。まったくひねくれた奴だ。素直に了承すればいいものを。

俺は全ての事情が伝わらぬよう、しかし今現在の心境をそのまま答えにした。先に言うが面倒くさかったただけだ。

「ハルヒがおそらく望んでいる事で、俺が考えた意見だ」

「……いいのですか？ クラスのことに關しては我々は關与しない方がいいとの意見だったことをお忘れではないでしょう。涼宮さんが望みそうなことを前もって予測して動くのはあくまでもSOS団関連のみのはずでしたが」

お前の言うことは一々最もなことだ。

「まあ今回はハルヒの無理難題を解決する為ってわけじゃないんだ。それくらいの手助けはあってもいいんじゃないか」

クラス無関与という俺発信の決まりを俺が破るんだから実に決まりが悪い。

「すると今回の事はあなたが……。いや、やめておきましょう。了解しました。即答は出来ませんが、準備が出来るよう手配をしておきます」

含みのある言い方ではあるが、一応何とかかなりそうだな。後ろの方で朝比奈さんも胸をなでおろしている感じた。遠くの方でハルヒがバトン入りの紙袋を持ってくる姿が見えた。やれやれ。

その後、俺たちは至って普通のバトン渡しを敢行し、僅かに残った昼休みという時間をすごした。

「ふう、まあこんなものかしら」

グラウンドから生徒が徐々にはけ始めるのを意識してかしないでか、ハルヒは満足げな笑みを浮かべて終了を宣言する。さっきまでの陰鬱な感じが嘘のようだ。

「でも中々有意義な昼休みを過ごせたと思わない？　ねえみくるちゃん」

「え？　そ、そうですね。とっても」

なんて会話をしているが、さてどうしたものかね。このままハルヒと教室へ帰ってしまつてはとてもある意義とは言えない。俺が九時間前に受けた五時間目の授業では後ろの席が空席となっており、つまりは何らかのアクションを起こさねばならないんだよな。

「じゃあまた放課後に会いましょう」

なんて言って校舎に向かって歩き出すハルヒ。どうする。この流れを変えなくてはいけないことを誰にも伝えてはいないのだ。俺がやるしかないだろう。

「まてハルヒ」

「なに？ キョン。早くしないと授業に遅刻するわよ」

長門は朝比奈さんの意思に任せるのが一番といい、朝比奈さんは流れに任せるという状況である。こんな中でいまさら気が付いたね。それはつまり俺が何とかしないといけないという事なのだ。そこで俺は賭けに出た。てかさつきから賭けばかりだな。

「いやな、実はちよつと提案があるんだ。正直ここまで練習を重ねてるからには、なんとしても体育祭では勝ちたい」

一瞬の沈黙。

「当然よ！ そのための練習だもの！」

まるで独立宣言をした大統領のような晴れ晴れしい笑顔のハルヒである。ここまでいい。

「だよな。だが俺としてはそれだけでは満足できん。せっかくの体育祭なんだから参加する競技には全て勝つ。そうだろう？」

がはっ。なんて俺らしくもない熱血漢あふれ出るセリフだろう。

この際失敗でもいいから突っ込んでくれハルヒ。

そんなハルヒはケーキの箱を開けてみたら中身が和菓子だった時のような微妙を体现する面持ちで、

「ま、まあそうよね。勝ちにこだわるのは当然のことよ！」

なんてことを言う。マジで言うかハルヒ。だがお前らしいと言えはらしいので安心したよ。

「だから提案する。今みたいな練習をクラスの連中にもやらせて、クラスでも勝ちに行くべきだ！」

大げさすぎるくらいに選挙演説よろしく言ってみた。これくらいの方が効果ありそうだからハルヒには。

「な、なによ随分と燃えてるわね、あんたらしくも無い。なんか裏があると思えないわ。言ってみなさい。クラスで優勝したら誰

かからご褒美でももらえるとかでしょ、どうせ」

まずい。やりすぎたか。完全に疑いの目で見られている。まあ確かに怪しいよな。それは認めるよ。だが今俺が言ったことはお前が思っている事なんじゃないのか。

「そうか？ てつきり俺と一緒にしてお前も体育祭に向けてやる気を出してるんだと思ったがな」

「な、なんであたしがあんと一緒なのよ！」

正確には一緒じゃない。俺はお前の一方通行的な視界をクラスに向けることに躍起になっていて、お前はその視点の先にあるものに燃えてるのさ。

「でも負けるのはごめんだろ。ただこのままで体育祭に挑んでも勝てる気はあまりしないぞ。だったら今みたく練習するしかないだろう。それともクラスのことはどうでもいいか？」

少々ストレート過ぎたかもしれん。

ハルヒは俺と目を合さず、付き合いの無い人間ならどう見ても怒っているようにしか見えない、眉を吊り上げた表情をしている。SOS団員にはわかるだろう。これは怒っているのではなく、どういふ表情をしたらいいのか分からないときの顔なのだ。

「そりゃあたしだって負けるのなんて断固拒否よ。でもあの連中のやる気の無さはどうにもならないじゃない」

九時間前にクラスは期待なしと切り捨てていたのと比べると、ずいぶん対応が違うじゃないか。これまでの短い会話に心境を変化させることでもあったのかね。よくわからんが願ったり叶ったりとは今みたいな状況の事を思っただけの人が考えたんだろう。もしかしたら今の状況を見た未来人が過去でリークしたんじゃないかって思うくらいだ。それとなく朝比奈さんに聞いてみるか。この件をなんとかしたら。

「そこで本題の提案だ。クラスの連中がやる気ないのは俺も同感する。でもなんとかしなきゃならんだろう。それをこれから部室にでも行っただけで考えないかって話だ」

「これからって、まさか授業をサボる気？」

「いまさら二時間ぐらいサボったって、そんなに俺の頭が変化するとは思えん。谷口に差を開けられなきゃ充分だ」

「そんな考えだからいつまでたっても勉強が出来ないのよ、あんた。でも、まあいいわ。キョンがそこまで体育祭で勝ちたいっていうなら一緒に案を考えてあげてもいいわよ。どうせあんたじゃろくな案を考えれないだろうし」

「ずいぶんな言われ様じゃあないか。だがこの賭けも俺の勝ちだな。それにハルヒの言っている事もあながち的外れて訳じゃないんだ。正直どうすればクラスの連中を練習に呼び込めるのなんて考えても全然答えが出ん。だったらハルヒと一緒に考えればいい。そうだろう？ 長門が朝比奈さんに任せ、朝比奈さんは流れに任せる。それなら俺はハルヒに任せればいいのさ。」

「それなら話は終わりだな。部室に行こう」

「そうね！」

俺とハルヒが部室へ向かおうとし、

「あのっ！ あ、あたしも一緒に手伝います！」

朝比奈さんは状況が読めたのか、読めてないのか、慌てて俺の意見に賛同し、長門はゆっくりと動き出す。古泉だけは本当に理解していない様子であるが、取り合えず観察モードに移行したようである。すまんな古泉、九時間後には分かることだ。勝手にお前が理解する形で。

第五章<5

まもなく昼休みの終了を告げるチャイムが鳴り響き、俺たち、といつても古泉を除いたSOS団はいつもの部室に集合していた。

なぜ古泉を除いてなのかといえば、まあ答えは簡単である。あいっとハルヒ以外のメンバーは長門風に言う異時間同位体が存在していて、各々の教室にいるのである。つまりは授業をサボることにはならないのだ。長門については、まあ長門である。異時間同位体は居なくとも、俺の知ることができない力が働くとか何かだろう。そんなわけで全員参加のSOS団で一人クラスへ引き返す古泉は申し訳なさここに極まりの状態であった。

「すみません。クラスでどうしても抜けられない用事がありました。できれば協力したいのですが」

「いいのよ、そもそもクラスが違うんだから無理をすることないわ。それに古泉君のクラスは特別クラスだかサボれないでしょ」

なんて会話が展開していた。まあ後は任せておけ古泉。お前は競技場を抑えてくれればそれでいい。

「じゃあキョン、具体的にあんたはどうしたいの？ 何か案はあるわけ？」

話は部室にもどる。ハルヒは朝比奈さんを書記にし、一緒にホワイボードの前に立っていた。

案ねえ、あるなら苦労はしないんだがな。

「取り合えず場所はこの前俺たちがリレーの練習した競技場でもいいだろう。ここから遠くもないし。どう参加させるかは……正直わからない。俺が言っても聞くとおれんしな」

情けない話だとは思わんね。俺は平凡を絵に描いたような人間なのだ。そもそも鶴の一声を持っている大人物などそうは居まい。目の前に一人心当たりはあるが。

「ずいぶんと準備だけはいいわね。それってもう古泉君に話は付け

てるってことでしょうか？　なら話は簡単じゃない、みんなをそこへ連れて行けばいいのよ」

連れて行けばってハルヒ、お前なあ一番難しいのはどうやって参加させるかなわけで、それが出来そうもないからこうやって話をしているのだろう。それとも何か案でもあるのか。

「な、なによ変な目で見て、意見があるならはつきり言いなさい！　こりや案なんて無いのだろうな。まあ俺にしたって同じようなものなんだし、人のことは言えまい。だが正直言ってここまで考え込む必要があるのかね。というのも、俺としてはそこまでクラスの連中に悲観はしていないのである。そりゃあハルヒの求める非日常的な属性のある人間などは皆無だし、至って平凡なクラスには退屈さえ覚えることもある。しかしそれはSOS団という年中無休でハイな活動をしている団に慣れてしまっているに過ぎないわけで、決して絶望的に無気力で無関心という、ハルヒと真逆なやつらではない。言うなれば『普通』なのだ。

「えーっとな。みんなを連れて行けばいいのはわかるんだが、ただ命令するだけじゃ人は動かないわけで……」

「じゃあなに？　馬みたくニンジンでも前にぶら下げて誘導でもするわけ。まあ効果はありそうだけど、問題のニンジンはどうするのよ？　男どもはみくるちゃんにでも一肌脱いでもらえばなんとかかなるとして……」

「ひいー！」

朝比奈さんはまるでマンドレイクの叫び声でも聞いてしまったかのような、絶望的表情で凍りついた。

「いやニンジンとかそうじゃなくて、なんて言えいいんだろう。もっとう普通にな……」

「普通って何よ？」

俺に『普通』の意味を聞くのか？　そんなもん見れば分かるだろう。俺が普通で、俺以外の今いる人間が普通外だ。でもストレートには言えまい。

こうして困った状態でなんと普通を比喻するか思慮していたとき、「普通とは、広く一般に通ずること。どこにでも見受けられるようなものであること。なみ……一般」

長門が音声付電子辞書のような平坦な声でいい、ゆっくり俺に視線を向けてきた。もしかしてフォローしてくれたのか？

「へー有希は相変わらず物知りね。その意味が正しいなら、普通って言葉を考えた人は世の中がつまらなくて仕方がなかったんじゃないかしら」

もしそうならお前はその人の生まれ変わりか何かだろう。てか話がそれてるな。これじゃダメだ。

俺は何も考えがないまでも、話を戻す為に声を出そうとした。だがとつぜん長門がいつものように平坦な声でさらに話し出し、俺は思わず口を閉じる。

「この場の意味としては、一般的な行動を表す。団体行動を促す為の基本、礼儀」

「有希？」

「長門それどういう意味……？」

俺とハルヒは長門の発言をどうにもうまく理解できず。同時に疑問符を口にした。

「そ、そうです！ 長門さんの言うとおりです。ちゃんと言えはいんですよ！」

突然、朝比奈さんは長門に同意する声を上げる。未来人と宇宙人にだけ伝わるテレパスでもあるのだろうか。俺にはまったく分からない。ハルヒを見ると、どうも同じように理解できていないようであり、

「何よ、みくるちゃん、有希。その普通の行動であの連中を動かすことでも出来るってわけ？ どんな方法よ」

朝比奈さんは雨上がりで昼下がりの晴れ間のように明るい笑顔で答えた。

「簡単です。お願いすればいいってことなんですよっ！ リレー練

習に参加してくださいーいって言えばいいんです。ですよね長門さん？」

長門はゆっくりで、たしかに頷く。

「意味合いとして同義」

ハルヒはと言えばなんとも微妙な表情で、頭上にクエスチョンマークが見て取れそうな感じである。ちなみに俺はなるほどな、と思ったね。分かるだろうかこの意味。

「そんなことなわけ？ 成功するとはとても思えないわね、お願いなんて。都合が良すぎるもの。まだニンジン作戦の方が可能性を感じるくらいだわ」

ハルヒは困惑を混ぜながらも否定をブレンドした感じに表情を見せている。違うんだハルヒ。たしかに普通ならお前の言うとおりニンジンをぶら下げた方が効果があるかもしれん。だがお前限定で言えば、その効果が逆になる可能性が高いんだよ。普段一方的な命令口調で、唯我独尊を貫いている人間が、頭を下げて『お願い』をする。俺なら否定は出来ない。普通人間の俺ならな。

だが、さてハルヒをどう説得するかだが俺には自信が無かった。

ハルヒが頭を下げるなど想像も出来ん。

「だから有希の案はひとまず却下ね。次の案を考えましょう」

そういつておもむろにホワイトボードに何かを書き記そうとするハルヒ。俺は何も出来ない。何かをしようとしたのは、意外なことに朝比奈さんで、

「だ、だめですよお！ きつと何をして、何を準備してもみんな参加してくれません！」

ハルヒは虚を突かれたのか、若干驚き顔であった。

「随分否定するわね。もしかしてニンジン作戦に参加するのが嫌だからとか？ そこまでみるちゃんと言うならニンジン作戦を考え直さなくも無いけど、まずはそれに見合うアイデアを言ってもらわないと逆転勝訴は引き寄せられないわよ」

ハルヒは冗談交じりのニュアンスでそう言った。そりゃそうだろ

うよ。誰が好きでニンジン役なんかをするんだ。

なんて思っていたが、朝比奈さんは真っ赤にした顔を横にフリ、否定を現した。

「ち、ちがいます。あたしは出来る限り涼宮さんの助けになりたいんです。もしあたしが何かして皆さんを呼べるならなんでもします。でも……あたしじゃダメなんですっ！」

少しの沈黙が流れて、ハルヒを含め皆が妙にまじめな顔になっている。もちろん俺も。

「みくるちゃんじゃダメってどういう意味？」

「うまく……説明できません。でも、嫌な事とか、やりたくない事なんかって、結局誰にいい環境を用意してもらっても、それは自分の為じゃないし、出来ないんです。でも誰かが一緒になって頑張ってくれたなら……」

「まってよ。それじゃあ、お願いするのも別の方法で誘い込むのも結局は無意味って事になるんじゃないの？ 結局は自分がやる気にならないと駄目ってことで……」

「あたしは涼宮さんが一緒になって頑張ってくれたから体育祭を頑張れるんです！」

「みくるちゃん……」

「あたしは体を動かすのが苦手で、体育祭は楽しみだけど、競技は足を引っ張って迷惑ばかりかけると思っちゃうし、そう考えると嫌になっちゃうんです。でも涼宮さんがSOS団で勝ちたいって言うて、それがとても楽しそうで、あたしもSOS団なんだから一緒に頑張って勝ちたいって思ってたんです。楽しみたいって。それに一緒に練習してくれたのがうれしかったです。だから、だから……」

朝比奈さんは必死に声を出し、目からは今にも涙が零れ落ちそうだった。朝比奈さんからしたら立场上、いや純粹にハルヒに自分の思いや考えを伝えるのは大変な勇気があることなのだろう。俺はそんな風景を見て無性にむずがゆくなってしまった。普段何も言えず

ハルヒにされるがままの朝比奈さんが、ハルヒに真正面からぶつかっている。これは仕事だからとか、仕方が無くという関係で出来ることじゃない。SOS団がすっかり団になってきてしまっているのかもしれないな。

「なあハルヒ、朝比奈さんの言っていることは正しいし、結論として正解だと俺は思うぞ？ それにな、現にお前は今朝比奈さんをお願いされて、一緒に頑張るって姿勢を見せられて、それでも断れるのか？」

「それは」

「だろ？」

戸惑いながらも納得せざるおえないのだろう、ハルヒは憮然とした表情を見せながらも、目に答えが出ていた。もう大丈夫だろう。

「決まりだな。素直に誘えばいいってことだろ。お前がやる気があるのを示せばいいんだ。もちろん俺も手伝うし、何より人を動かすにはまず自分からだ」

ハルヒは俺に一切の視線もくれず、

「あんたに言われなくても分かっているわよ」

などと俯きながらつぶやいた。

「ただ、まあ今から教室に行っても授業中だし、五時間目が終わり次第教室に行つてだな、それで放課後にでも言えればいい」

俺は思わずため息をつきそうになってしまった。ようやく終わったって感じの気分になってしまったんだ。でも何か忘れていないだろうかという気持ちもあり、実際忘れていた。

「……わかったわ。みくるちゃんにそこまで頼まれて断ったりなんかしたら、団長としての立場がないってもんよ！」

素直にはいと言えないもんかねこいつは。さらに、

「でもこんなんでも本当にいいのかしら。なにかもつとこう、計画性みたいなのが感じられた方があたしはいいと思うのよね……」

などと言う始末である。もしかすると不安なだけかもしれないな。でもハルヒの言葉で思い出したのだ。九時間前の俺はハルヒに『お

願い』されて六時間目をサボり、長門の手伝いをしに足を運んだのだった。そして朝比奈さんに会っている。おそらく今の朝比奈さんに。

そこでまた謎が出来た。長門はハルヒに何かを頼まれている設定なのだから、このまま教室に向かう訳にはいかないのだろう。でも何かってなんだ？

俺は朝比奈さんとハルヒのやり取りのきつかけとなったヒューマンノイド・インターフェイスに視線を向けてみる。

瞬間どきりとした。長門は俺が視界に捕らえようとする前に、既に俺を捕らえていたようである。長門、これからどうするんだ？

長門は俺の心の声を聞いたと言わんばかりに微弱な頷きを見せ、

「練習内容」

まるで四字熟語のように言葉を使った。意味はなんなのだろう。

長門を除くみんなが突然の発声に一時騒然とした。なんてことは無いが、疑問符を前面に押し出した感じの空気にはなった。

「有希？ 練習内容がどうかしたの？」

「各個人にあった練習内容を用意したほうが効率がいい」

「あ、いいですねそれ。あたしみたいに運動が苦手の人もいるし、親切な感じで参加しやすいかも」

「なるほどね。確かにその方が参加しやすいし、練習の効率がいいかもしれないわね。でも準備は時間が掛からない？ まあ今日練習しなくてもいいんだけど……」

いや、今日練習を開始しないと何かとまずい気がする。実際まじいだろう。俺は何かフォローを入れようと言葉を考えたが、

「わたしがここで作業する」

間髪いれず長門が断言した。なるほど、そう繋がってくるのかと思っただね。

「有希が？ でもどうやって？」

「運動部に所属している者とそうでない者の運動能力を全国平均に合わせて計算し、その数値に見合った練習を組めばいい。簡単」

それをどう調べるんだ。なんて質問はしちゃまずいんだろうなこの場合。幸いにもハルヒはこの説明に納得したらしいが、

「そう、有希が言うんだったら任せても大丈夫かもしれないわね。でも授業はどうするの。あたしたちだけ授業にもどって有希を一人おいていくなんて出来ないわよ！」

まあ団長らしくと言っていいのか、そんな配慮を見せた。

長門はしばらく沈黙し、ゆっくりと述べた。

「一回の授業に参加しなくとも、人生においてさしたる影響は無い」
どこかで聞いた台詞だが、古泉風に言えば至言ってやつだろうな。

第五章<6

教室に帰る算段としては、俺が先に帰って、その後ハルヒが戻るといふ手はずになった。というかそうした。

「まあ一緒にサボってたなんて印象をもたれてもなんか嫌だしね。それでいいわよ」

などとハルヒは言っていた。俺だつてごめんだ。

でも俺は教室には帰っていない。当然だが今現在教室には九時間前の俺が存在しており、今帰ったら非常にまずい事態になるのは確実だからな。

俺は部室を出てすぐ、校舎へ向かう方向とは逆の、初めてこの時間に遡行したとき朝比奈さんと隠れた場所に戻った。直後にハルヒは部室から出て、後者のほうへ向かったのだが、顔が若干緊張していたように見えたのは錯覚かもしれない。

まあその珍しい顔を拝んだ後、俺はすぐに部室の扉を開けた。中には清々しいまでに達成感をあらわにしている朝比奈さんいつもと変らない長門がいた。

「あ、キヨン君！　ありがとうございます。これで涼宮さんも喜んでくれますよね？」

「まあハルヒが喜ぶかは断言できませんが、さらに体育祭にやる気を出してしまうのはたしかでしょうね」

でもまだ終わりじゃないですよ、朝比奈さん。

「なあ長門、さっきの提案って生徒別の運動メニューを作るってことなんだろ？　実際可能なのか？　大変なら手伝うが」

「問題無い。情報収集は可能」

そうかい。よく考えれば長門が苦手なことなんて探す方が大変かもな。喋るのが苦手なのはあるが。でもこれで俺が九時間前に体験していない部分の補完は終わりみたいだな。あとは九時間前に体験したことを再現すればいいだけだ。

「朝比奈さん」

「はいなんでしょう」

「実は俺、九時間前にここで朝比奈さんと話してるんですよ。家に帰って言われました。そんな事をするよう指示とか受けていたりします？」

朝比奈さんは少し困ったような感じで、

「いえ、遡行する前にも言いましたけど今回は完全にあたし独自の行動ですから、特に支持を受けてないです。でもキヨン君、あたしに会ったって本当？ もしそうならキヨン君の体験通りに行動しないといけないことになります」

神妙さをブレンドしたようにおっしゃった。やはりか。

「じゃあ今から俺が言うとおりに行動してください。それから長門、俺とお前だけ姿を消したりなんか出来ないか？」

「それは可能」

ならば俺と長門はこの部屋で姿を消し、朝比奈さんには九時間前の俺を帰宅するよう促してもらえばいいのだ。だが時間がない。もう間も無くハルヒに『お願い』された俺がここを訪れるはずだ。

俺は手早く朝比奈さんに大体の状況を説明し、会話のやり取りについて説明した。内容自体は簡単だったがな。考えてみれば禁則事項ばかりで、ほとんど情報を得られなかった俺が今ここにいます。わけ、つまりは九時間前の俺に質問されたことを素直に答えてくださいと言っただけである。

間も無く俺と長門は姿を消し、朝比奈さんがパイプ椅子に着席して、九時間前の俺が部屋の扉を開けた。困惑した俺と、うまく情報を伝えられない朝比奈さんとがやり取りを行い、数々の疑問を感じつつも、九時間前の俺は岐路に着くこととなった。それにしてもまさか朝比奈さんだけが部屋にいたと思っていたら、九時間後の俺と長門までいたなんてな。思えば朝比奈さんの目が泳いでいた気もするし、実際よくこちらに視線を送ってくる。だがこんな経験をしちまうと誰もいない空間に不安を覚えるようになりそうで怖い。

朝比奈さんが最後の台詞を言い終わり。扉が閉まってからあたりを見回す。

「長門さん、キョン君、どこにいるんですか？ これでよかったんでしょうか」

そっぴや朝比奈さんにも見えていないんだな。

「長門、もういいぞ」

「不可視フィールドを解除する」

朝比奈さんは突然現れた幽霊でも見たかのように一瞬驚きをみせ、安堵していた。

「これで終わりか」

俺は思わず声に出してそう言った。だってそうだろう。俺が九時間前に体験した事はたった今終わったのだ。これから起こることについてや、行なわれる行動については一切の情報も持つてはいないのだから。

俺と、恐らく朝比奈さんも感慨に似た感覚に囚われている中、長門だけはまだ終わりではない事を知っているかのように、普段ハルヒが占拠しているパソコンの前に移動した。

「長門、パソコンを使うのか？」

一体何を始める気なのだろう。

「情報収集。個別練習手順の表を作成する」

意外なことにパソコンを使うのだなと思った。目の前に資料が現れて、それで完成。みたいな感じなのだろうと勝手に思っていたかな。

「何か手伝うことはあるか？」

答えは分かっていたが一応聞いてみた。長門はディスプレイから視線を外し、俺に向ける。

「大丈夫。問題は無い」

だろうな。第一俺に手伝うほどの情報収集能力は無い。だが長門は俺を見つめたまま作業を停止していた。長門にこうも長く見つめられても落ち着かない。

「長門？」

長門はしばらく間を置いてから言った。

「あなたにはまだやるべき事がある」

やるべき事がある。その言葉は妙に神妙で、まるでこれからが本番だと言わんばかりの感じであった。果たして何のことを言っているのかと、俺は脳内をもう一度精査してみたが、まったく分からん。「俺がやるべきことは？」

俺の勘違いなのか長門の本心なのかは理解の及ぶところではないが、どうにも長門は不満なように見えてならなかった。こうなると俺は焦る。真剣にわからんのだ。

長門はあきれたように、いや普通に坦々とした口調で言う。

「……あなたは教室に行つて彼女を助けるべき」

何をだ。なんて言えそうな感じではない。長門は答えを言ったという感じである。実際はまだ良くわからない状況は続いており、俺としてはどうしようもないとしか表現できないのだった。そこに朝比奈さんがなるほどと取れる感じに目を大きくしてみせ、少し悲しそうな感じに眉を下げた。

「そうですね。涼宮さんきつと不安だと思います。一人で普段ならやらない事をしようとしている訳だし、こんなときは自分のことを一番理解してくれている人が近くにいと心強いです」

朝比奈さんは、悲しそうな瞳を俺に向け、外す。でもその意見で何となく言いたいことが理解できたような気がした。

それにしても女性同士の連帯感は一切何なのだろうね。長門の微妙に説明不足な話をすぐに理解したり、ハルヒの思いとか願いだとかを簡単に汲んだりする。朝比奈さんの悩みなんかがすぐ解決に向かったりする。それは男には全く無い資質で、宇宙人とか未来人の壁なんて海中でオブラートを壁に使用する並みに脆くて無意味でしかないのだろうな。実際、男の俺はやるべきことが分かつて、何を助ければいいのかさっぱり分からない。それでも俺は、

「分かった。六時間目が終わり次第、教室に戻つてハルヒと合流す

ればいいだろ？」

こんなことを言ってみたりするしかなかった。古泉でもいれば気兼ねなく聞けるし、多少の煩わしさはあっても答えを教えてくれるだろう。でもここで同じようなことを聞こうとすれば、宇宙人と未来人から怒涛の攻撃をくらうに違いない。現代科学の全てを終結させて抗論しようとも一瞬で灰燼に帰すだろう。聞けるわけがない。

だから俺は六時間目が終わるまでの間、ずっと考え込んでいたのである。どうすれば一番良いのかと。

その間、長門はパソコンを凄まじいスピードで稼働させ続け、朝比奈さんはなぜかリレーに使うバトンやハチマキの手入れなんかをしていた。

色々考えてみた。ただお願いするだけで本当にいいのか、ハルヒの横に立って状況を見守るべきなのか、ハルヒに変わって俺が前面に出るのか、どれも違うように思えて仕方がなかった。

考え事していると時間は早く過ぎるもので、気が付くと間もなく六時間目が終わりを告げる前になっていた。長門がそれに合わせたかのようなタイミングで、

「資料の作成が終了した」

と言ってパソコンの前から立ち上がり俺の前に来る。

「使って」

連動するように朝比奈さんも俺の前に来てリレー道具一式を入れた袋を手渡す。

「頑張ってください。あたしたちが手伝えるのはここまでだから…」

…」

なんだか出兵する気分させられる状況である。

「じゃあ、ちよっくら行つて来ます」

俺は強がることしか出来ず。後ろ髪を引っ張られるような状態で部室を後にする事となった。部室塔を出て、階段を上がり、教室の前まで来る。同時に六時間目の終了を告げるチャイムが廊下に鳴り響き、授業を受け持った教師が教室を最初に出てくる。何か嫌な視

線で見られたような気もしたが、どうでもよかった。俺は入れ替わりで教室内に入った。

いつもの席を見る。迷うわけではない。一向に変化の見られない窓側の後ろ、二番目が空席になっており、その後ろで座っている奴を見た。向こうも気が付き、俺は軽く頷いて合図した。やるしかないよな、ハルヒ。

第六章

「なるほど、ようやく完全に理解することが出来ました」

何かなるほど、だ。そもそも何が悲しくて昼休みに古泉なんぞと部室で昼食をとらねばなんのだ。

「ですが長門さん。実際遡行した人間が同じ場所に居らなくてもいいのでしょうか？」

「問題ない。同時刻に存在していた対象が別次元に遡行した場合、その瞬間に異時間同位体が存在していれば、その次元に対象が完全消滅する問題は起きない」

まったく、昨日の今はひたすら校内を走り回って、その上いらん策略やら九時間前の俺の存在に翻弄されたりしていたのに、たった一日で随分と状況と言うのは変わるものである。昨日のクラス総出の練習を終えて疲れきったオーラを出し、これも総出で居眠りにふけり続けた本日の午前中を過ごし、一人事情を知らない古泉にまあ説明のひとつでもしてやろうなどと殊勝なことを考えてしまったのがそもその間違いである。誰にも聞かれぬ場所として部室を選び、偶然か必然かは定かではないにしろ長門がいつもと同じように読書をしていたのが唯一の幸いか。ついでに言うとハルヒは相変わらずどこにいるかわからんし、朝比奈さんはきつと鶴屋さんと昼食だろう。

ちなみに古泉が質問をし、長門が答えた内容については、昨日おれ自身が体験したことなのだが、要は遡行した状態からどうやって帰ってきたのかってことで、結論は簡単である。自転車で帰ってきたんだからな。

分かり易く言うと、以前三年前の七夕に遡行した際に長門が行なった方法とほとんど同じである。違う点は長期間寝て過ごしたりせず、ただリレーの練習をして時間を使っただけにすぎない。まあ遡行といっても九時間だし、つまりは遡行先で九時間経てば元の時間にも

どるってことだろう。

古泉は相変わらぬの舞台役者みたいな大げさなしぐさでさっきから喋りっぱなしだ。

「それにしても皆さんが先の時間の世界、つまりは未来から来ていたとは全く気が付きませんでした。言うなれば未来人だったわけですから、僕は貴重な体験をしたといえるかもしれませんね。ただできれば僕も皆さんと一緒に過去の問題を解決する為に時を越えるというSF的な体験を試してみたかったと思います」

その喋りにオウムのような感じで長門が答えている。

「あなたが遡行せずにいたのは理由がある。朝比奈みくるは遡行するの必要であり、彼は涼宮ハルヒに行動を起こさせるのに必要だった。あなたの場合、陸上競技場の確保をしてもらわなければならなかった。異時間同位体では不都合」

「なるほど」

まあ古泉の気持ちは分からんでもない。そりゃタイムトラベルする機会をもし得られるとしてだな、それを逸するとなると忸怩たる思いになるだろう。以前の俺ならな。実際何度も過去に遡行して問題に巻き込まれてる現在の俺からすると、単なる懸案事項の一つでしかないわけで、出来ることなら当分関わりあいたくはない。当分まあ長門が言った経緯もあって今に至ったわけだが、実際はもう少し大変だった。ハルヒのいる教室に行った後、クラスの連中を必死に誘って、部活のない連中とだけ先に競技場へ赴き、運動部や文化部の活動がある奴は後から合流となった。でもそこで問題が発生してだな、部活に出ていた連中に競技場の場所を教えていなかったのだ。長門がいなければどうなったことやら。ここで感謝の言葉でも送っておいて間違いはあるまい。

「長門、昨日は助かったよ。正直どうすればいいのかさっぱりだったからな。それにしてもよく別のクラスなのに全員に携帯でメールなんか送れたな。俺だって半分もアドレスなんか知らないぞ」

長門はどうしたことか言葉をかみ締めるかのように間を置いた。

「簡単。得意分野」

少しか言葉通りに得意げに見えなくもなかった。実際得意げになったって誰も文句は言うまい。かなり助けられたのだから当然だろう。そういう意味では、事情を知らずして全面協力をしていた古泉も人がいいのかもな。ハルヒに関わることではあるが、どちらかといえばクラスの問題だったのだから積極的に動く義理もなかったろうに。

「僕としてはあなたのクラスの活躍をアシストする形になりましたしね。ですが、少し負けたくはないという気持ちも芽生えてきたんですよ。今度、涼宮さんやあなたに習ってクラスで一つ決起でもしてみようかと考えているくらいです。その時は手伝いをお願いしたいですね」

まあ練習場の引率くらいならしなくもないが、ハルヒは敵に塩を送るような真似はせんだろうな。勝負には厳しい奴だ。昨日だって皆が集まるか分からない間は妙に落ち着かない感じだったし、それでいて静かになっていたりした。でも皆があつまって練習が始まるや否やサッカーナショナルチームの監督みたいな指揮の仕方では皆を動かしていた。

「そこ、無駄話が多い！ あたしたちは勝つ為に練習してんのよ、自覚を持って練習に励みなさいっ！」

笛を鳴らしながら怒鳴っていたハルヒに、谷口や国木田なんかも吞まれていた。

「わかってるよ！ それにしてもどうしたんだよ涼宮のやつ。担任の生霊にでも取り付かれたんじゃないやねえだろうな」

「まあいいじゃない、たまにはこういうのも。学生って感じがするよ」

てな具合であつた。クラスメイトもタジタジになるのはしょうがないだろう。まんざらでもないって状況であつたのは意外だったが、それだけに思うこともって、古泉に話をふってみた。

「だがあれだな、これでSOS団の練習量も少しは減るんじゃない

のか？ クラスとの掛け持ちは正直ハルヒでも厳しいだろう」

俺の質問に対し、古泉は嘘らしくまじめな顔になり、

「涼宮さんならやりかねませんよ。あなたはもうお分かりだと思いますが、涼宮さんにとって絶対なんてことはありません。それにSOS団をないがしろにするとも思えません。もう長らく所属していますが、これには絶対の自信があります。そういう意味では絶対がないという考えも間違いになりますかね。二つに世界を分けるなんてことも考えられます」

言い終えて冗談のようにいつもの笑顔に戻る。

二つの世界などかんべん願いたい。SOS団をないがしろにはしないという考えは確かに絶対かもしれんがな。SOS団はそんな所までできてしまっている。

昼休みにハルヒがいないにも関わらず、団員が三人も集まってたわいもない話をしているんだからな。ハルヒだってSOS団の練習量を減らすことはしないだろう。SOS団が負けることなどこれっぽっちも考えてはいないはずだ。

だからこそ俺はここにいる二人の団員に言った。

「体育祭だがな、変に気を使うのはよそう。これだけ練習したし、これからの期間もどうせ練習は続くんだ。だったら実力で練習の成果を見せてもいいだろう」

古泉の顔が少し驚きを表現するように変る。俺だって驚きだ。一体なにを言っているんだろうね。

「いいのですか？ 野球大会の二の舞になるかもしれませんよ……と、言いたいところですが、少し心変わりがありました。普通に体育祭に参加するのもいいかもしれませんね。涼宮さんもただ勝ちたいという考えから、全力で参加したいという思いにシフトチェンジしているように思えてきています。これが事実なら、僕は賛成に一票を投じても憚りはありません」

俺はただ頷き、長門に視線を向けた。長門も今は読書を中止して俺たちの話を聞いてくれていた。

「わたしは構わない」

坦々と、だが力強くも聞こえる声で長門が答える。俺は長門にもただ頷いて返し、生徒の声が聞こえる窓に目を向けた。

なんだかんだでもうすぐ体育祭である。日差しは相変わらず灼熱の砂漠地帯のように暑苦しいが、窓から入る風は確実に夏を終わらせ、秋を運ぶ冷たさが感じられた。

昼休みも終わって、残りの授業を消化するまでの間については、まあ何かしら学びがあったのだろうが、今は正直どうでもいい。六時間目の就業を告げるチャイムが鳴り、そつなくホームルームも終了する。俺の後ろに座るハルヒがなにやら運動部の連中に次の予定を聞かれているあたり、昨日の練習は確実に意味があったのだと思わせるに充分であつた。ハルヒも戸惑いながら対応をしている。

クラスを出てから本来なら部室に行くのだが今日は違って、向かう先は昨日の競技場なのだ。気を利かせたのかは定かではないが、どうも古泉が体育祭までの間、練習場を押さえたらしい。

「キョン！ 今日とは昨日とは違うわよ。無差別に選別されるクラスとは違って、SOS団は精鋭の集合した団なんだから練習からして違うのよ。そうね、三倍くらいは動いてもらわないと駄目ね」

などと弾け飛びそんな笑顔でハルヒは隣で豪語している。この顔を見ると昨日と比べてクラスとはまだ思い入れの差があるのだろうか。天秤の受け皿が片方机についてしまつかつかないかの差だろうか。

「馬鹿を言え、昨日の今日で俺は疲れきってるんだ。せめて一、五倍くらいにしておけ」

などとさりげなく交渉を持ち込みつつ却下され、長門のいる教室へ向かい、古泉と靴箱で合流し、校門前で朝比奈さんを連れて学校

を出た。

道中は普段の下校風景と変わらず、朝比奈さんにハルヒが色々ちよっかいを出す等の慣れた感じであった。違うのは向かう先が競技場だということくらいか。

それから俺たちは競技場に向かい、着いてから各々運動しやすい格好に着替えた。まあただの学校指定ジャージである。

競技場は相変わらずSOS団専用になっていて、外でジャージに着替えても問題は無いのではないかと思えるほどである。朝比奈さんに提案してみたくさえあるな。ハルヒに殺されるだろうが。

変な考えが頭を巡りながらも、俺はジャージ姿で準備運動をし、一連の流れでジョギングを終わらし、ハルヒの指示を待った。

「今日は最初から走りましょう。もう最後の追い込みに入るべきよ」同時に俺たちは決められた走者順に定位置に着く。古泉はスタートから順調に快走し、朝比奈さんは遅くも必死にレーンを進む。まあ順当な光景ではある。意外なのは長門だ。

俺は朝比奈さんが長門にバトンを渡した瞬間にバトンを受け取る準備をした。何せ長門だからな。冗談のようできて真剣そのものだった。だってそうだろう。てっきり瞬間移動のように目の前へ現れるか、二足歩行のチーターみたいに違和感ありありの光景を見せられると思うのが普通だろ。でも長門は普通じゃなく走っていた。言うなれば見た目どおり。まるで勉強は得意だが運動が苦手な文芸部員の女子みたいな走りだった。朝比奈さんよりは確実に速いが、驚くほど普通の速さである。

俺は長門からバトンを受け取りながら、ハルヒが怒り出すんじゃないかとさえ思った。それだけに全力でハルヒの元へ走るしかない状況へなった訳だが、ハルヒの元まで行ってみると別段代わりなど無かった。まあ足に自信があるからなのかもしれないが。実際バカみたいに速い。俺からバトンを渡されたハルヒは、靴にブースターでも取り付けているのではないかと思わせるほどのスピードで加速し、まさにあっという間にゴールまでの間を疾走した。

「中々ね。みくるちゃんも大分よくなつたし、バトンの受け渡しもみんなスムーズだったわ。これなら何とかなるか」

とまで言うくらいである。ハルヒにとって長門がどういう風に見えるのかが今一わからん。本番に強いとでも認識しているのだろうか。

「でも、そうね、もう一回走ってみましよう。改善の余地が見えてきたわっ！ このまま昇華していったらいい結果を出せる。うっん、優勝ができるにちがいないわよ！」

実に楽しそうな、自信に満ち溢れた表情でハルヒは言った。ハルヒが満足そうなんだからまあいいだろう。長門も宇宙的力を抑えて走ってくれているのだ。あとはハルヒの言う通り練習あるのみでいい。

ふと気が付くと、俺もハルヒに毒されてきているようである。なんだかんだといつても体育祭が楽しみになってきているんだから事は深刻である。

それから数日間。クラスの練習を放課後にすると、次の日がSOS団の練習。一日休みを置いてまたクラス。という流れをずっと繰り返した。超低空飛行だった我がクラスも、なんとかジェット気流に乗れそうな所までは上昇してゆき、SOS団はそろそろ太陽系圏を突破しそうな勢いで日々時間を浪費していった。

そしてあくる日の秋、皆々がどんな思いを持って挑んでいるのかは定かではないにしろ、何となくもテンションが上がって優勝の一文を手にするべく、体操着姿にハチマキを付けて、安い作りで豪華そうに装飾された入場門の前に立った。

体育祭の開催である。

第六章<2

「こらー、根性見せて走れって言ったでしょう！ 何してんのよ抜き返しなさい！ ちよつと！ ああもうっ！」

程よい程度に雲が散見できる秋晴れと言って差し支えない午後の空に、忙しないハルヒの怒号が絶えず響き続けている。まるで夏をわすれて土から出てきてしまった蟬のようだ。

体育祭に別段の感情など無くなって久しい俺ではあるが、今回に限っては若干の心積もりもあつてか、ハルヒの馬鹿でかい声も違和感にはならなかった。まあ始まってすぐの行進から、選手宣誓に至るまでの行程と、校長の挨拶では、忙しなさも包み込むほどの緊張なのか倦怠感なのかは定かではないが、その時間はハルヒも静かにしていた。

だがどうだろう。競技が始まるや否や、叱咤激励の後半部分をなくしたような勇ましさを見せていた。まあ無理もないか。ハルヒはほぼ全ての競技に対して、新学期初日に参加の意志を示していたわけで、つまりは休むことなく叫び続けることになるのだ。なぜか俺まで全て参加になっているから、心休まる時間と言うものがない。肉体も同じだ。

「キョン、ぼーっとしてないで応援しなさいよ！ この声が最後の一步を後押しするのよ！」

わかつている。本来の俺ならば、何が楽しくてグラウンドに向けて声を張り上げねばなんのかと、疑問の一つでも説いてやるところだが、今のところ声を出さない奴の方が少数派に数えられてしまっいそうなくらい、クラスの連中までハルヒに負けじと叫びまくっていた。ここで叫ばんわけにもいかんだろう。理由もある。現在うちの組は総合得点で二位につけているのだ。一位は古泉のクラスである九組であり、これが結構な点差になっている。現在進行形で行なわれている百メートル走になるべく多く勝っておかないと、最後の

クラス対抗リレーでの劇的逆転が叶わないという裏事情が、妙にうちのクラスを熱くしているのだ。

なぜ今こんな状態かというとな、実は結構な理由があるのだ。SOS団の存亡に関わる理由が。原因は副団長の謀反である。話は午前中、クラブ対抗リレー後のことだ。

まだまだ太陽が準備運動を開始したばかりのような、眩しくも涼しい天候に中、普段なら眠気まなこで授業を受けている時間に、体を全力で動かすのは正直しんどい。それでも俺は全力で走った。ピンポンをスプーンに乗つけて走ると言う、なんとも間抜けな格好だな。ダリが見たらインスピレーションの一つにでもなるかもしれないが、正直見ても参加しても楽しい競技ではない。なぜこんな競技を最初の競技にするのか大いに疑問だね。でも意外なことに順位は一位なのだからハルヒの練習は正解といえた。

俺はゴールしてすぐに一と記された旗の元に行き、座った。前には堂々とした態度と笑みを浮かべたハルヒが胡坐をかいている。

「まあまあね。でもスプーンを逆手にもって走る作戦は大成成功じゃない？ やっぱり事前に練習を積んだことは生きてるわ。この調子で全競技で勝利するのよ！」

たしかに練習は生きた。だがその逆手作戦を考えた国木田に賛辞の言葉くらいはかけてやれ。

ハルヒはなんとも言いがたいガマ口顔で俺を睨んできた。

タイミングよく俺の次に走った国木田が近づいて、

「いやーけっこう、うまくいったね。これは足が早いとかが生きる競技じゃないから、考え方しだいで僕みたいに運動とかが苦手でも

一位になれたよ」

「まあ……よくやった方よね」

なんて会話を聞いて思わず笑みを浮かべてみる。

体育祭は順調そのものだった。陸上系の競技は結局、運動神経の良し悪しで決まるものだが、実は陸上系以外の競技も多いんだよね。それを逆手にとってしまおうってのが俺たちの作戦である。ムカデ競争やパン食い競争なんかはその代表競技だな。これらの競技は割りりと午前中に集中しており、我がクラスは絶えず好成績を収めることに成功した。前記した競技の、ハルヒがその他メンバーを引きずるようにダントツの一位でゴールしたムカデ競争や、これもハルヒが自分のパンにかぶりついたあと、それ以外もかぶりついて圧巻の一位になったパン食い競争は、凄まじいの一言で片付けるには憚れるばかりである。

ちなみに一つ学年が上の朝比奈さんは競技を争うことが無いので、関わりは薄いのだが、なんとなく目で追ってみると、必死に走ってはコケを繰り返すお姿が拝見できた。見るたび同じ光景であるところからして、さすがの一言である。

長門に関しては無難の一言だろうか。見る限り全競技三位な感じで走っている。これが普通ではあるのであるが、SOS団のメンバーからすれば違和感以外の何者でもない。普段の長門がこの状態を見せたら、まず真っ先に地球最後の日を覚悟するくらいである。

ちよつとした話だが、借り物競争の最中に俺のところへ長門が来て、

「一緒に来て」

と、言われたのには意表を突かれた。

一体何を借りに来たのかと思って手にした封筒の中身を覗いてみると、

【不思議な人】

などと書かれている。あの、長門さん？ SOS団で唯一の普通人である俺を不思議な人にカテゴライズする気ですか。

「……………」

しかし長門は全てを知り尽くす千里眼のような眼差しで俺を注視し続けた。まあ分からんでもないがな。実際ならハルヒと言う不思議な人を超越した存在がいるわけで、全会一致で当選間違いなしだろう。だがハルヒ自身に自覚がないのが問題なわけで、つまりはハルヒを連れて行くわけにはいかんということだ。でもな、俺を連れて行っても借り物が正しいか審査をする人間に認められるとも思えん。

そう考えながら俺は長門の伸ばした腕を掴んだ。しかたないだろ。「ちょ、ちよつとキョン！　いくら有希だからって敵に加担するのはダメよっ！」

なんてハルヒが後ろでばやいていたりもした。

結果、見事に一番で長門と共にゴールのテープを切ったわけだが、実に傷ついたね。審査では、俺と長門を見るなり微笑を浮かべた審査員が一発OKを出しやがった。どうも一般での常識と、俺の常識はズレが生じているらしい。SOS団なる団体に所属しているがためのさだめか、俺も十分不思議人にカテゴライズされるらしい。

さらに俺が不思議と言う概念を自身に反映させざる終えない事もあってだな、長門以外に三回も借り物競争でゴールのテープを切った事実がある。

原因の一人は、

「すみません。友人と称すに値するか自信はありませんが、よろしければ一緒にゴールまで足を運んでいただけますか」

などと言ってきた。ハルヒは憮然としてたな。

次の人物とは、

「あの、その、年下の知り合いってあまりいないから……………」

と、ダントツのビリでゴールまで行く羽目になり、最後は俺のクラスでのことだ。

「キョン！ 時間がないわ、さつさとゴールまで来なさいっ！」

ハルヒまでもが俺を連れまわそうとのたまった。さすがにもういいだろと訝しげにハルヒに聞いた。

「いったいなんて書いてあるんだ？」

ハルヒはびっくり箱を開けた子供みたいに驚きの表情を浮かべた。なぜ？

「う、うるさいわね！ いいから付いてくればいいの！ 早く行かないと一位を取られちゃうでしょバカキョン！」

まあもつともだ。俺はハルヒに半ば無理やりゴールまで引きづられる形でいくはめになってだな、しまいには審査のときに、

「あー納得ですね、どうぞゴールまでいってください」

などと言われた。一体何が書かれていたのかは、ハルヒが断固として拒否をしたので結局分からず、きつと墓の下までもっていかれてしまうのだろう。

ちなみに俺の出番では、

【個性的な人】

と、書かれた封筒が回ってきた。この封筒は人ばかりなのかと思いつつ、しめしめと思ったもんだ。なんてったって個性的な知り合いに関しては誰にも負けない人脈があると自負できるからな。散々振り回されたお返しをしてやろうと思いつくのに一遍の迷いもな……いや、こんな話はどうでもいいな。誰を連れまわそうがたいした話じゃあるまい。

重要なのはこれらバラエティに富んだ競技群をつつがなく終了させ、午前最後の部としてプログラムに記載されている競技、一ヶ月前から鍛錬に鍛錬を重ねた集大成を見せる場、クラブ対抗リレーへの参加チームを入場門前に集合させようとアナウンスが鳴り響き、それぞれのクラスに散らばったSOS団団員が集まった所からだろう。古泉が謀反を起こしたのはこの競技を終わらせた後だったから

な。

第六章<3

入場門前には野球部やサッカー部のような運動部の連中と共に、書道部やミス研などの文化部のやつらが、各々のユニホームや道着を着て集まっていた。なんとも奇天烈な様相である。そんな中俺たちと言えば、普通なジャージ姿であるからして、逆に目立つという逆転現象が起こっていた。変った点といえばハチマキくらいである。「ふふん。作戦通りね。そもそも走るのに道着だとか、違うスポーツのスパイクだとかが合うわけがないじゃない。どうしてそんなことにも気が付かないのかしらね、あの連中」

「たしかに、これならば我々にも充分勝機がありそうですね。さすがは涼宮さんです」

へんに納得するな古泉。そりやお前クラブ対抗リレーだからだろうよ。普通は各特長を活かした様相を呈すものなんだから、むしろ俺らの方が大分イレギュラーに違いない。

だがハルヒはそんなことお構いなした。腕を振り回したり、屈伸をしたりで、やる気充分な姿勢を全面に打ち出していた。相対して朝比奈さんは緊張がピークのように、完全に場の空気に吞まれている。ああ長門に関してはいたって普通であり、妙なやる気や倦怠感とは皆無であるから、頼もしい限りだ。古泉は相変わらず優雅な貴族の微笑を浮かべている。なにがそんなに楽しいのかね。

なんてSOS団の様子を遠巻きから観察しているよな体を見繕ってはいるが、俺は俺なりに緊張していたりする。さすがに一ヶ月間という時間をかけてここまで来たんだからな。そりや俺だって勝ちたくもなるさ。

団員がそれぞれどんな心持で今いるのかは分からない。だが目指す先は一緒である。これって実は意外と少なかったりする。普段はハルヒを除くメンバーでの意思統一がほとんどだからな。でも今回はハルヒだっていっしょだ。

「みんな円陣を組んで頂戴」
言われるがまま円陣を組む。

「いいこと、この一ヶ月間あたしたちは血の滲むような訓練に耐えてきたわ。これは絶対に生きる。負けるわけが無いの。ところで……みくるちゃん」

「え、は、はいなんですよう」

突然話を振られた朝比奈さんはだいぶ慄き驚いていた。何を言う気だハルヒ。

「みくるちゃんは勝ちたい？」

円陣内に沈黙が流れる。誰もがこの質問の主旨を推理していたに違いない。分かるわけないがな。それでも朝比奈さんは言った。

「か、かか勝ちたいですっ！」

ハルヒはまるで関が原に赴く徳川のように勝気に笑っていた。見たことは無いけどな。そんな笑みだ。そしてとんでもないことを言いやがった。

「そう。じゃありレーの順番を一部変更するわ。スタートはみくるちゃんよ。第二走者が有希。第三走者は古泉君が走って。で、次がキヨン。アンカーはあたしが責任もって走るわ！」

この瞬間朝比奈さんは……言うまでもないよな。もう少しで泡でも吹き出しそうな顔で口をぽかんとあけており、

「だ、だめです、ムリです、負けちゃいますよぉー」

少し間を置いてから、泣き入るような声で反対声明を打ち出した。ハルヒが聞くわけ無いのは言うまでもない。

「大丈夫よみくるちゃん。あたしは頑張った人にはちゃんと活躍の場を用意するの。で、今回一番がんばってたのはみくるちゃんじゃない。あたしが保証するんだから黙って最後までがんばりなさいっ！」

「でも、でも……」

決定は覆らないことを朝比奈さんも知っているだろうが、それでも喰らいつくのは本当に勝ちたいという思いからなのだろうか。

「いい？　みくるちゃん。誰も一番になれとは言ってないのよ？

がんばればそれでいいの。後のことなんて他の団員に任せちゃえばいいんだから。みんなで何とでもなるわ。それにアンカーのあたしが絶対に一番になってみせるから、安心して走っちゃいなさい」

ハルヒは他の団員一人ひとりに視線を向ける。古泉は屈託なしに微笑んで答え、長門は珍しく深めに頷いた。

この一ヶ月で一番の驚きである。ハルヒが一番じゃなく、がんばればそれでいいなどと発言するとはな。でもたしかに朝比奈さんはがんばった。そこは一遍も疑いの余地はない。だれにも文句は言わせん。俺はハルヒの視線に対して強く視線を送り返した。

「じゃあスタートよ、ゴールで合いましょう。次ぎ合う時は最高の笑顔に、そして最高の瞬間でね！」

こうして俺たちSOS団はその他の部と共に入場門から各持ち場へと散らばっていった。

ぶっちゃけ相当緊張したね。こんなにマジで走るのは始めてかもしれん。そのせいか、絶えず各団員の方へ視線を向けてしまっていた。長門も古泉も至って平常心をキープしているように見えたね。

ハルヒは笑みを浮かべて仁王立ちだ。でも朝比奈さんはさすがに顔が青い。待機もスタートだからいきなりスタートラインに横一列である。俺だってあの立場なら顔の一つでも青くするさ。それでも朝比奈さんには頑張っしてほしいと思った。

全ての走者の準備が終わり、いよいよスタートの火蓋が切られようとしている。スターターが台の上に立ち、ピストルを天高く突き上げる。第一走者は腰を低く構え、そして、太陽が丁度空のど真ん中まで来たのを知らせるかのように、緊張した頬を打つような音がグラウンド内に響き渡った。

同時に、走者たちが飛び出してゆく。やはり体育系の連中は速く、背中にエースナンバーをつけた奴や、場違いにキャップを被った奴が頭一つぬきんでていた。まあスタートは足の速い奴が走るのは当然ではあるがな。

それでも俺は驚いた。正直その人以外にはあまり視線を向けてさえいなかったが、朝比奈さんはちゃんと走っていたのだ。もちろん遅いことに変わりはないが、この一ヶ月間見ていた身としては大きな変化である。早い奴はどんどん先へ進んでいくし、やつぱりビリではあった。でもダントツじゃない。これなら何せアンカーはあのハルヒだし、いけると言う考えが脳内を走りさえした。

だが、やはりと言うにはあまりに可哀想で、あまりに悔しい現実が起こってしまった。朝比奈さんはグラウンドの砂に足を取られたのかバランスを崩し、前のめりに地面へ転がり跳んでしまったのだ。普段なら。普段の俺ならば確実に朝比奈さんの下へ駆け寄り手を差し伸べたことだろう。リレー？ 勝利？ どうでもいいねそんな事。だが今回ばかりは違った。何としても勝ちたいという思いがあるし、なにより朝比奈さんに勝たせてあげたかった。それには俺がじゃじゃ馬に出て行って、失格になるわけにはいかないのだ。バトンをもらってからしか走ることが出来ないのである。自然と声が出た。

「朝比奈さん、がんばるんだっ！」

「みくるちゃん、立って走るのっ！」

同時にハルヒがバカみたいな大声で叫んでいた。古泉には笑顔が一切無く、長門は強く朝比奈さんを見守っている。

ところがどうだろう。朝比奈さんには一切声が届いていない様子である。でも痛くて悶絶しているとか、泣き声で聞こえていないとかじゃない。

朝比奈さんは転んだと同時に、すぐに起き上がり、まるでバレーボールを必死にレシーブしていく選手のように、落ちて転がるバトンを拾い、そして走っていた。

次々と第一走者が第二走者へバトンを渡していく中、最後の最後で長門が一人待っている。朝比奈さんは何事も無かったように最後まで走りきり、長門へバトンを渡した。何か長門が朝比奈さんに言ったように見えたが、いかんせん遠く、声までは聞こえない。見え

るだけである。朝比奈さんは走り終わると同時に、その場へ崩れ落ちて顔を両手で覆ってしまった。

思えば最初、ハルヒがクラブ対抗リレーに参加すると言ったとき、俺は非日常的な力は使いたくないと思った。これは嘘じゃあない。実際競技の真っ只中でもそう思う。でも人間ってのは思っている事と行動は違うことが多い。ハルヒを見て学んだことでもあるな。だから俺は叫んだ。

「長門！ がんばってくれ！」

聞こえないわけが無い。なんたって長門だ。最初は本当にロボットみたいな奴だったが、少しずつ感情みたいなものが感じられる気がしたし、実際今、長門は答えてくれた。

俺へ一瞬だけ視線をくれ、前を向いたかと思うと、凄まじい勢いで加速した。ダントツの最後尾だった長門は、次々と前を走る選手を追い抜いていく。後続の文化部の一団を颯爽とかわし、一位争いに熾烈な運動部の連中の一団まで追いついた。その瞬間だけ見れば、まるで宇宙空間をワープした船のようであった。

あとで長門にあやまらないといけないな。わざわざ体育祭で力を抑えて走ってくれていたのに、今回は、というか今回も助けてもらってばかりだ。

長門は見事に一位争いの中で古泉へとバトンを渡した。古泉は笑顔で答えている。

いよいよリレーも終盤である。あとはいかに俺と古泉が引き離されることなくハルヒにバトンを繋ぐかだけだ。でもこれが難しい。確かに古泉は足だって中々のものだが、周りはいつも走って鍛えている運動部の連中なのだ。離されないのがやっとである。抜きつ抜かれつを繰り返し、古泉は必死に走ってくる。ここまで必死な古泉を見るのは正直始めてかもな。

俺は緊張しながら後ろに右手を差し出して準備した。徐々に一団が近づいてきて、ほぼ横一線でバトンタッチとなった。俺は走りながら古泉からバトンを受け取った。後ろを振り向く余裕は無い。

「あとは頼みましたよ」

と、声だけが聞こえたので、

「なんとかな」

とだけ伝えた。

俺がどんな走りをしたかなんて、つまらない事この上ないだろうし、第一ほとんど覚えていない。それくらい必死に走った。誰かに抜かれたような気もしたし、逆に誰かを抜いた気もする。誰だって経験あるだろう。走ってるときは夢中なのさ。かろうじて覚えているのは徐々にハルヒの力強い笑みが近づいてきて、バトンを渡して、言ったことと聞いたことくらいである。

「勝てよ！」

「当然！」

ハルヒは疾走した。

一位争いの運動部など物ともしないスピードでグングン加速していき、最終コーナーに差し掛かる前にはおおそ決着がついただろうなと、誰しもが確認できる距離は開いていた。

それでもハルヒは一切スピードを落とすことなく全力で走り抜けた。そういえばハルヒが言ってたことを思い出した。

『いいこと、最後まで全力で走らないやつがあたしは一番嫌いなんだからね！ 手なんか抜いたら速攻罰ゲーム！ 速攻よ！』

まあ今回罰ゲームは誰にもなさそうだ。

最終的に、約十三馬身差でゴールテープを切ったのだが、俺はつきり高らかに両腕でも掲げて勝利宣言でもするのかと思っていた。だがハルヒはスピードこそ落としたものの、ゴールテープを切つてすぐターンし、俺のところまで来て、

「キヨン、行くわよ」

それだけ告げてきた。だが理解はできた。がんばればそれでいいって言ってたもんね。俺はハルヒに連なって朝比奈さんのいる第二

走者の出走地点まで向かった。

先に着いていた古泉が朝比奈さんの肩を抱え、なんとか立たせている。隣では長門が朝比奈さんを見つめていた。

「ご、ごめ、ひつ、ごめんな……さい。あ、たしじゃ、やっぱりだめで、しつた」

朝比奈さんは完全に泣き崩れていた。正直何と声をかけていいのかが分からない。だが大丈夫だろう。

ハルヒは朝比奈さんの正面に回り、

「こら、みくるちゃん。次ぎ合うときは最高の笑顔でって言ったじゃない。せつかく最高の勝利を手にしたんだから、泣くところじゃないでしょ」

怒ったような顔で言った。目は怒っちゃいないがな。普段からそうしてくれ。

「で、でもあたしは、や、っやっぱり足を引つ張っちゃって……」

「みくるちゃん、足を引つ張るってのはね、誰かに迷惑をかけた時に使う言葉よ」

ハルヒが俺や古泉、長門を見回す。

「そうですね、僕が記憶喪失にでもなっていないのであれば、誰かに迷惑をかけられたという記憶はありません」

古泉が屈託なく言う。

「まあそういう事だな。普通に走っただけだ。違うか？ 長門」

長門は俺を見て、そして朝比奈さんに視線を送る。

「違う。駄目と思われる事は一つもなかった」

ハルヒはそれらの答えに満足したのか、両腕を腰にやり、

「ほら、あたしの言った通りじゃない。だめだった事なんて一つとしてないわ！ みくるちゃん。あなたが頑張ったから勝ち得た勝利よ！ 笑いなさい！ 民衆をあざ笑うかのように笑いなさい！ 笑え！」

朝比奈さんは一瞬びくつと反応し、そして笑った。目を涙で一杯にしながらの、今までに見たことも無い、惚れ惚れするような笑み

だった。

ハルヒはこれに満足したのか、はたまた納得したのか、何度も頷き、そして腰に当てていた右腕を高らかに天へと突き上げる。人差し指だけを突き出す形で。まるで革命を成し遂げた英雄のようだ。お前はナポレオンか。

「我々、SOS団の完全勝利よっ！」

鼓膜が破けるかと思うくらいの大音量で言い切った。合わせたかのようにグラウンドを囲む生徒たちから割れんばかりの拍手が起った。まあ大波乱ではあるし、まさか数ある運動部を出し抜いて、正体不明な謎の団体が優勝するとは誰も思っまい。思っていたのはただ一人だけだ。その当事者は最高の勝利を得て、朝比奈さんに負けんばかりの、最高の笑顔を浮かべていた。

やれやれ。

第六章<4

忙しくもつつがなくクラブ対抗リレーが終了し、体育祭は唯一のブレイクタイムといえる昼休憩を迎えていた。各々が持参の弁当を持ち出し、生徒は自由に休憩する中、SOS団はいえぱりレー終了と同時にいち早く中庭の草むらを確保すべく移動していた。俺としては実に楽しみな時間である。なんと言っても朝比奈さんのお手製弁当をいただけるのだ。たとえ炭のような出来映えであつても有難く頂戴する心持だ。まあ朝比奈さんに限ってそんなことはあるまい。

早々と中庭に到着してすぐ、どこからか準備したのが古泉の持参していたブルーシートを芝生にひき、そこにみんなで座った。

「とりあえず、おにぎりとおかずを作ってきました。あ、あとサンドイツチもありますよ？ ふふ、どっちがいいか迷ったから二つとも作っちゃいました」

なんて言いながら照れた仕草をする朝比奈さんのなんと愛らしいことか。それだけで充分、食が進むつてもんだ。元気も出たみたいだしな。

「いいわね！ 午後に向けて英気と元気を養えるつてもんだわ。キヨン、手を合わせるときはみくるちゃんに感謝しなさい」

なぜ俺に言う。そもそも言われるまでもなく、感謝するさ。何てつたつて見た目もいい。重箱に詰められた玉子焼きや煮物などが実にいいね。

「これは中々の出来映えですね。普段運動をしないと空腹も早まるようです。それを差し引いても食欲をそそののだから、本当においしいと思いますよ」

なんて言つて、古泉はおかずの玉子焼きを口に運んでいた。先に食うな。

俺はあわてておにぎりに手を出した。古泉だけなら問題は無いが、

意外なほど長門がよく食うからな。現にサンドイッチも二つ目に突入している。

「うまいですよ朝比奈さん」

「うふふ、ありがとうキヨン君」

「ちよつと！ ペース速すぎよ！ あたしの分が無くなるじゃない！」

まるで体育祭の延長のような感じで、SOS団の昼食は始まった。始まってすぐ、

「そういえば飲み物が欲しいわね。みくるちゃんある？」

朝比奈さんは思い出したように口に手を当て、

「あ、水筒にお茶を入れてたのに忘れちゃいました……」
申し訳なさそうにあたふたした。

怒るかと思つたハルヒは妙に納得している。

「それよ、みくるちゃん。ドジつことはなんたるかを理解しているわ！ さすがにあたしが見込んだだけはあるわね」

「え、と……すみません」

ハルヒが俺に視線を向けてきた。なんだいったい。

「キヨン、とりあえず喉が渴いたから五人分の飲み物でも買つてきて頂戴！」

なにを言いやがる。俺はゲームに負けた覚えはないぞ。もちろん罰ゲームに進展することだつて無いはずだ。断固、抗議する。

「いいからさつさといつてきなさいっ！」

ハルヒは完全に勝気な表情で食堂の方を指差していた。まるでどつかのガキ大将だな。

俺は仕方なく立ち上がり、ブルーシート脇に脱いだ靴を履いた。

「あ、キヨンあたしはウーロン茶でいいわよ」

水でも飲んで。どうせ味わっちゃいないだろうに。

「長門、それと朝比奈さんは何がいいですか」

朝比奈さんは恐縮した面持ちで、

「あ、同じでいいです」

心地よいまでの小さな声で仰った。ハルヒに右倣えをした形だろう。ハルヒよ、これ位の謙遜を見せてみる。

長門に関しては、ただ俺を見つめ続けることに終始し、

「長門もウーロン茶か？」

とだけ確認を取った。アナログ電波のゴーストのように、辛うじて同意の動作が見て取れる。

「お前は？」

一応聞いてやらんとな。

俺は古泉にただ飲み物の種類を聞こうとした。それだけの筈である。断じて己の立場を省みて視線に乗せたわけではない。わけではないのだが、

「いえ、僕も一緒に行きますよ。お一人では不便でしょう。袋の代わりにはなります」

などというらん気を使ってみせた。

「さすが古泉君ね。礼節が身についてるわ。キョンも学びなさいよ」
お前が言っな。

そんなわけで俺と古泉が、静粛ながらも忙しない三人娘を置いて、さして感動の無い普段よく手にする飲料を入手しに行くこととなったわけだが、俺にはわかっていた。古泉は気が利く奴ではあるが、この様にあえて二人になる状況を演出する場合、必ず何かがあるのである。気を使ってみせたというのはそういう事だ。

「またなんか問題でも起きたんだろ？ やっぱり……ハルヒか」

古泉は一瞬真剣な表情になり、すぐ崩した。

「おや？ さすがに付き合いが長いと察して頂けるものなのですね。うれしい限りです。ですが心配には及びませんよ。涼宮さんに関係はありますが、問題ではありません」

じゃあ何なんだよいったい。下手なクイズ形式にしてみる、正解時には多大な褒章を要求するぞ。

「実は一つ提案、といいますが、挑戦してみたいことがあります。あなたはこの体育祭で余計なことはすべきでないといいました。そ

れを実行したいんですよ」

少々意表を突かれた。

「まあ……いいんじゃないか？」

「そうですね。安心しました。これで心置きなく“敵”としてあなた方に挑めると言うものです」

話が見えてこんが、状況が一変したことはわかる。

「なんのつもりだ古泉」

古泉は恐ろしいくらい演技くさい、まるで特撮物の悪役みたいな笑みを浮かべ、

「これから涼宮さんに戦いを挑みます。お気づきですか？ 現在あなた方のクラスは総合で一位にいますが、二位は僕ら九組なんです。つまりは午後の競技で充分逆転が可能と言うことですよ」

正直信じられない。古泉がなぜそのようなリスクを犯そうとするのか。普段のこいつならばリスクは回避すべき最大の懸案事項なのだ。

「ハルヒが暴れるかもしれんぞ」

すこし脅しもこめて言ってみた。これまたうそ臭い感じで驚きを見せる。

「あなたがそう思うのですか？ だとしたらそれはすぐに偽りだと見破れます。最終的にはあなたが涼宮さんを信じると僕は思っていますよ」

まあ思うのは勝手だよな。でもそれを確定事項のように語るな。「逆説的な考え方ですよ。裏切ることで、逆に信頼もしているということです。正確にはもっと別の考えもあつたりするのですが、それはおいおい話します」

どうやら気持ちは決まっているらしい。これ以上は話しても無駄のようだ。俺と古泉は無言で自販機まで行き、ハルヒの元へ折り返した。古泉はなにやら楽しそうだが、今後のハルヒを考えたらまた違う疲れが出たね実際。

その後、古泉はハルヒにさりげなくも挑戦的に所属している九組

が勝つと宣言してみせ、ハルヒは簡単に乗った。

「へーいいじゃない。まあ勝つのは絶対にあたしだし、全然問題ないわ。そうねただ争うのもつまらないし、もし負けたらどちらかが言うことを一つ聞くつてのはどうかしら」

などと息巻いていた。表情は引きつっていたから意外だったんだろうな。一番噛み付かなそうな奴が噛み付いたんだから。それに、

「古泉君、反旗を翻したからには、SOS団副団長は一時凍結よ」

なんていつてきたからいよいよ話は大事になった気もする。その場にいた朝比奈さんはひどく困惑して無駄な仲裁に入り、長門は俺が買ってきたウーロン茶を美味しそうに坦々と飲んでいた。

そこで話は午後に戻る。何故ハルヒがクラスに対して更なる熱意とやる気を見せているのかが理解いただけたであろうか。まったく困ったものである。一時はクラブ対抗リレーで過去最高に近く一致団結していたというのに、SOS団という非公式の団内で勃発した偽装内紛のせいで、クラス間の対抗戦にまでなってしまった。かく言う俺も事情は知っているが、ここまで来て総合二位などという、最も残念で歓喜の少ない順位に甘んじたくないと考えるクラスの一人に成り下がっている。こら谷口、しっかり走れ！

百メートル走ではやや我が五組が優位に競技を運んだ。俺としてもハルヒの叱咤のみを背中に受け、思いっきり後押しされながらなんとか一番最初にゴールテープを切ることが出来た。最後の締めはハルヒが走るようになっており、勝てばギリギリ最終競技であるクラス対抗リレーで、逆転が可能だと言うところまで扱ぎ付けることが出来る。ハルヒが負けるわけがない。そうは分かっているても自然と声を張り上げたが。

ハルヒがスタートと同時に一気に加速して百メートルを走りきる。正直みんな声を出すのに精一杯で競技を見ていないのではないかと思えるほどだ。それでもハルヒがゴールした後は、今まで以上の怒号のような轟音が鳴り響いた。しばし逆転への可能性が出た余韻に皆が浸った。

そしていよいよ最後の競技を伝えるアナウンスが放送され、全学年のクラスを代表する五人が続々とゲート前に集合していた。

五組でも競技者が皆に肩を叩かれ、激励をされる。なぜか俺もその中にいるから驚くばかりだ。この場に来てようやく学期あけのホームルームに、ハルヒが俺を巻き込みやがった事を嘆いたね。まさかただのリレーにここまで重圧が掛かるうとは思っても見なかった。その重圧の中でも、特にハルヒには声が掛かった。

「おまえSOS団ばっかじゃなくクラスでも力を出せよな！」

「涼宮さんなら勝てるよ、がんばって！」

などという、普段なら絶対かけられない問いかけに、しどろもどろでハルヒは答えていた。もっといつもどおりに強気な姿勢を出せばいいものかと思ひ、そのことについて言ってみようとも思ったが、まあいいだろう。今回の件で少しだが、何かが劇的に変わったのかもしれない。そう思いながら俺はハルヒと共にゲート前に向かった。

グラウンド外はボルテージが最高潮にあがり、そこへ各競技者がいつせいに飛び出す。

ふと隣にいるハルヒを見ると、これまた意外なほど緊張したような、ようするに機嫌が悪そうな表情をしていた。普段感じたことのない感情を理解できていないようなふうである。あの天下無双、絶対勝利なハルヒがだ。俺は思わず苦笑いを浮かべて、思っていた事を口滑らしてしまった。

「ハルヒ、どうせいつも通り勝ちに行くんだろ？」

一瞬しまったと思った。なんせ普段とは感情の波が違うので、どういう反応が返ってくるのか検討もつかないからな。だが、

「……当然よ！」

普段SOS団で見せる笑みを見せる。涼宮ハルヒは涼宮ハルヒだった。

移動をして気づいたが、俺は最終走者から二番目で、アンカーはハルヒである。奇しくもSOS団での順番と一緒にあり、違うのがバトンをもたらった奴が走ってくるのではなく、隣にいるって事だ。

「実はあなたと真剣勝負をしてみたいと思っていたんですよ。これも反旗を翻してみようと思った要因の一つです。それに、この状況はとも不思議です。そうは思いませんか」

俺は古泉の方を向かない。もう間も無くスタートを示す合図が鳴り響くと思った矢先、体育祭を締めくくる最後の競技がスタートした。第一走者から決して五組は早くなく、トップは九組だった。だが第二走者にバトンが渡る際、一気にその距離が縮まる。バトンの受け渡しが無視してスムーズだった。完全に練習の成果だと思う。

隣で古泉が話を続ける。

「僕はSOS団の選手として走った際は、真剣に勝とうと思って走りました。もちろん涼宮さんが望んだことですし、当然の事です。ですが僕自身が勝ちたかったんですよ。涼宮さんの願いだからではなく、SOS団として」

俺は走者を眼で追いながら、声援にも耳を傾けていた。鼻奥目に見てもうちのクラスが一番声を張り上げて応援している。まあ優勝が掛かっているってのはあるが、それでも九組にはすでに勝っていると思った。ほぼ横一列に第二走者が第三走者へとバトンを渡したようだ。俺はいよいよだと思い、バトンを受け取る体勢となった。

古泉はと言えば、最後まで話し倒すつものようだ。

「このリレーは今の僕の状況を表しているようにも思えるんですよ。争っているのがもしSOS団だとしたら、僕は果たして全力で走るのだろうかと考えてしまいます」

少しだけ古泉の顔を見たが、なにやら決まりの悪い顔で静かに微

笑んでいた。もう間も無く第三走者が来る。一番は九組なので古泉が一番内側に立つ、俺は二番目だ。バトンをもらう為に少し走り出し、流れの中で手に取る。そこからは前しか見えない、クラブ対抗リレーと一緒に。走りながら声援が良く聞こえる。SOS団とは人数も盛り上がりも違うから比較にはならんが、やはり大きく聞こえる。俺は負けたくない一心で走り、ハルヒが徐々に大きく見え始め、渡すときに何か声をかけるべきかとも思ったが、やっぱりやめた。今更俺がどうこう言っただって仕方がないし。第一ハルヒだって分かっているさ。だから俺は隣でひざに手を当て息をしている奴に話しかけた。

「お前の言っていることは一々よくわからん。取り合えず走ればいいだろ。結果なんか分かりきっている事だ」

俺も古泉もハルヒを見ていた。あつという間に均衡していた争いに決着をつけ、それでもバカみたいに加速して一人先走っているかのような圧倒的差を見せ付けていた。ゴールテープを切ったと同時に本日最大の歓声が響き、鳴り止むには時間が掛かりそうな按配である。ハルヒとはいえば、どうしていいのわからんのだろう。バトンを持った片手を高らかに上げ、仏頂面をしている。

「ほら見る。こんなもんだ。まあどっちにしてもたいした事は無いさ、SOS団にいる限りは罰ゲームくらいで事はすむんじゃないか？」

今度は本当に決まりが悪そうにではなく、決まり悪く古泉は微笑んでいた。

「出来れば軽い罰ゲームでお願いしたいものです」

体育祭の競技はこれで全てが終了した。

生徒たちはグラウンドにクラス別で並び、総合順位の発表を待つ態勢になる。早朝では眠気による倦怠感に包まれた開会式であるが、閉会式も運動後の状況であり、疲労感に包まれたものになる。まあ全国共通の状態といえなくも無いだろう。

校長の重要であり、どうでもいい話を早々に切り上げ、発表が始まる。三位のクラスから始まって、代表者が小さなトロフィーをもらう。同時に拍手と歓声が少し上がる。二位は九組であった。リレーに負けたのだから結果は分かっている。代表者が表彰台に上がって大きめのトロフィーを貰う。同時に大きな歓声と大きな拍手が送られた。

そして総合優勝クラスの発表である。何年度の何回目とかいう、どうでもいい情報が述べられ、一年五組の名前が挙がった。本来はここで学級委員長が前に出るのだが、今回に限ってはそんなことは誰も求めてはいないし、出来まい。誰もがハルヒのほうを見ていた。ハルヒなぜあたしがと言いたそうな顔をしていたが、しぶしぶ前へと足を運んだ。表彰台に立ち、無駄に派手で大きいトロフィーと、随分年季の入った優勝旗を校長からもらう。拍手や歓声は起きず、静寂があたりを包んだ。

ハルヒは面倒くさい感じありありで優勝旗を掲げ、そして不器用に笑った。

五組を中心に最大音量の爆音で歓声上がり、夏の花火のような音に聞こえる、大きな拍手で祝福されていた。

俺はと言えば、終わったという疲労感と、やりきったという達成感を強く感じていた。出来れば普段見せている、太陽フレアのようにエネルギーを放出していそうな笑顔を見せて欲しかったが、まあ

いつかはそうなるだろうと思い、今はこれでいいだろうと感じていた。

それから無事体育祭の閉会式も終了し、生徒たちは各教室へと足を運び、短いホームルームをして帰路についた。五組では盛大に今回の快拳を祝い、騒いでいた。一番喜んでいたのが岡部教諭だったのは少しも意外ではない。あの適当なホームルームがこの様な時間に繋がるとは思ってもみなかったに違いない。俺も思っていない。これから祝勝会だと息巻いていたが、体育祭で疲労困憊の生徒がついていくわけがなかった。幸い部活動も今日は休みだし、みんな家に帰ることだろう。

もちろんSOS団は年中無休で活動中であり、体育祭後も例外ではないらしい。祝勝会はSOS団で行なわれた。場所は相変わらず部室であり、朝比奈さんも長門も古泉も一緒である。ハルヒは知らんだろうが、ここまでの苦労は誰が還元してくれるのだろうかと思いつつ、結果としてまあいいかとも思えた。

ああ関係が少なからずあるので言っておくと、祝勝会に必要な食料及び飲料は全て古泉の提供となった。準備に俺まで借り出されたのは納得できん事の一つだ。

「いいじゃない。楽しいことは準備から楽しむものよ!」

まさにハルヒである。

結局俺と古泉が、わざわざクソ長い坂道を下ってRPGのお使いイベントみたいなことを実行した。

道中、無言で歩くのも変だと言う配慮なのか、古泉が変な質問をしてきた。

「僕や朝比奈さん、長門さんにとって、涼宮さんは違った存在であるというのが現在の状況です。正確には僕、という個人ではなく我々と表現したいですが。あなたにとつての涼宮さんとはどんな存在なのですか？」

俺は歩きながら考えた。例えるならマイナスイオンみたいなものか、と。マイナスってのはネガティブなイメージがあるだろう。でもマイナスイオンは名前ほど悪いものじゃない。プラスイオンは体に多いと良くないらしいから、適度にマイナスイオンが必要なんだというのを聞いたことがある。適材適所ってことさ。多すぎても有り難味はないが、少しならあってもいいって事だ。だが、

「さあな。俺にはわからん」

あえて俺はこう答えた。

「そうですか」

古泉は理解していると言ったようなニュアンスで相槌をうつ。

太陽もだいぶ陰り、ふと夏であればまだまだ明るかったはずだという思いに駆られる。坂道から上がってくる逆風は程よく肌寒く、夏が終わりを向かえ、秋が追走するように到来したのを実感するのは、十分だった。

エピソード

学校つてのは勉強をするところにも関わらず、意外なほど体育関連の行事が多いのはどういことだろう。正直迷惑といつていいかもしれない按配である。二年に進級しても相変わらず放課後は部室塔の一室を占領した状態が続いているし、休日無しで召集が掛かるのは当然の流れであった。俺はと言えば、久しぶりに一人部室へと向かう事となったのだが、実の所ハルヒは来週行なわれる球技大会に向けて対策を練るとかで、クラスの連中を捕まえて会議をしている。球技にセンスを感じなくなって久しい俺としては、同情するばかりである。

部室に着いて、意外に思ったところでは、長門が隅っこで読書しておらず、朝比奈さんがトレードマークとも表現可能なメイド姿で給湯を試みている姿も見えないという所である。かわりに居たのは、見たことも無い、どこかの国の伝統的テーブルゲームをいじっている古泉だった。

「何だそれは。ルールのよくわからんゲームを持つてくるな。今日時間をつぶす物がなくなるだろうが」

古泉は相変わらずの面持ちで、見事なフレンチ料理を愛でるシェフのような微笑で語りかけてきた。気持ちが悪いぞお前。

「実は近所の骨董店で偶然見つけたものなんですよ。解説書も付いているのですが、何分解説ができないので、長門さんにでも翻訳を頼もうかと思って持ってきたんですよ。ところでお一人で来るとは珍しいですね。涼宮さんとケンカでもしたんですか？ 僕としては避けていたきたい事象です」

不愉快だ。夫婦喧嘩のように語るな。喋るな。

「ハルヒなら来週の球技大会に向けて弾け回っているよ」

俺は答えながら、冷蔵庫から飲み物を取り出し、古泉に対面する形で座った。

「なるほど。それは大変ですね。土日にもまた練習ですか。ですが涼宮さんも変わりましたね。去年は同じようなことを実行するのになり遠回りをしていましたからね」

お前はまだいいだろう。時間移動も無かったんだ。

「一年経てば誰だって少なからず変わるもんだろ。ハルヒだって例外じゃないさ」

古泉は納得したように頷いた。

「そういえば……今回は涼宮さんがご自身で発案されたのですか？」

「ああそうだが？」

古泉はまるで弁護士のような、鋭い視線で笑みを向けてきた。嫌な予感のする笑みだ。

「去年のことですが、どうも腑に落ちない点があるんですよ。たしかに涼宮さんは変わりました。ですが以前の涼宮さんなら、果たして素直にクラスメイトの前で『お願い』が出来たのでしょうか。涼宮さんには申し訳ないですが、僕には想像もつきませんね。朝比奈さんも長門さんも現場には居合わせなかったと仰っていました。でもあなたはその場にいた。そこで疑問が発生するんですよ。果たしてあの涼宮さんを『お願い』させるのに、あなたがどんな行動を起こしたのか」

思わず口の閉じ方を忘れて絶句してしまった。相変わらずどうでもいいことに対してこだわる奴である。正直な話、あまり思い出したくない事柄のベストファイブには入るであろう出来事だ。一位はもちろん閉鎖空間でハルヒと閉じ込められた事だが、それとは違う意味で忘れない、てか忘れていたことだ。

「さ、さあな。昔過ぎてもう覚えちゃいないさ。なんせあの時は必死だったからな」

古泉は少ない時間沈黙し、普段の表情に戻った。

「それは残念ですね。ぜひ教えていただきたかったのですが、あなたの新しい一面を垣間見れると期待していたんですよ」

そいつはすまんな古泉。こいつは墓に持っていくべき情報だ。ハ

ルヒが借り物競争で、一体どんな命題の封筒を引いたのかってのと同じでな。

エピローグ（後書き）

これで涼宮ハルヒの疾走は終わりです。ご愛読ありがとうございました。

また、この後からは『続・ミステリックサイン』を連載していきますので、よろしければ引き続き読んでいただけますと幸いです。

*『続・ミステリックサイン』につきましては、主として執筆している作品の合間に執筆する事となりますので、更新は不定期で遅れてしまいます。申し訳ございません。

続・ミステリックサイン

涼宮ハルヒが退屈と言う名の精神病にかかり、特効薬としてのが成り行きでなのかはともかくとして、マヌケな野球大会に参加し、巨大なカマドウマと対決するなど、数々の愚かしい所業をSOS団がこなしてきたのは記憶にあるであろうか。あると思って話をする。これらの出来事は季節で言うところ梅雨時であり、学生の感覚で分かり易く説明するのであれば、夏休み前の事であった。夏休みに入ってから忙しく無人島なんぞに行つて茶番劇を演じていたことを思い出すと、正直言つてしんどいでは片付けられない出来事であり、損害賠償は誰が貰つて、どこに請求すべきなのかを確認せずにはいられない感じであつた。ゲームで言えばそろそろ最強の防具くらいはほしい頃の経験値を貯めた感じだつたと思うね。

そこからの夏休みが終わるまでの話。まあ涼宮ハルヒが暴走した終わらない夏休みの話はいいとしてた。実はSOS団の活動として行なつた愚行で語つていなかった話があつてだな、そいつはひつそりと夏休みの間に行なわれていたのだが、皆は覚えているであろうか。あの、ハルヒが製作したサナダムシが管を巻いているようなSOS団のエンブレムの話を。現在ZOZ団のエンブレムとなつていくが、以前に話をした部長氏の失踪事件のほかに、SOS団のエンブレムを怪しいリンクからクリックして見てしまった八名の犠牲者がいてだな。実はその事後処理が行なわれていたのだよ。夏休みの合間に。

その犠牲者の内、部長氏は何かのメタフィーとやらが支配する空間に閉じ込められ、カマドウマを模した情報生命体の親戚か何かに捕まっていた。でもそれ以外の七人についてはすぐに解決できなかったのだ。だから夏休みに救済活動を行なつた。

なぜかって。ハルヒにばれない為さ。あの唯我独尊天上天下なハルヒのことだ、俺や朝比奈さん、長門に古泉がこそこそと出かけて

は何かを行なっている事をかぎつけて、興味を示さないはずがないだろう。だからこそ仕方なく、第一回目の合宿から帰ってきて、すぐに行動へ移すこととなったのだ。

始まりは孤島から帰宅し、疲労困憊で泥のように寝た次の日の朝、古泉からの電話であった。それはまるでアクションゲームのごとき出来事が始まるとは、まったく予想させないような、日常にあつて当然な一コマであつた。

続・ミステリックサイン2

正直に言おう。俺は今回の件について、実は完全に忘れていた。中学時代に行った臨海学校の晩飯は何だったかという記憶と同じ場所に、今回の件は保存されていたに違いない。パソコンで言えばそこはゴミ箱だ。

だが仕方の無い事としたいわけで、つまりは俺の脳内デスクトップに貼り付けるショートカットは、涼宮ハルヒという次から次へと新たな問題を生み出す根源のせいで整理不能なところまで陥っているのである。

そんなわけで昨日孤島から帰ってきて疲労困憊の俺としては、やたら爽やかにむかつく声を発する古泉のモーニングコールに脳内ゴミ箱を漁る作業をせねばならんのは純粋に辛かった。

目が覚めてまだ肉体的に活動を拒否する中、俺はなんとか古泉の言う問題を理解しようとしていた。古泉の話によるとだな、どうも面倒くさい夏休みの宿題を後回しにしていたツケが最終日に爆発するのと同じ要領で、例の問題が今ここで急浮上したんだとか。なんでも長門が延命処置の如し要領で手を打った策が限界に達し、被害者の状態が日常生活に支障をきたし始めているらしい。

ああ、ちなみにその対策ってのは部長氏が砂漠に閉じ込められていた様な事が起こらないように、そいつと同じような体験を夢の中で被害者に体験させている事を指している。被害者たちに実質な被害を出さないための処置を施しているわけだ。長門曰く脳のパルスを強制的にメタファー空間とリンクさせ、擬似的な情報共有をさせることによってその空間を誤認識させているんだとか。よくわからん。

端的に言えば毎晩覚えていない夢の中の一つに、悪夢を追加で見ているのだらう。覚えていないとはいえ気の毒な話ではある。

問題ってのはそいつが悪夢だけでは誤認識できなくなり、実際に

被害者が影響を受け始めている事らしい。

『お解かりですか？　つまり早急な対応が必要ということです。あれから大分時間もたっていますし、事態はいつ急変してもおかしくないと言断してもいいでしょう。ちなみにこれは長門さんのお墨付きな情報ですので、確実と言って問題ないでしょう』

『……ああ、事情はわかった。で？　具体的には何をやるんだ』

『そうですね、とりあえず一度みなさんとコンタクトを取りたいと思っています。朝比奈さんと長門さんにはすでに連絡を入れているので問題はありません。場所はいつもの喫茶店に集合ということでもちろん強制はいたしませんし、あなたの判断を否定したりもしません』

妙に空々しい言い方である。俺としても、そりゃあ旅行帰りの翌日にまた体を動かすのはしんどい。だがSOS団が起こした問題が現在進行形で語られているのを尻目に、自分だけ休みを取ろうなどと考えるほど俺は豪胆な性格を持ち合わせてはいない。

行くとも。行かねばなるまい。ハルヒの起こした問題はSOS団が決着をつける。これはもう夏の星座座標よりも正確な決まりごとだ。『わかりました。それでは後ほど会いましょう。ああそれと、くれぐれも涼宮さんには勘付かれないようにお願いします。これはあくまで涼宮さんを除いた僕たちの問題ですから』

それだけ言つて、古泉は電話を切った。まったくもって理不尽な話である。たまにはハルヒの起こした問題をハルヒ自身に解決させてやればいいんだ。あいつのことだ、きつと喜び勇んで問題に取り組むに違いない。なんてったってハルヒの望む不思議な出来事のオンパレードだからな問題の数々は。

実現不可能な解決策を構築してみつつ、早々に諦めて肉体疲労を何とか若いからという安直な考えでやつつける。俺は出かける為の準備にとりかかった。部屋の外からは妹が近づいてきているのである、どたどたという足音が響いている。

夏休み序盤である現在、そこと無く気心の知れた人間に会うのは、通常の感覚で言えば楽しい出来事なのであろう。

だが、こいつはあくまでも普通という日常での感覚な訳で、昼前の見慣れた喫茶店の六人席で、前方には宇宙人と未来人が仲良く座り込み、隣にはやたら爽やかで少し肌を小麦色に焼こうものなら、それこそ海の家に張つてあるポスターのモデルにピッタリな超能力者が座っている光景は、断じて日常ではない。

日常で無いといえ、昨日まで行なわれていた目的不明の合宿でも同様に、長門は珍しく制服姿ではなく、薄いグリーンのワンピースを着こなしていた。できれば麦わら帽子を被ってもらいたい按配である。朝比奈さんは夏らしくノースリーブに輝かしい二の腕を露にさせ、孤島帰りの若干赤く日焼けした笑顔を展開してくださっている。これらの光景だけ見ると、どうにも緊急事態という言葉は似つかわしくないように思えるのだが、古泉の話を聞くとそうでもないらしい。

「連日の顔合わせで申し訳ないと思いますが、実は結構大変な事態になっていくようです。どうにも夢として処理できていた事象が、実際に現実として被害者に襲い始めているようなのです。ですよね？」 長門さん

長門は古泉の確認に、まあ分かる人間にはわかる程度の動作で頭を縦に揺らす。

「その説明に間違いは無い。現状、ウェブ上に張られたハイパーリンクから対象へアクセスをした人間の内、四人は確実に以前のような空間に飲み込まれている」

なるほど、つまりその四人は以前の部長氏同様バカげた空間に閉じ込められ、何かしらの事態に巻き込まれているというわけか。で

もまてよ。なんで四人なんだ。

「長門、一つ質問していいか？ たしかあのエンブレムを見ちまつた人間つてのは八人いたはずだよな。一人は部長氏だから解決してるとしてだ、それでも七人はまだ手付かずな状態だろう。それがなんで四人なんだ？ 他の三人はどうなってるんだ」

最もな疑問だろう。八人と同じものを見ているはずなのに、被害の人数が合っていないのはおかしい。と、思ったがそうじゃないらしい。

長門はフリーダイアルの応答テープのように的確に言った。

「現状、早急に対応が必要であると該当する人間は、涼宮ハルヒが作り出したインヴォーションサインを直接閲覧した人間に限られる。情報生命体が増殖することを目的として展開したハイパーリンクから閲覧した人間は、間接的にサインに接触したことになり、直接的な被害は少ない」

なるほど。あの数百テラバイトのシンボルマークは直リンの方がやばい代物だったって訳だ。でもまてよ。要は直接サイトを閲覧した四人つて事だよな。あの奇特なサイトをわざわざ検索かけてみる暇人が果たしているのだろうか。

そんな疑問が脳裏によぎったが、長門の補足で解決した。

「直接サインを見た人間は全て北高の学生」

長門はそれが答えだと言わんばかりに視線を俺に向けてくる。

そこで俺は推理した。あの奇特なサイトを曲がりなりにも見ようとした愚か者は、おそらくSOS団に何らかの関与があつた人物に違いない。ということは、俺が知っている人物の可能性が高いってわけだ。これは勘だ。でも長門から来る確定の二文字を送信したような視線が、妙に俺を自信付けた。

「谷口や国木田か？」

長門は先ほどと同じように、ゆっくりと肯定を示した。それに朝比奈さんが補足する。

「それとあの……鶴屋さんも見てくれていたみたいで……あたしが

紹介したから……」

申し訳なさそうにうつむいてしまう。いやいや朝比奈さんは悪くありませんよ。そもそも天文学的な確立であんなシンボルマークを作るハルヒが問題なんですよ。

これで三人か。あと一人とは誰なのであろう。正直検討がつかない。

ここで時間切れ、とでも言うように古泉は最後の一人の名前を言った。

「あと一人は、覚えているでしょうか？ 部長氏の失踪の搜索を依頼してきた人物。喜緑江美里さんです」

これには正直驚いた。彼女はたしか消息不明の人物であつたはずなのだ。だからこそ一瞬長門が一枚かんだという在らぬ疑念を抱いた要因でもある。その彼女が被害者の一人として上がるとは、なんともきな臭い話である。

だつてそうだろう。部長氏の異変を依頼しに来たのは彼女なのだ。それが彼女はSOS団のサインを見ていたという。これはいったいどういった矛盾なのだろうか。タイムトラベル的に言えばパラドックスが起こっているのと同じである。SOS団のシンボルを見た彼女が、どうして平然と俺たちの前に現れ、部長氏の搜索を依頼できるのだろうか。

俺は何となく他のメンバーを見渡した。長門を除く二人は共に何か考えを巡らせているようであつた。決して脱出不可能の回廊を上り続けるかのように。

そしてふと古泉が神妙さのある表情から、諦めにも似た笑みを浮かべ、

「とにかく、ここで色々と思案を巡らせていても事態は解決しません。今は出来ることから順番に片付けていきましょう」

これで思考の同道巡りは終わりといわんばかりに場の空気を変えた。まあ仕方が無いだろう。解せないことはどんなに考えても解答へはたどり着きはしないものさ。こいつは夏休み前の期末試験で経

験済みだから間違いない。

「それで？ 具体的には一体どうするんだ。谷口や国木田、それに鶴屋さんは例のとんでも空間に閉じ込められているんだろう？ また前みたたく家に大人数で押しかけるのか？」

「それについてなんですけど、まずは喜緑江美里さんを除く三人を分担で救出していきませんか。そうすれば一人につき一人、個々に動いて解決することが出来ますし、なによりみなさんが力を出し惜しみせずにすみますからね」

まるで切り札は敵に見せないとしても言いたげな感じである。正直あまり気持ちのいいものではない。

だが、まあこれは団員メンバーの裏設定上として仕方の無いことなのだろう。こればかりは下っ端が徒党を組んでもどうしようもない事情があるに違いない。

でもまてよ。三人につき三人が動くなら、誰か一人は余る形になるではないか。この場合該当する人物など間違うはずも無い。

「……じゃあ今回、俺は休みなわけだな」

一瞬沈黙が走る。それぞれが三様に申し訳なさ一杯の感情を俺にぶつけてくる気がした。いや、別に気まずくなることなど何も無いわけだが、これはいつたいたいどうしたものなのだろう。周りの視線がどうにも痛い。

そんな気を使わせてすまない的感情に心を支配されそうになり、場の空気を和ませる為に何か自己犠牲的ギャグでもかまさねばなるまいかと、配慮と覚悟を決めかねていた俺だが、どうにもこの視線は仲間はずれな状況になった人間をいたたまれなく見つめる視線ではなかったらしい。

解答は申し訳なさ一杯に喋りだした朝比奈さんが教えてくれた。

「今回一番大変なのはキヨン君かも」

「……は？」

「あのね、実はみんなそれぞれの対処をするのに精一杯で、どうしても二人は作業に参加してもらわないといけないの。それでみんな

とペアを組めるのは、その、キヨン君しかないから……」

げ、つまり俺は……。

「全部の救出作戦に参加しろと？」

俺はさっきまでのいたたまれない空気はこれだったとかと納得しつつうなだれつつ、一拍の静寂の後に訪れた団員たちの声を聞いた。

「……………そう」

「よろしく願います」

「その、ごめんね？ キヨン君」

やれやれ。

続・ミステリックサイン3

状況打破の為とはいえ、納得しがたいものは納得しがたいのだ。それでもやらねばならんのは社会の仕組みなのか誰かの陰謀なのかは定かではない。

色々と言句はあるが、現在俺は古泉と共に第一陣として国木田宅へ向かっている。喫茶店での作戦会議後、団員は二手に分かれた。他の二人は何をしているのかというと、実はサボっているわけではなく、ハルヒの気を引くための行動に出ているのだ。おそらく何か奇妙な理由のついた買物でも行なっているのだろうが、想像するとこちらの仕事も悪くないと思えてくる俺は、相当病んでいるに違いない。まあそれでもこちらの行動に勘付かれないようにするには仕方の無い犠牲であろう。

「僕としてはどちらも同じくらいやり甲斐のある仕事ですよ。涼宮さんと行動するのが仕事と表現できるかはわかりませんが」

そんなものかね。まあこれから行くのであるう怪しい空間のことを思えば、考えを改めてしまいかねないかもしれん。

国木田宅への道のりは季節的にかなりきつい、距離自体は問題ではないのだが、何といっても今は夏真っ盛りである。おまけに昼の炎天下は容赦なく体力と水分を俺から奪い去っていく。隣に行く古泉も実際はきついのであるう。笑顔の裏に疲労が漂って見える。実際ついたのは一時間と掛からなかったが、体感的にはサハラ砂漠を遭難してやつのことオアシスに着いたら、その水は温泉水だったという感じだ。遊びに来たわけではないから当然だ。

国木田宅について、さてお邪魔するかと俺がインターホンに指を向けたとき、古泉は冷静な表情でその行為を止めた。

「待ってください。真正面から行っても意味はありませんよ。ご家族が出てきて対応されるだけです。それに、今この建物事態が一種

の閉鎖空間となっています。

何だと。……などと驚くことはもはや無い。以前の経験があるのだ。心の準備はとづくに出来ている。

「そうかい。じゃあどうやって国木田を助けるんだ」

古泉は若干得意げなニュアンスを含んだ笑みを見せ、

「なに、簡単なことですよ。前にあなたを涼宮さんの作り出した閉鎖空間へお連れした時と要領は同じです。少しの間だけ目を閉じていてください」

当然のように言つてのけた。本来ならごめんこうむりたい所だが、まあそうも言つてられん状況である。これが朝比奈さんであれば喜んで目を閉じるんだがな。

俺は渋々ながらも目を閉じて古泉の合図を待った。
待つこと三秒。

「もう大丈夫です。目を開けてみてください」

俺は、何も思ふことなく目を開けた。と、言うのも以前の閉鎖空間のこと考えたら、別段驚くこともないだろうと考えていたのだ。

だが、目を開けて辺りを見渡した途端。驚きは無意識のうちに声となり、疑問符となった。

「おお！ こりゃ……一体どういう事だ？」

目の前に広がるのは、とは表現がおかしい。正確には俺たちを覆う空間は、以前の灰色な閉鎖空間とは違い、部長氏の時に行った砂漠でもない。そこは狭く四方をコンクリートで形作る、まるで窓や教室のない学校の廊下のような場所であつた。天井からはうつすらと蛍光灯の光が辺りを照らし、一メートルくらいの等間隔に設置されている。少し歩けば目の先は壁のようにみえる急角度の曲がり角。その先も曲がり角。それは言うなれば殺風景な迷路であつた。

「迷路、だな。これも例の閉鎖空間なのか古泉」

「ええ、正確には似て非なる空間ですが、ここが何らかの意思による力が働いた閉鎖空間であるのは確かです」

閉鎖空間の種類など分かりたくもないが、問題は勝手に転がり込

んできやがる。だからこそ経験者としての疑問が発生する。

「前はたしか砂漠のような場所だったな。それが何で今度は迷路なんだ」

「なぜかは分かりませんが、どういう仕組みで迷路になったかは分かりませんよ。ここは被害者の苦手意識が具現化した場所なのです」

また意外な答えである。

「つまり国木田は迷路が苦手だと？」

一拍、古泉は時間を置いて答えを返してきた。

「迷路が苦手かはわかりません。そもそもここが迷路かもまだ分からないのが現状です。ただ以前の部長氏が閉じ込められていた空間からすると、どうやら部長氏は暑い所と、虫が苦手なようでした」

俺は何となく納得して、返事は返さず少し辺りを歩いた。さっきまで炎天下に居たせいか空気はすこし冷えて感じられる。音は何も無く、俺と古泉の足音だけが周辺の壁に反響して聞こえているだけだ。右へ曲がり、まっすぐ進んでT字路をまた右に回ってみる。目の前には通路と同じ幅の階段が広がり、その横には左へ抜ける通路が続いている。

少し歩いただけだが、前回の砂漠とは違った意味で不気味な感じがした。どこを見ても同じ光景な様は、まるで同じ風景の続いた空港の動く歩道を進んでいるような感じである。

「どうする古泉。闇雲に進んでいいものなのかここは」

「そうですね。無策に進むのは危険でしょう。せめてマッピングをしながら進むべきと言えます」

マッピングね。さながらロールプレイングゲームのダンジョンだな。これで魔物でも飛び出してこようものならゲームではすまんが、でもマッピングするにしても道具は必要なのではないか。

「お前紙やペンを持つてるのか？」

「ええ、手帳とボールペンくらいあります。マッピングに適しているとはいえませんが、この際贅沢は言えない状況ですからね」

さも持っていて当然だという感じで言っている。これは俺も同

意できないね。どこの高校生が手帳なんて代物を夏休みの外出に持ち出すのだ。お前は休日も仕事に縛られたサラリーマンか。

「まあいい、とにかくその手帳に道筋を書いていこう。危険だろうが進まなきゃなにも始まらないしな」

「そうですね。では仮定として今僕たちがいる場所がスタート地点です。ここから搜索範囲を広げていき、この空間の全体図を把握していきましょう。現状何が解決策かわかりません。情報収集を優先します」

これで一応行動指標は出来た。目の前に階段はあるが、上るのは後回しだろう。とりあえず今自分たちがいる場所をもう一度くまなく搜索することとなった。

俺は薄暗い通路を慎重に進み、その後ろから古泉が道筋を書き込んでいく。普段の歩調よりはかなり遅いのを自覚しつつ、緊張感と警戒心から歩調を速めようとは思わなかった。角を曲がり、行き止まりでは引き返す。はじめに見た階段のほかにも上りの階段があり、逆に下りの階段もあった。通路中央に穴があって梯子がついている場所まである始末である。その都度古泉と相談し、手帳にチェックを入れるだけに留めてさらに先に進む。あちなみに進み方としては、俺が常に右側の壁に右手を触れた状態で進むという方法を取っていた。いわゆる右手法というやつだな。迷路解決の常套手段である。

「時間は掛かりますが迷うことは無い方法ですよ。闇雲に歩いて同じ場所を同道巡りするよりは堅実です。まあここが迷路という仮定で、あくまでワンフロアを搜索するという前提条件があつてのことですが」

「じゃあ階段を上ると迷うつてのか？」

「断言はできませんが、その可能性はあるといえるでしょう。上りと下りが多数あったので、いくつかはダミーです。そうなれば、ダミーの通路を上り下りする可能性が出てくるのですよ。右手法はあくまで一つの正しい出口を目差す為の手段です。さきほどあった中

央をくりぬいた梯子なんかの場合には基本的に通じませんよ」

まるで迷うことも想定済みのような意見だな。

「一応迷路を抜ける為の方法はいくつかあるんですよ。有名なのは右手法ですが、より複雑な迷路を抜けるのには別の方法が必要だったりします。トレモア・アルゴリズムというのをご存知ですか？」

なんだそれは。精神の迷路を研究でもした学者かなんかの名前か。
「知らん」

「最も単純で効率的な迷路の回答方法ですよ。全部の経路をしらみ潰し的に試していくというものです。自分の通った道に紙でも壁にでも矢印を書いて、先へ進むんです。もしそこが行き止まりであったなら、戻る方向の矢印を今度は書いていきます。そうすることで徐々に行動範囲を広げて行き、最終的には、最低でも迷路の全距離の二倍を歩けば必ずゴールへたどり着きます」

思わずあきたね。だってそうだろう。誰が好んで迷路を二倍も歩くのだ。ぜひ御免こうむる。

「俺も知ってる。そいつは数撃ちや当たるって言うことわざだ」

古泉のくぐもった笑みが聞こえてくる。

「たしかに仰るとおりです」

そんな会話をしつつ、俺たちは結構な時間を使ってフロアをまわり、ようやく一階分の創作マップが完成した頃は、精神的疲労と肉体疲労でへとへとになっていた。とりあえず最初のスタート地点に定めた上り階段に腰掛ける形で休憩を取った。古泉も同じようで、いつもの余裕を含んだ笑みはなりを潜めている。

「で？ 率直な感想はどうだ。出口は見つかりそうなのか」

古泉は少しだけ困ったように頭を横に振る。

「作りのには迷路のようですが、一概に解決方法が出口だけではないかもしれません」

出口が解決法じゃないなんていう迷路があるのか。少なくとも俺の記憶には無いわけだが。

「このフロアを回って分かった事がいくつかあります。ひとつはこ

の迷路は平面状に広がっているのではなく、立体状に展開しているということ。階段があることから確実でしょう。それに、このフロアは少なくとも最下層でもないというのも発見です。下がさらにあるわけですから、最低でも三階構造の建築物であるといえます」

多重構造の建築物ね。見た目からしてまるで廊下しかない学校ではないか。

「もう一つ、これは何故設置されているのか分からない物がありましたよ」

そんなものあったか。少なくとも俺は一切見てはいない。

「もったいぶるな。さつさと言え。それとも拷問にかけて白状させて欲しいのか？ 残念ながら関節をきめるくらいしかないがな」

「遠慮します。あなたは右手について常に行動していたから気がつかなかったかもしれません。右側面の下にデジタル表記の時計が等間隔でついています」

なんだと。と、あわてて辺りを見渡したら、確かにシャーペンの芯を入れるプラスチックのケースみたいな時計が足元ギリギリにっいていた。

「見たところ通常の時間を表示しているのではなく、時間を計っているようです。それもゼロから計っているわけではない。時間の減少を計っています」

古泉の顔に笑顔は無い。当然だろう。この状況で笑ってられるのは恐怖で感覚を失った人間か、あるいはこのシステムを構築した当事者だけだ。

「つまり……タイムリミットか？」

古泉は強く、はつきりと縦に頭をおろす。

「ただ分からない点もあるですよ。この時計ですが、ついている場所によって時間の表記が短かったり長かったりしています。何か意味があるのでしょうか。今のところある一定の法則があることしか分かりません」

「法則とは？」

古泉はこちらへとだけ言って、俺を時計の前まで誘導する。それに従い俺は時計を見た。デジタル表記では6:10を表示している。続いて隣の時計は6:00とある。他の時計を見ても減ったり増えたりの繰り返しであった。

「お解かりになりますか。実はこのフロアの中から大体十分単位で時計の時間が違うんです。これをみてください」

俺は古泉が差し出してきた手帳に目をやる。そこには丁寧に書かれた迷路のマップが書いてある。いろいろ曲がり角もあるが、全体で見ると綺麗な四角い形をしているようであった。

「この迷路は正四角形で構成されています。おそらく縦百メートル、横百メートルです。この正四角形の中心が一番時間表記が長く、外側になればなるほど時間は短くなっているんです。そして、もしこれが事実だとすれば、なるべく早めに上るか降りるかしたほうがいいかもしれません。なぜだかわかりますか？」

正直この情報がなんの意味を持つのか、俺には全くと言っていいほど分からん。つまりはそこから派生する問題点など分かるはずも無いのだ。俺は仕方が無く古泉の話の腰は折らず、聞き手に徹することにした。

「説明します。これから完全に憶測なのですが、このデジタル時計は等間隔で配置されているのは見て分かりますよね。この時計間の距離がおそらく一メートルなんです。それと、この迷路は一見一つ繋がりに見えますが、作りはどうもそうではないらしい。通路間の隙間を見てください」

俺は古泉に言われた通り、通路を見て回った。言われてみて気がついた。この通路は沢山の継ぎ目が見て取れたのだ。それも正確なサイズで、綺麗に四方を垂直に継いでいる。俺は無意識に声に出していた。

「立方体がいくつも並んでいる作りか……」

古泉の顔が嫌味の無いと言っていい程度に笑顔になる。

「正解です。つまりこの建物自体が、もしかしたら正四角形の形、

つまり立方体をしているのかもしれませんが。そしておそらく外側に行けばいくほどタイムリミットが短くなっている」

なるほどな。何となくだが言いたいことは理解できた。建物は多重構造で、作りは立方体のブロックを縦百、横百、奥行き百に並べた形になっている。しかもそいつは、なにやら曰くのありそうなタイムリミットがついているわけだ。

俺は結論を言う。

「つまり一刻も早く外側のフロアまでたどり着けと」

「確定ではありませんよ。ただセオリーを考えれば、対象を追い詰めるのはタイムリミットが短いほうがいいでしょう。しかも僕たちのスタート地点はどこかもまだ分かっていないのでは、なおさら困難ですよ」

俺はもう一度デジタル表記された時計を見る。

「中心から一番遠いところにあったブロックはあと何時間くらいだったんだ」

古泉は笑わない。真剣に、だからこそ切迫感ある声で言う。

「約一時間です」

合図にしては充分であつた。俺と古泉は、お互いの確認を取るこ
となく、近くにあつた階段を上り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5146c/>

涼宮ハルヒの疾走

2010年10月13日16時40分発行